

女の言いたい放題誌

逐次刊行物

第2年6.11 第11号

国立婦人教育会館  
発行所

特集

我が人生の決断のとき

新連載

オーロラと白夜の国

ワンポイント情報

薬害のこわさ

わいふ NO.224.



# 農文協

東京都港区赤坂7-6-1  
電話03(585)1141(代)

●内容見本呈  
(税込価格)



藤森 弘著

## 健康のしつけ

正・続

(正) \*1030円 (続) 最新刊 \*1250円

画一的な規律で型にはめるのがしつけではない。子ども自身が自らの心と体のひずみに気づき、なおしていきける。そう仕向けるための見方、考え方と実際の手だてをベテラン校医が懇切に説く。健康教育の実用書。

●養護教諭と教師と親とで読みあうと効果的です。



ムがいつぱい  
やまもと くみこ

住んでみて知った  
アジア的豊かさを

。明日の必要より今日の幸せを。尊ぶカレンの人びと。そのユーモラスな人間模様の中に人生を楽しむ術「ム」を学んだ、女性文化人類学者からのメッセージ。

タイ少数民族カレンの村で

(人間選書) \*1400円

## 楽しい雑草クッキング

小園順子著 華たちを食卓へ。毒草以外の草を美しく楽しく、しかもおいしさに調理する38種の雑草料理を紹介。 \*1250円

水こうして飲めば心配ない  
市民のシンフルライフセミナー 味と安全性の手エク&ケア 浄水器選び方や浄化法など目的別が家の使い方を解説。 \*1200円

予防と治療の  
アトピー 献立250  
道藤正孝、山田哲男、紀子、飯野文子著 アレルギーは、体質的に遺伝する原因を発見し予防と治療の献立を写真入りで紹介。 \*1350円

## 父母と子の立場から教育・学校を考える雑誌

月刊



PTAやサークルのテキストに最適!

1部350円(税込) 送料46円

年間直送予約は4,200円

(送料はサービスします)

7月号の視点

## 教育ストレス・先生の場合 秦 政春 他

シドニーの空は何色 うつみ すみえ/教師とのいい関係 伊藤 照子

カケ算ゲーム 三上 敏夫/子どもをめぐるいい話 戸田 唯巳

新しい差別一ガン告知 柳沢 由美子/ふりだしへ 長崎 夏海

## 子どもの思い

戸田唯巳 著

定価 1,339(税込)

送料 260円

## 子どもの人権

一立ち上がる父母・市民一

定価 1,545円(税込)

送料 260円

〒203 東京都東久留米市中央町5-4-8

電話0424-74-9125 振替 東京0-89701

母と子社



あなたのフリースペースです。

4 書いてますこんにちは⑧

大阪府豊中市・高宮みか  
写真・佐々木恵子 文・本人

●特集 我が人生の決断のとき

10 わたしは負けない

一人ぼっちの人生航路

池田知穂

22 中身より外見だ!

花岡由美子

26 家出を決断して得たもの

土田早苗

30 いい日旅立ち

野口とし子

36 今が決断のとき

立花由利

40 二十二歳のターニングポイント

黒田美奈子

45 一人一芸

布施美佐子

48 そして

たまたま自費出版 田沼千恵

55 エッセイスト・クラブ

山内いく子・大沢陽子・中塚末子  
高宮みか・岩田佳子

64 人間マンドラ

志賀壽美子・高松恭子・青木利子

70 わいふ討論会

女にとつての政治  
なぜ女性議員を選ぶのか  
氏田恭子・鈴木喜久子  
氷見章子・間瀬中子



80 **ワンポイント情報**

薬害のこわさ

田崎ゆき・中林美代子・上野敏子

84 **マイ・シヨブ**

マイ・プロフエツション

杉村加代子・広瀬サカエ・小林千歳

91 **読んでみました**

和田好子

92 **サブレシーブ**

高松恭子・多田明子・田崎ゆき

94 **奥さんから外さんへ**

岩下佳代・馬場直子

98 **ズバリ一言**

前田道子・西村和子・中村道子

連載

102 **徹底ガイド・塾の教育システム**

②コンピュータ利用の学習法

レポート・岩田和子

111 **期限なしの支払いの果て** 川崎文子

118 **フリースペース**

いとろスワン・石井しのぶ・定永淳子  
富永悦子・冠野和子

新連載

124 **オーロラと白夜の国** 中田慶子

ルウエー生活事情

131 **情報コーナー**

132 **コミック・不ぞろいな** 田井亮子

カエルたち

136 **ブック情報**

138 **わいわいがやがや**

織田裕子・長井淳子・田川哲子

140 **サークルだより**

次号投稿募集 141 投稿規定 142 編集だより 144

イラスト・カステラネンコ・小宅昌枝・田井亮子・田沼千恵  
西田淑子・幡ハル子・堀切潤子・松本圭以子

書いてます

こんにちは

大阪府豊中市

高宮 みか



わいふが居いた日です。まっさきに目次を見ます。

Writer Information ⑧



私のつたないエッセイは、このパソコンを通して出てきます。

1988年、平和沖縄のシンボル、守礼門の前で。



わいふで生まれ、わいふで育ち、まだわいふから飛び出せずに、書いてます。  
わいふに文を載せることを、わいふ活動、と称しながらわいふを受け取るとき、不安と期待が交差していつもどきどきします。  
日次に自分の名前を見つけると、わいふ誌の重みが急に増したように感じます。  
それは、私のわいふ活動への、参加の証だからです。  
私の文を多くの人に読んでもらえるということは、私の心が多くの人の心にまで拡大され、解放されるよろこびだからです。  
まだ自分、わいふ誌を卒業できそうにありません。



“わいふ関西”の面々と、  
わいふ誌を乗っ取ろうというのが、合い言葉。



自慢できる戦績、1977年、山形県一般女子単複優勝。  
1987年、オール・ジャパン女子壮年補欠の第4番。

車歴25年、  
ここ15年、フォルクス  
ワーゲン・ゴルフ・ディーゼルに  
夢中。今の赤い車が4台目。





老人ホーム・フランススコ ヴィラで父と。



結婚20年記念。頼まれ仲人の席を  
ご両家に内緒でこっそり抜け出して、  
撮ってもらいました。

亡き母の写真の前で。





待望の新刊！ご注文は当社か書店へ

三輪妙子編著

# 女たちの反原発

四六判並製  
240頁、1339円

現地からの報告に加え、さまざまな女たちが想いを述べ、語り合う。伊藤ルイ／千葉仁子／小木曾美和子／松浦雅代／落合誓子／伊藤至頼／堤愛子／三輪妙子／石塚友子／添野ふみ子／村田まり子／水沢靖子

2 季刊誌・最新刊・910円 (本体882円)

## 女子教育もんだい

●No.43特集Ⅱ子どもの権利Ⅱ「子どもの権利条約と日本の課題」星野安三郎／「生殖革命と子どもの人権」青木やよひ／梅村浄／永畑道子

## 子どもと健康

●No.21特集Ⅱどう受けとめる子どもの権利条約Ⅱ「学校を変える、学校が変わる」嶺井正也／「子どもの権利と女性の権利」堂本暁子ほか

労働教育センター 東京都千代田区神田駿河台三二二一  
〒一〇一 〇三二(五三)三三六二

月刊

## ゆたかなくらし

定価 500円(送料51円)  
年間購読料 6,000円(送料612円)  
御購読は直接当会へ御申込み下さい。  
郵便振替・東京9-57278

## 国民的課題としての老後をともに考える

●各号の特集テーマ●

- 5月号 輝ける高齢者パワー
- 6月号 心身障害者の高齢化問題
- 7月号 保健所と高齢者
- 8月号 高齢者保健福祉推進  
十か年戦略を斬る

好評連載

- 北欧の社会福祉(市川禮子)
- 思いつき質問箱
- 居こころ住みこころ
- 私と天皇制(各界の皆さん)
- 情報コーナー(編集部)

すいせんします

- 木下 恵介 鷺谷 善教
- 山田 洋次 中島紀恵子
- 早乙女勝元 浦辺 史
- 前田甲子郎 真田 是
- 寿岳 章子 長 宏
- 原田 正二 小川 政亮

編集・発行 全国老人福祉問題研究会

〒173 東京都板橋区大山東町59-8ドルメン  
大山101号 ☎03(579)8721

●  
特集

# 我が人生の決断のとき



立花由利  
土田早苗  
池田知穂

黒田美奈子  
野口とし子  
花岡由美子



# わたしは負けない 一人ぼっちの人生航路

千葉県  
池田 知穂 (52歳)

## (プロローグ)

「お父さん、おめでとう!」

ワイングラスをかちりと合わせて、二男(中二)と私は、夫に祝いの言葉を述べた。

新しく生まれ変わった巨大ホテルの中にある、静かなたたずまいの、フランス料理店である。

昨年八月まで過ごした岐阜県K市に近い、愛知県の明治村に移築された、旧ホテルを思い出していた。

昨年五月に、単身赴任で当地に暮らしていた夫の元へ、二男と私は夏休みを利用して、引越して来た。

仕事一筋の夫は、ある弱電メーカーに勤務している。勤続二十年、三十五歳の中途入社にもかかわらず、かつての上司や先輩を追い越して、部長に昇格した。当地工場に代取専務で出向している。年内か来年には社長であろうか。二十二年前、二人はゼロから出発した。夫は三十二歳、私は二十九歳の晩婚である。

「今は何もないけれど、将来、ものになる人だ……」夫に対する私の第一印象である。

夫との結婚は、誰にも相談せず私一人で決めた。生き馬の目を抜くといわれる東京で、試行錯誤を重ねながら生きていた証として、それは確かな自信に満ちての決断であった。

あの時、貯金ゼロ、借金? 十萬円の夫を見限っていたら……運命のままに流されていたら……。

運命に逆らい流れに逆らって生きること、私の負けじ魂は培われた。そのツッパリ人生が私にもたらしたものは何ひとつ無駄ではなかった、ということである。今の私があるのも、止むを得ずの幾度かの決断を迫られ、前進する要となってくれたお陰である。ひとつひとつの決断は、その都度、私の「人生の句読点」として、生きる道しるべになってくれた。

その中でも、今日の幸せをもたらしてくる足がかりとなった、年上の友人のひとことは、今も鮮明に忘れられ

ない。

（ 意

見 ）

「あんたはとても二十三歳の、お年ごろの娘には見えないよ。まるで世帯やつれていう感じ。もっと明るくならねば……」

五歳年上の友人Tは、洋裁仕立てを生業としていた。勤めの傍ら私は仕事を手伝っていた。仮縫いの済んだ生地、ミシンがけや裾かがりなどである。

Tの意見はもっともなことばかりである。

当時の私は、髪を長く後ろに引いてポニーテールやシニヨンふうに結っていた。美容院に行かなくても済むように。化粧は申し訳程度で地味なスーツというふうに、世間の娘たちの様子ではなかった。収入の半分を家に入れ、貯金もせねばならず、小遣いはほんの少し。ファッションや恋人のこと、遊びや旅行などとはおよそ縁遠い生活を強いられていた。唯一の楽しみは、洋画を観ることに読書であった。

六歳で父を亡くしてから、母は三人の子供たちを養育できなかった。二歳上の兄は父の実家に、私は母の姉のところに、三歳下の弟は母が連れて母子は離ればなれで暮らすことを余儀なくされた。私は女の子ということ、以来、転々と親類に預けられた。最後の四軒目は父の実家で、母子四人は一緒に暮らせたが、居候に変わりはない。ここで約二年間を暮らして私は社会人になった。

Tの意見をもっともだと思いつつも、私は泣きながら反論した。私を思ってくれたの意見ではあっても、背景にある重い枷を振り切つてまで普通の娘たちのようにはできない。

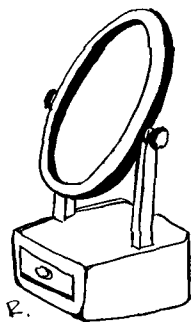
小さなアパートで、兄弟三人はお金を出し合つて母の面倒を見ていたのだが、長い期間を別れ別れで暮らしていたために、それぞれのものの考え方や価値観の違いに、戸惑うばかりの私は疲れていた。

そんなおり、近くにある教会に出入りするうち、Tと出逢つたのである。

大阪に来て初めてできた友達であった。

意見は三日ほども続いたと思う。

彼女は私に意見をするとき、口角に泡を溜めて、まるで私を憎んでいるのでは……と思えるほどだった。そんなTを最初は恨んだが、これほどまでに意見をしてくれるのは、私の中に何かがあるのではないか、今は見えないけれど……意見することその何かが大きく羽ばたくものであることを、彼女は知っているのではないか……彼女の言うように、少し自分を変えてみる



ことで、新しい人生が開けるかも知れない……そのように思い始めると、Tに対する私の気持ちは和らいできた。彼女の意見をいつまでも大切に思っていよう、と私の記憶の引き出しに、し

っかりとしまったのである。

暗くて人間嫌いだっただが、少しずつ人に不快さを感じさせない程度に、明るく振る舞えるようになっていた。

### （運が向いてきた）

一年後の初夏のころ、新聞の求人欄に、カラーフィルムを扱う写真関係の会社、営業部員を募集していた。本社は東京である。初任給が高い。

そのころ勤めていた会社は個人営業の十人ほどの会社だった。普及し始めていた冷房関係のダクト（導風管）製作会社である。

私は心を動かされた。だが、募集要項を見て悩みが生じた。年齢二十三歳まで、高卒とある。私は二十四歳だった。中学時代に結核で十か月の休学、野良仕事や本家の赤ん坊の子守りのために、中学生生活は二年ほどだった。当然留年せねばいけないのだが、私は一日も早く父の実家を出たいために、担任に事情を説明して、卒業させてもらったのだ。

Ｔに相談すると、彼女は自分の友人を三、四人連れて来た。履歴書を偽造するためである。英文タイピストのその人たちは、私からみれば、何とも羨ましいかぎりであった。

「高校を卒業して五年も経てば、調べないから大丈夫。年齢の一歳ぐらいごまかせる……」彼女たちはそのように言って、私を励ましてくれた。

皆是指折り数えて年代を遡り、私の育った田舎に近い町の普通高校を卒業したように履歴書を作成してくれた。私はそれを清書して面接会場に臨んだのである。

駄目でもともと……そんな軽い気持ちで面接を受けたのだが、約七十人ほどの中から、私を含めて四人が採用された。嬉しい半面、内心忸怩たる思いだった。三か月間の試用期間にバレたらどうしよう。だが、今さらじたばたしても始まらない。

私は腹を決めた。発覚すれば辞めればいいではないか……度胸が座ると、怖いものがなくなった感じである。

幸せへの階段を登る順番がやって来たんだ。私にもやっつきがまわって来た……神が与えてくれたチャンスなんだ、逃がしてはなるものか。人間とは勝手なもので、それまではこの世には神仏はいないと、恨んでの日々であったのが、この日から神は私のハートの大部分を占める存在となった。

### （ビジネスガール）

東京での研修を終えて、四名の新社員は一所懸命につとめた。三か月の試用期間が過ぎたが、一向に発覚する様子もなく、私は胸をなでおろした。

企業で働く女性を、現在はオフィスレディ、つまりOLと言うが、私たちの時代はビジネスガール、ＢＧと言っていた。

その憧れのＢＧになって一年、二十五歳になっていた。東京本社から、大阪営業所の女性はよく働くので一人来て欲しい、との要望に、私は立候補した。未知への好奇心は子供の時から強く、ぞくぞくさせてくれる。その上、



千載一遇の好機に恵まれるかも知れないし、自分を試す良い機会でもあった。母や兄弟たちとの関係もぎくしゃくとして、疲れていた私は、一人になりたいと思っていた矢先でもあった。

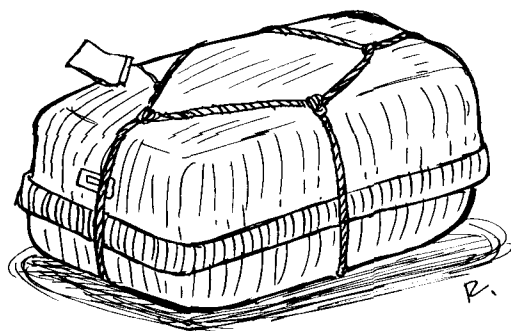
貧しい私にも縁談がもちあがり、見合いをした。それ以前にも三度見合いをしたが、どれも気に入らなかった。今度は条件的に申し分なかった。相手は、商船大学出身で、T漁業に就職していた。

二度二人だけで会ったが、非常におとなしく、しかも長男である。六歳から縮こまって生きてきた私は、舅、姑、小姑たちのいる、長男とだけは結婚したくない、と思い続けてきた。私の年齢を考えると、決して早くはないのだが、もう一步踏みこめずに、悩んでいた。当人よりも両親が熱心で、会社で代わるがわる電話をかけてきては、息子をよろしく、なのである。

相手が遠洋航海に出るという手紙が来たとき、断わる決心をしていた。だが本人に直接言うのは酷な気がして、

航海に出発したあと、仲人に断わりの手紙を書いた。

当然のことに母は激怒した。「普通の家庭の娘なら、相手に少々不



満があっても、がまんして嫁に行く……」と言って泣くのだった。そして私のことを親不孝者が、と言う。私は母に食ってかかった。

「私は、普通の家庭の娘のように育っていないから……」と。母は何にも言えなかった。以来、ぎくしゃくは深まるばかりだった。

巷に秋の気配が漂うころ、誰一人知る人のいない東京に向けて、私は出発した。新幹線は一年後の開通なので、当時東京——大阪間は、特急つばめで八時間ほどではなかったろうか。

列車の中で二十五年間の、子供にとっては苛酷と思える、過ぎし日々を懐かしみながら。

## （東京の空の下で）

本社勤務の女性のうち、地方から来ている人たちは、世田谷区経堂の女子寮に住んでいる。私もその寮に落ち着いた。

寮といっても、普通の民間アパートを一軒会社が借り切っているのである。六畳の部屋に二人住む。私の相棒はAさんという。福島出身で、言葉に少し訛があり、性格は温和で、いつもにこにこしている。

各部屋には小さな台所があり、食事はそれぞれが自由に作っていた。

福島のアさんは、定期的に米や味噌や保存のきく野菜類を送ってもらっていたので、時々私も頂いた。彼女は土曜日の夜になると、都内で結婚しているお姉さんの家に出かけ、泊まってくる。

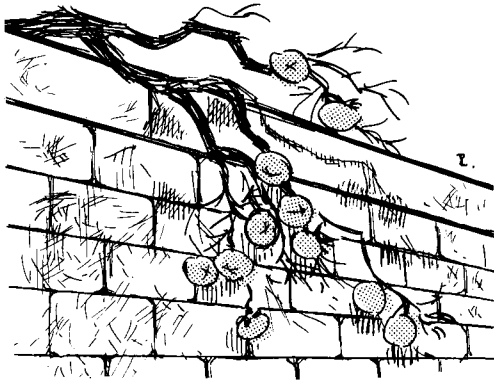
女子寮のあるあたりは、静かで住み心地のいいところだった。休みの日は一人で散歩するのが好きだった。

その寮の近くに作家の海音寺潮五郎氏の邸宅があり、私は好んで近くまで行った。外から人が覗かないようにであろうか、高いコンクリート塀をぐるっと囲っている。

邸内には柿の木があり、秋はオレンジ色の実が塀の外までたれ下がって、殺風景なコンクリート塀に、束の間の色どりを添えていた。

私の記憶のページのまん中あたり、オレンジ色の点が消えない。

上京した年の正月を寮で過ごした。残っているのは私の他に、北海道と九



州の人だった。出かけるあてのない私は、石油ストーブにかけた薬缶の音を聞きながら、壁に凭れて本を読んでいた。立ち上がってストーブの前を通るとき、スカートの裾が薬缶の注ぎ口に引っかかった。

そのまま倒れた私の左足の膝上から下に向かって熱湯を浴び、広範囲にや

けどを負った。ナイロン靴下を穿いていたために、なおのことである。激痛で起き上がることもできずに、大きな声で助けを求めた。上の階に住む北海道の人が駆けつけてくれた。

彼女は大柄な人である。牛乳瓶の底のような眼鏡をかけていた。私は四十キロにも満たない小柄である。彼女は私を背中に背負って近くの医院に連れて行ってくれた。

医院の老医師は、「若いもんがおらんので……」と言いながら、処置をしてくれた。靴下を脱ごうとすると、皮膚がべろりと剥がれた。老医師は「お湯でよかったねえ。油や火だと大変だよ……」と言った。膝ののび切らない私を背負い、寮まで連れ帰ってくれた彼女は、休みの間、食品などの買い出しをしてくれた。三日目ぐらいから歩けるようになり、会社欠勤も三、四日で済んだ。

三か月ほどは、やけどの部分の感触が鈍く、体を洗っていても変な具合であった。

この時の恐ろしさが身に沁みて、後にアパート住まいをするようになったとき、ストーブは絶対に使用しなかった。暖をとるのは小さな電気炬燵で間に合わせていた。

東京は大阪に比較して暖かく、雪が降ってもそれほど寒さは感じなかった。

私は東京が好きになっていた。何より言葉遣いにメリハリがあり、言葉を通して人々がとても活発に感じられた。標準語で話していても、関西ふうのアクセントで話す私の言葉は、東京の人にはまだるっこく映ったらしい。時々「あなたとは喧嘩もできない……」などと言われていた。

十か月ほどが過ぎるころ、私の言葉はすっかり「東京の人」になっていた。

## （入 院）

環境にはすぐ慣れる私だが、亡き父の体質を受け継いで結核を患った身は、よく熱を出して風邪をひいた。

上京してもうすぐ一年という八月も

末のこと、胃の痛みが続き、やけどの時に世話になった医院で治療を受けていた。短く感じられた一年間だったが、その間、かなりのストレスが溜っていたらしい。

昼間の太陽は真夏日でも、夜は凌晨やすくなっていた。部屋の窓をいっばいに開けて、疲れた身を夜具に横たえ涼風の心地良さに、いつかまどろんでいた。Aさんがいないのでたぶん土曜日であったと思う。どのくらいの時間眠ったのか分からないが、ふと目覚めると窓に背を向けていた。豆電球はつけっぱなしになっている。

寝返りを打って空を見ると、丸い月がくっきりと浮かんでいた。「きれいなお月様……」と小さく口に出した時である。月が急に遮られて、男が窓の敷居に片足をあげた。バネ仕掛けの人形のように飛び起きると同時に、「キャーッ、どろぼうー」と、これ以上の声は出せないと思えるほどの、大声をあげた。土曜日で部屋にいる人が多く、二階や隣から「どうしたの？ 何があ

ったの？」と、口々に叫びながら駆けつけてくれた。

恐怖のあまり言葉が出ない。ただ窓を指して真っ青な顔をしていたらしい。誰かが大家さん呼びに行き、警察に連絡した。

私の大きな声で驚いた男は、すぐに窓を離れた。何分刈りだか知らない頭の形、いわゆるその筋かと思われるダボシャツに腹巻き、足にはゴム草履か雪駄らしきものを穿いている。

部屋は角地で、建物は板塀で囲ってある。暗くしておけば、中の様子は分からなかったと思う。警察の調べで、板塀をよじ登った形跡があったらしい。

翌日、早々に連絡を受けた会社の上司が視察に来た。それから間もなく塀の上に有刺鉄線が張りめぐらされた。寮の二階のベランダに出ると、およそ百メートルほどのところに、建築中のビルが見える。犯人はこの作業員らしい、ということだった。彼らは仕事をしながら、ベランダに出て洗濯物や夜具を干すのが若い女性ばかりなのを、

知っていたのである。

この事件のショックを受けたのであろうか、私は数日後に吐血した。少量ではあったが、すぐに医院に駆けつけた。若い医師が「胃潰瘍かも知れないので、入院して検査を受けるように……」と言う。その医師の紹介で、中野にある総合病院に入院することになった。

検査の結果は、やはり軽い胃潰瘍である。

そのまま入院することになり、同行してくれた係長と医師の間で、手術が云々されたが、医師は、「若い女性のからだを傷つけないので、薬餌療法で治す」ということになった。

以後、二か月に及ぶ入院生活となったのである。

## （北のアパート）

入院中に私は一年間を振り返ってみた。やけどに始まり、男の侵入……この事件は、もし、私が目覚めなければどうなっていたかと思うと、今でも恐

ろしい。神経が鋭敏になっていたお陰で、危険を察知できたと思う。病気にあったことを感謝しなければ。

女子寮に住むことは良くないのかも知れない。退院して落ち着いたら、寮を出ることを思っていた。

十月いっぱいでは私は退院できる。退院後も一か月の休養をとるように言われたが、見舞いにも来ず、手紙も寄越さない母の元などには、二度と帰らない。

二か月振りに退院した私は、Aさんや他の人たちの様子の变なことに気がついた。Aさんに尋ねると、私の寮費が免除されていることが、私の入院中に発覚したという。経理部の人間が喋ったそう。会社側は、大阪から来てもらっているということで、私に好意

的だったのである。

やっぱり寮を出よう。これからの風当たりが強くなることは火を見るより明らかである。

退院後の静養を十日間と決めて、会社に届けてある。その休みの間にアパート探しに出掛けた。

京王線桜上水駅から歩いて十五分ほどのところに、北向き四畳半台所つきトイレは大家と共同、家賃六千円、とある。駅に近いところは千円〜二千元高い。

部屋は一階だった。なるほど、一年中陽は当たらない。大家の、女性に住んでもらいたいという条件にあい、早速に引っ越した。

大阪を出るときに母は、月々三千元、ボーナス時に一万円送るように言いつけた。寮費を免除されていたお陰で送りもできたが、アパート住まいとなれば、それもできない。私は一方的に打ち切った。母からは何にも言っていない。

寮費免除の発覚以後、同僚の意地悪



を受けるようになった。上司たちの間で大阪の女性はよく働くという、私への評価に対する嫌がらせであったと思う。

ある時、経理担当の女性が私の側に来て、「あなたの給料はとても多いので、残業はやめて下さい」と言う。その人は経理のベテランで、社内では「皇后陛下」と呼ばれていた。「天皇陛下」と渾名のある遺手の営業課長と深い仲で、一週間毎日洋服と指輪を替えてくる。出張にも二人は必ず一緒である。誰ひとり知らぬ者のない存在であった。

親元から通勤する女性社員は、給料を自分のことだけに使える。会社が終われば、恋人やファッションなどに楽しく過ごす。残業のある日など、不満を言いながらやっている。私はそんな人たちの仕事を引き受けて、上司に頼んで残業をしていた。少しでも多くお金がほしかったのである。

以後、私の残業は減らされた。

アパート住まいでの初めての新年を迎えた私は、二十七歳になった。



## （アルバイト）

会社の「両陛下」の、三千万円の使いこみが発覚した。課長のいちばん信頼していた部下が、あらゆる手段で調査し親会社に報告したという。課長は鹹になり、告訴された。三大新聞に大きく公告が出された。

私はこの一件で男性社会の厳しさと、うかつに人を信頼してはいけないことを教えられた。思うに、この課長はお人善しではなかったろうか……部下のほうが悪黒い人間ではなかったか……そのように思えたものだ。

一方の彼女は、大阪営業所に転勤命令が出たが、私という人間が大阪から来ているのに、なぜ自分が大阪に行か

ねばならないか……と泣いて友だちに訴えたという。彼女は会社をやめてホステスになったという。

私が結婚して間もなく、お茶の水駅の反対ホームで、紫色の風呂敷包みを持った元課長が、誰かと話しているのを見たが、当時の面影はどこへやら、やつれた課長の姿は哀れであった。どうやら裁判が続行中であつたらしい。

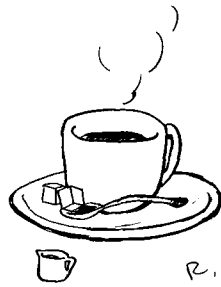
親会社（渋谷を拠点とする私鉄のT急行）の監督が厳しくなり、残業もほとんどなくなった。

私は会社の帰りに、新宿東口の喫茶店でアルバイトを始めた。部屋代ぐらいのお金を得られればと思ったからである。土曜日は六時から九時まで、日曜日は朝の十時から五時までの、時給は二百円から三百円の間であつたかと思う。定かではないが、ウィークデーも働いてほしいと言われたが、体力的に無理なのと、会社がアルバイトを禁じていたために、発覚を恐れて土、日だけに限つたのである。

副収入は私に活気をもたらしてくれ



た。部屋代以上の収入があり、洋服なども少しずつ増えていった。丸井デパートで十か月月賦の食器棚を買った。当時流行していた趣味の会とやらの、食器類の頒布会に入り、民芸調の焼き物の食器類を、月々一種ずつ十二か月間購入していった。いろいろの食器類の増えてゆくのは、料理を作ることの好きな私の楽しみであった。長い間に壊れたものもあるが、まだ数種を今でも使っている。



世間の娘たちのように自由に使えるお金はなく、少しでも貯金を増やさねばならない。それこそ爪に火を点す思いであった。

アパートに住んで二年、大家との再契約を機に、小田急線代々木上原駅に

近いアパートの、六畳間に引っ越した。家賃九千円である。二十八歳の十一月も半ばであった。

## （ 出 逢 い ）

二十八歳という年齢での会社勤めは、皆の好奇的であるらしい。一歳下げたの入社だったので、社内では二十七歳である。男性社員の間での私の渾名は、〇〇女史であった。ひつ詰め髪に眼鏡の地味なスーツとくれば、誰が見てもそのように見えるであろう。けれど、百五十センチに満たない身長と四十キロ前後の体重は、私を三、四歳若くしてくれていた。年はとっているのに結婚しない私に対して、なぜ結婚しないのかなどの、余計なお世話の質問も多く、少々うんざりしていた。

自分に納得できる結婚でなければ、意味がない。そのように思い、また実行してきた。二十五歳の時の見合いを断わった私は、結婚に対してそれほど焦りはなかった。できなければ一生、独身でいいと思っていた。

上京してから、会社内の二人の男性からプロポーズを受けたが、ぜんぜんオヨビでない。そのうち一人は会社をやめた。もう一人は私に辛くあたるようになった。この辺が潮どきかな……私は会社をやめることを考えていた。銀座の何丁目かは忘れたが、年齢をこまかして喫茶店に就職した。結果的に夫とめぐり逢えて、私の人生遍歴にも終止符が打たれることになるのである。会社は退職した。

彼はそれほど遠くないビルの中にある、スライドで広告を作る会社に勤めていた。有名なアナウンサーなどを使って仕事をしていた。同じ写真関係の仕事ということで（私は辞めたが）、よく話が合った。

温かい大らかな人柄、包容力、何より頭脳明晰……こういう人が将来性があるのではないだろうか。そのうち人を介してデイトの申しこみがあり、休みを利用して公園や映画にと、それなりに楽しく過ごした。お互いの身の上話になり、彼は三歳上のW大学出身、

実家は伊豆で禅宗のお寺の三男というふうな、住環境の恵まれた土地に育ったことが、彼の人格を形成しているように見えた。

私の心にチラホラ彼が消えたり現われたりするころ、彼は上司（仲人）と一緒に現われた。プロボーズである。

普通、プロボーズは二人だけの時にするものではなからうか。女性に対して小心なんだな、この人は……私はそのように思えたものだった。それもまた、人柄のよさを表わしているのである。

話が決まれば早い。公団の三DKに彼は一人で住んでいた。結婚となれば経済的なことがかわるが、何と貯金ゼロ、借金十数万と私には言ったが、実際にはそれ以上だったのである。兄たちの、酒やたばこを嗜まず、貯金一筋の生き方とは反対の彼に、私は迷った。一年三百六十五日、飲むことの好きな彼の、初めて招待された三DKの冷蔵庫には、ビールばかりが入っていた。借金の大半は、飲み屋関係と大学時代の奨学金だったのである。賭けご

との借金でないことは分かった。むしろ借金のあったほうが頑張りがきくのではなからうか。よし、後半生の人生を彼に賭けてみよう。私のいちばん大きな決断であった。

## 結

## 婚

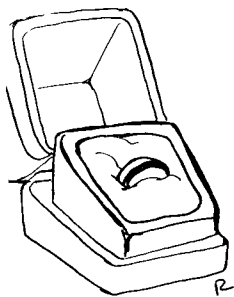
上京して一年ほどは、友人Tとの手紙のやり取りもあったが、そのうち疎遠になり始めていた。だが、私を変えろの意見をしてくれたTに、いちばん出席してほしい。式に出席してほしいと手紙を出したが、彼女からは、祝電が来ただけであった。私はそれまで忘れていたのだが、彼女は離婚経験者だったのである。そのことへの思いやりの欠けていたことを、私は深く反省したのだった。そのTも今はどこにいるのか皆目分らない。幸せであれば逢いたいと思うが、その反対であればやはり迷ってしまう。幸せであってほしいと願ってはいるけれど……。

一月中旬、雲ひとつない空に冷え込みが厳しく、路面は滑りやすくなつて

いた。

挙式は渋谷教会、中華の立食形式の披露宴は、青山ウエディングホールだった。貧しい私たちは入籍だけでいいのだが、私には意地があった。特に親類に対しての……。

ウエディングドレスでの挙式と、文



金高島田の振り袖での披露宴を奮発した。

私の結婚について、母は一円のお金も使わなかった。皿、小鉢、下着一枚買ってもらいはしない。兄と弟が少しずつ祝ってくれた。

挙式の一時間ほどの間、一天にわかにかき曇り……の通り、厚い雲が空を覆ったかと思う間もなく、ものすごい

雷雨である。挙式後、皆が口々に「雨降って地固まるだから……」と慰めてくれた。不思議なことに、式が済むと同時にまた元の雲ひとつない青空ではなにか。後日、氣象庁に問い合わせると、こんなことはめったにありません。この季節にはあり得ないこと……だという。今でもこのことは不思議でもあり、気になることもある。

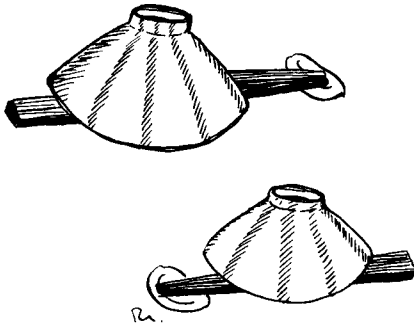
あと一か月で私は三十歳になる。

挙式前夜に、義母のごきげんを損なうようなトラブルがあり、やっとそれを乗り切った深夜私は、こたつに入り祝儀袋にお金を入れる作業をしていた。そのまわりを母がぐるぐる歩きながら「どうするの？ ねえ、どうするの？……」と呆けたように言う。おそらく大変な姑に娘がいびられることを心配したのであろう。今さらになって結婚をやめるかどうかを私に聞いたのだと思う。母の言葉をすぐ理解した私は、瞬間、迷ったが、母に言った。「年寄りの言うことは、右から左へ聞き流すようにするから大丈夫……」と。六

歳から鍛えられた私に、怖いものなどない。がこれからの長い年月を思えば、どんな事態が待ち受けているのだろうか……。

式後、衣裳代やら私の側の支払い分を弟にすべて託して、その日は皇居のパレスホテルに一泊。翌日、新幹線で和歌山の勝浦温泉に向かった。

だが、旅館に着いて驚くことばかりの続発に、姑に対する憤りが湧いてき



た。彼はほとんどお金を持っていなかった。祝い金は当人たちが持つものと思って私はすべてを持って来たが、夫のほうは全て母親が取りあげてしまったという。

この姑のことは、稿を新たに書くと思う。

旅行から帰ってみてまた驚くことあり。ああ……母の心配は当たったなあ……。

## （安らぎの家）

お互いに世間の荒波をくぐった者同士、結婚は、落ち着いた雰囲気、私は夫によく言ったものだった。「世の中にこんな落ち着いて安定した生活があるなんて信じられない」と。夫は笑いながら言う。「これが普通だよ」と。私はまた思う。不幸にならなければいいけれど……と。

結婚後、夫の会社が不景気になり、給料の遅配が続いた。ボーナスは一度も手にしたことがない。そのうち、半分の給料、まったく支給されない月も

あった。

ハネムーンベビーの長女の出産は、ちょうど十月二十五日である。給料はゼロ。病院に来てくれる人たちは、悩む私に娘の名前を「いっそのこと金子にしたら……」と冗談を言う。出産費用の約七万円は、全額私が支払った。夫の実家からは一円の祝い金もなし。母と兄弟たちは少しずつでも祝ってくれた。

退院した私は、母乳も止まるのではと思うほどであった。

ちょうどそんなおり、救いの神が現われた。夫の会社が入っているビルのオーナーが、お祝い金五万円を下さったのである。身内でさえも何にもしてくれないのに、他人様の温かい心に、私は泣いた。当時は四万円もあれば、大人二人が生活できた。もちろん切り詰めてであるが。

結婚一年半を過ぎるころ、夫は弱電メーカーに再就職することになった。だが、元の会社の社員の中に、思想的に弾圧を加える恐れのある人たちが何

人かおり、夫はワン・クッションおく必要性が生じたために、まずその弱電メーカーの下請工場にかくまわれたのである。いわゆる囑託として迎えられたのだった。

私は安堵した。家計費の心配がなくなった。

三十五歳の七月、愛知県I市に弱電メーカーの工場が新しく発足、夫は係長で再出発を図ったのだった。一歳九か月の娘と、お腹に二人目の子供を宿した私は、数々の思い出多い東京を後にしたのだった。

## （エピソード）

女一人が厳しい世間を生きねばならない現実を、身をもって体験した。他人様から見れば苦労かも知れないが、大人になってからの苦労は自分の責任でもあると思っていたので、私自身は苦労と思ったことがない。むしろ、自分の意志で何でもできる喜びのほうが大きかったのである。

開き直りの人生は、この世に怖いも

のなど何にもない。強気の生き方は、頭を打たれることもあったが、私にとって全てが貴重な肥やしとなって、現在に生かされている。

娘（二十一歳）は名古屋のあるOA機メーカーのインストラクターをやりながらアパート住まい、長男（大学二年）は関西方面で下宿生活、と別れ別れに暮らしていても、私の子供時代と比較べて、内容の何と大きな違いであるうか。

三人の子供たちが自立できるまで、夫と私の安らぎは得られないけれど、何とか楽しみながら余生を送ろう、と話し合った。

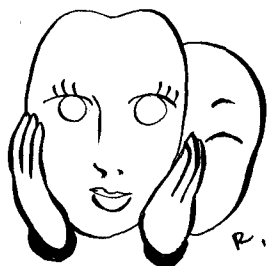
人生航路の荒波は、夫が防波堤となってくれるお陰で、私にはほんの雫がかかるだけ。

最後に私の好きなことを記したい。

たった一人しかない自分を  
たった一度しかない一生を

本当に生かせなかったら人間に生まれてきた甲斐がないじゃないか。

— 山本有三 —



# 中身より外見だ!

埼玉県所沢市  
花岡由美子

## （右頬のしみを取るう）

そもそのものきっかけは、耳に穴を開けたときからだった。私の中の血の流れが逆転したかのように、価値観が百八十度変わってしまったのである。

もともと、両親が満州から引き揚げ後貧乏のどん底時代に生まれ育った私には「贅沢は敵」が骨の髄までしみ込んでいた。結婚してからも、それはもうつましい暮らしで、夫や子供たちに、いつも無駄遣いをいさめていた。

だから家が持てた、と言いたいが、実態は多大な住宅ローンに追い詰められ生活は最低の暮らしである。外食はしたことなし、旅行も行かない、必需品以外は買わない、服はバーゲン品を何年でも着る、子供の稽古ごとくも満足にさせてやれない。受験期を迎えた息子たちが私立に行きたいと言ったらどうしようか、と真剣に悩んだ。

もはや生活を切り詰めるだけでは暮らせない。なりふり構わず働こうと思っていたら、親孝行な息子たちは、そ

れぞれ国立の大学・公立の高校に入ってくれた。これで数百万円のエデュケーションが浮いたことになる。

おまけに三か所から借りている住宅ローンの内、一つが完済となった。まだ残り十七年あるが、気分的に少し楽になった。さらに、やっと末娘が小学生となり幼稚園の月謝代二万円も浮く。長男に仕送りもせねばならず決して楽ではないのに、なぜかほっと一息ついて鏡を見た。やけにしわが目立つ顔に右頬のしみがくっきりと目に入る。

十年前、自転車で転んで顔をすりむき、傷跡がちょうど日本地図のように五センチに亘って頬に黒々と描かれているのである。気にはなっていたが、なす術もなく放っていたら、どんどん広がって、二、三年前から顔全体が黒ずんできているのは気付いていた。

これから恋愛するわけだし、私がいなくなれば困るであろう夫が、顔が黒いぐらいで離婚するわけがない。人間外見よりは中身のほうこそ大切。内容の充実に努めよう……などと殊勝な



ことを考えていた。が、しかし、である。このまま老いばれていく?……。

四年前の夫の言葉が思い出された。アメリカに出張する前「何か欲しい物あるか?」と聞かれたときのことだった。「イヤリング」と答えると「今時イヤリングなんか、あまり売ってない。ピアスならデザインも豊富でいっぱいある。お前もやってみないか?」と言ったのである。

そのときは「耳に穴を開ける? なんて恐ろしいことを!」と相手にもしなかった。それが今回ふっと「やってみようかな」と思ってしまった。二日後「こんなおばさんが?」と言われるかとドキドキして医者に行くと、いとも無造作にピストルでパチンとやられ、拍子抜けしてしまった。

チクツときたとき「この年になってもいまだに中身の充実などできたためがない。おそらくこれからも無理だろう。それより外見の衰えを防ぐほうがよっぽど大切だ」と思ったのである。「まず右頬のしみを取ろう。でもどう

やって? 分からないからエステサロンに聞いてみるか。雨後の竹の子のごとくあるエステサロンだが、トラブルがあつてはたまらない。どこがいいだろう? 地元のSデパート内の店にするか。天下のSデパートがまさか変な店をテナントにするわけない」などと妙にSデパートの名を信用している私は、ピアスを入れた二週間後エステサロンに出掛けた。

きれいに化粧した女性がにこやかに「いらっしやいませ」と出てきた。ハハハこういうふうに化けるのかと相手の顔をまじまじ眺めつつ説明を聞く。「あのう、こののしみを取りたいのですが、もう遅いでしょうか?」「いいえ、そんなことはございせん。お客様の場合、頬にくっきりと地図をかいていらっしやるので時間がかかると思いますが、取れると思います。つきましては、費用ですがこのようになっております」と料金表を見せられた。しみ取りコースの場合、一回だけだと一万八千円。十回コースだと十五万

円になり、五十回コースだと一回分が一万二千五百円になるとのこと。「分割払いだと利子がコレコレですが、一括払いだと無利子で入会金を含め六十五万円になります」。

なんと私はたったの三分で決断し、五十回コース六十五万円の契約用紙にサインしてしまった。そのときは住宅ローンも教育費もどこかへ飛んで行き、頭のなかは真っ白だった。



### (六十五万円に夫は絶句)

これだけの大金を支払うとなると、さすがに夫には内緒にできない。

「今日からエステに行くけど、夏のボーナスで六十五万円引き落とされるからね」「なに?!……」一瞬夫は絶句した。

「お前、気は確かか?」「ええ確かよ。

どういふわけかピアスをしたらホルモンのバランスが崩れたらしく、考え方が変わったのよ。そもそもピアスをしると勧めたのは、あなただからね。文句ある?」「それはそうだが……」夫の次の言葉はなかった。

よせばいいのに、夫は息子たちに「母さんはおかしいよ」と告げた。仙台から帰省した長男は、

「いつもお金ないと言うから、僕なんかジュース一本買うのだって考えて我慢しているのに、なんだそれは」と言った。

次男は友達とのなにげない会話で「うちの母親ピアスしている」と口走って「ヒエー、気持ち悪いー」と言われたのに「その上まだやるの?」と言った。

「お前たち、自分の母親が友達のおばさんより若く見えれば嬉しいだろう?」と聞くと「べつにー」関係ないよ、といった表情で「だいたい母さんは言うこととすることが矛盾して全く平気な人だから」で意見一致。家中皆で呆

れ果てた。

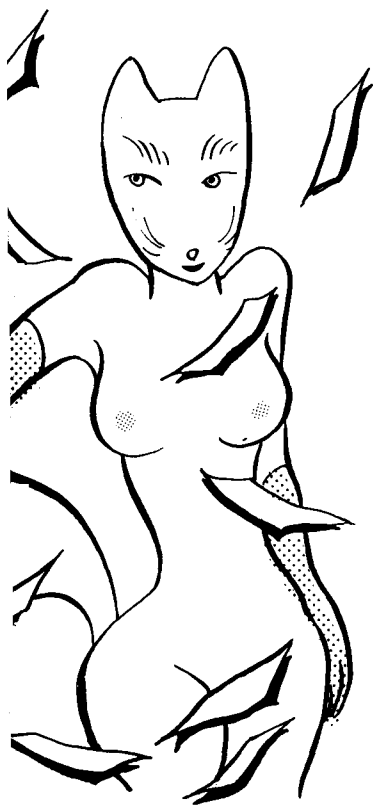
もしかしたら少しだけ狂ったのかもしれない。でも長い間の質素・節約の暮らしから逃げ出したくなったのも事実である。

ひるまずにエステに出掛けた。まずブラジャーとショーツだけになって、専用のガウンに着替える。最初に肩から首筋をマッサージしてくれる。その後、横になりクレンジングからスタートしてマッサージ・オゾンをかけてと続くのであるが、途中で必ず眠ってしまう。顔のマッサージだから、全身マッサージはさぞかしだろうと、経験なくても、

およそ想像がつく。

全身コースは当然のことながら全部脱いで専用の紙ショーツになるのだそうである。このあいだ、エステなんかする必要のないと思われる若い娘さんを見かけたので、不思議に思っていると、ブライダルですと言う。それも顔と全身と両方だそうで、費用は誰が負担するのだろうか、といらぬ心配をしてしまった。

私の場合、一回一時間半で月二回のペース。六回終わったところである。毎回やってくれる人が変わり、一万二千五百円払うには、損をしたという感じのときもあった。



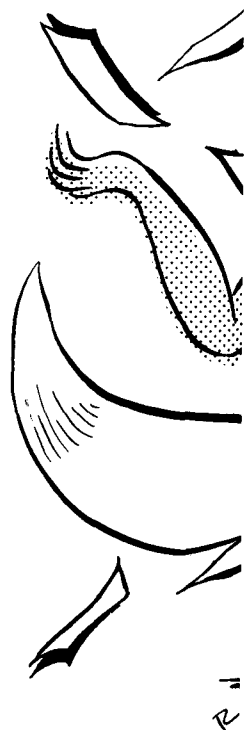
## （二年後が楽しみ？）

マッサージされながらいろんな話をするが、きまって「どんな化粧品を、お使いですか？」と聞かれるのには開口した。そこらへんの名もないメーカーの物を使用しているの。エステではフランスのگران社の化粧品や、スイス製の化粧品を使っている。どこでも買える物ではなく大手デパートにしか置いてないという品である。

ある日「花岡さん『イシマ』をお使いになるとよいですよ」と言われた。「イシマ？ 何それ？」と聞くと、ゲ

ランの中でも「しわ・たるみのある方のみお使い下さい」という、より高級化粧品だった。五十ミリリットルで四万八千円美容液をつけるとお肌がパリッとするのだそうである。パリッとしたのはやまやまなれど、もうそこまでは手が出ない。

聞けば「イシマコース」というのがあるそう。イシマ化粧品を使い、マッサージの方法も違い、一回が三万一



千円。五十回コースだと百二十五万五千円とか。たかが美顔のためにそんな大金を払う人いるのだろう。信じられなくてつい「このコースやる人いるんですか？」と聞いてしまった。いとも平然と「いますよ」「どこの社長夫人？」「いいえ、普通の奥さんですよ」「まさか……」。

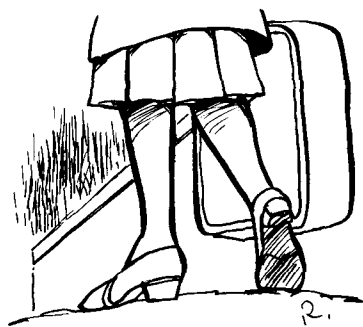
でも生命保険のセールスをしてボーナス百万円もらったという友人は「美しくなれるならお金などいくらかっても惜しくないわ」と言っていた。

衝動的とはいえ、自分のために六十五万円を使うにはかなりの覚悟が必要だったが、私のお徳用コースだったのだ。「六月下旬に六十五万引き落とされた後、病気になったりして行かれ

なくなったら残り四十四回分の料金は捨て金になるのか。後二年間、私が健康であるという保証はどこにもないのだから……」などと、みみっちいことを心配している一方で、お金持ちがそここにゴロゴロ見られ、ため息が出てきた。

さて、しみの具合はどうかというと、今のところ全く変化なし。しよせん始めるのが遅かった。だがあまりに無防備で手入れなど全くしなかったパサパサの肌が少しずつとりしてきたようには感じる。

夫は「どうせ気休めだよ」と笑うが、二年後、本当にしみがとれているかどうか、また報告したい。



# 家出を決断して 得たもの

福島県

土田 早苗

## （夫がセックスツアー）

日本の女の通念としてはセックスツアーに何の疑問もなく夫を送り出しているようだが、私は、夫が他の女性を好きになるならともかく、お金を出して女性、しかも発展途上国の女性を抱くなんてことはとても許せない気持ちだった。

本社の招待で取り引き店が台湾へ旅行することになったとき、何の疑問も持たずに出してやったが、帰ってきてから話を聞いておどろいてしまった。それから一年ほどたつてまた、本社主催で台湾へセックスツアーに出かけるといので私は、「今度も出かけるなら離婚する」と言っただけ夫は役付きで引率者として行かなければというので、本社が私を説得して行かせてしまった。

飛行機を降りると二台のバスが待っていて、一台は男一台は女で、男の乗ったバスはキャバレーのような所へ直行し、

「さあ、この中からお嫁さんを決めて下さい」

と若い娘が何十人も並ぶ中から各自好みの女性をえらび、それぞれの部屋へ連れて行くのだそうで、その巧妙な手際のよさはおどろくばかりだ。

それにしても社会の世論をリードする本社が、いかに皆の希望に合わせるとはいえ、主催者としてこのような企画をするとは何と情けない。我々夫婦にヒビを入らせても強行するやり方に腹が立ってならない。

それに私の娘までが、

「お父さんは、そんな場になっても決して他の人を抱かないから安心して」なんて言ってるけど、果たしてその場できっぱり断られる人なんているだろうか。昔から据え膳食わぬは男の恥というではないか。

二度目の台湾旅行以来、事実上の夫婦生活はなくなり形式だけの夫婦になった。私はもう彼に触れることができなかつたのである。こんな結果になつて夫は、あまりの私の強硬さにただた

だおどろいていた。

## （家出を決行）

三十年間一緒に暮らした夫と別れる決心をして、家を出たのは忘れもしない五年前の誕生日の六月だった。夫との砂を噛むような素漠とした生活に耐えられず、そのころ私は三十年前の恋人と再会して、焼け棒杭に火がついてしまった。月一回の逢瀬ではとても我慢しきれず出たのだが、案に相違して彼は困ったことをしてくれたという態度を露骨に示した。

彼にしてみればただの遊び相手にしておきたかったのに、家出までされては迷惑この上ない相手になったわけである。そして私は初めて愛のない相手に気づかされたのである。家を出るとき、それにまったく気づかなかったわけではなく、彼が決して妻を捨てないだろうということは分かっていた。

自立を標榜している私は彼が助けてくれないからといって、彼を責めることもプライドが許さなかった。

家を出たときふところには七万円の現金しかなかった。夫との話し合いで娘も立ち会いの上、毎月七万円ずつ送るという約束をしてくれたが、一か月目に夫から、

「ある人が送る必要はないと言ったから」と送ってこなくなった。そのある人とは娘のことらしい。娘は父親に味方するといふけれど本当で、別れることができなかつたのも、娘がこちらについてくれなかつたことが大きく影響している。

私は仕事を探して毎日東京をまわって歩いた。五十歳のおばさんで学歴もないのでは、お手伝いさんくらいしかない。住む所がないから住み込みしかない。しかし地価の高い東京では、いくら上流社会といえどお手伝いさんに四畳半一間を提供できる家が少なかつた。六畳間に二人、三畳に一人、ベッドを置くと歩いて通るだけの道しかない部屋、窓のまったくない地下室などなど、とても私は妥協できなかつた。

## （家裁に調停を頼む）

そして彼はぬけぬけと、

「君がお手伝いさんになるなんて忍びない」

などと殺し文句のつもりで言って何とか仕事探しを諦めさせて、私を夫の元へ帰すことを考えていたらしい。だからというわけでないが私は婚費（婚姻費用の分担・婚姻中の生活費のこと）請求のつもりで家裁に調停を頼んだ。

ところが家裁の調停員は、不貞はお互いさまなのに一方的に夫に味方してしまった。私の出した条件、

一、経営に参加させること  
二、毎月一回上京させること

三、専従者給与を十五万出すことに女性の調停員は反発して、

「経営者はご主人だから命令には従ったらどうですか。月一回上京させるなんて、それだったら給料は半額にすべきです。休んだ仕事の分までお給料を頂くなんて虫がよい。それにあなたの今やっているお仕事だっていつや

めろといわれるか分からないんですよ」女の調停員は女に味方してくれるものとばかり思っていた私は、びっくりしてしまった。

男は不貞をしてもとくに売春ならよい。女は不貞をしたらゼツタイ悪者になるのである。

しかし最終的には私の出した条件は全部夫のほうのがむということで調停は成立した。

調停の前に、わいふ編集部に相談したところ、不調に終わらせたほうがよいと忠告されたが、私はそのとき住むに家なく、懷中には七万の現金しか持ち合わせがなかったので妥協してしまった。

調停が成立したら調停調書という書類を書くはずなのに口約束だけで終わってしまったので、嫌な予感がしたが、その予感的中して、夫の元へ帰ったとき、夫は、

「十五万なんて話は聞いてない。経営には参加させない。月一回東京へ行くのはよいけど給料は六万五千円だ」

と居直っている。わいふ編集部に、このことを告げたら、

「甘かった。書類に取らなければダメよ」

と言われ、わいふの人たちの忠告の正しさを認識させられた。しかし一回家出をされた恐怖感から夫は、ハレモノにさわるように私を大事にして、私が月一回は一日でも十日でも一回だと仇を取るつもりで上京しても何も言わない。十日間旅館に泊るには六万五千円の給料では足りないのです、実質的に十五万を取ってしまった。



## （離婚には情報と資金）

私は、このことにより離婚に関していくつかの教訓を得た。情報不足では不利だ。情報をたくさん集めること、資金不足ではできない。最低百万は必要、人に頼らないこと、など。心のどこかで彼に就職を世話してもらおうという願いがあったが、裏切られてしまった。

新聞などで仕事を探したが、後に冷静になってから考えると、雑誌などもあったのに夢中になっているときは仕方ないものだ。しかし家出して実際に貴重な体験をした。

第一に彼とのロマンスは、まさに絵空事で砂上の楼閣に過ぎなかった。女の友人は、皆セックスを伴った奴隷なので友人を助けることなど思いもよらなかった。たとえば婚費請求の公正証書の立ち会い人になるのを、親友に断わられた。夫の許可がないと何の証人にもなれないのだ。

男の友人同士は就職を世話し合った

りしてゐるけれど、女同士になると、例外は別として多くの人は不可能だ。意識がその邪魔をしている。

アパートを借りようとして不動産屋へ行った。保証人が要するという。頭に親しい人たちの顔が次々に浮かんでくるが、どれもOKしそうにない。親兄弟、子どもたち、は到底ダメ。友人たちの顔を考える。専業主婦はダメだろう。共働きしている友人に電話をかけてみる。何人ものかけて、やっと一人みつけた。

不動産屋も、わいふに広告の出ている比較的女性に同情的な業者を選んだ。部屋も見に行った。池上線の雪ヶ谷の駅前だった。この家を見つけたときの、はずむような嬉しさは未だに忘れない。二階建てで六畳と四畳半、一階がキッチン、家賃が五万円、早速手金を打った。

そのころのある日、ふっと献血をする気になって行ってみたら、何と肝機能が弱っているという。私は奈落の底に落ち込んでいくような無力感にとら



えられた。そして夢に見た自立を捨て、今はこれまでと恥と後悔の塊になり夫の元へ帰ったのだ。

### （優雅な休暇を楽しむ）

しかし現在は夫をして、「僕働く人、お前遊ぶ人ですつまらない」と言わしめ、月十日間の休暇を優雅に過ごしている。家出してドンパチやらなければ、この権利は、つかめなかった。女の調停員が最後に言つた一言、「理解あるご主人だから、あなたの図々しい要求ものんでくれたんですよ」に心の中で、ざまあ見ろ、あなたがい

くら意地悪したって、私は自分のしたいように生きてみせるよ。くやしかったら自分もやってみなさいとタンカを切っている。

今でもあの調停員の顔を思い浮かべると腹が立ってならない。そしてあのとき適切な助言をしてくれた編集部の好意に応えることができなかった自分のふがいなさも悲しい。しかし今は普通の主婦が体験することもないような体験をしていて毎日が希望の連続だ。終わりよければ、すべてよしだろうか。

これを聞いたある人が、

「あなたそんなに得意になっていても、夫の思惑次第で、やゝめたといわれたら、今の生活を変えなきゃならないのよ」

と水を浴びせられ、本当にそれはそれで、私自身の意志に基づいて行動できてるわけでないことを反省させられた。肝臓が治って二度目のジャンプが可能ならよいが、そのときは資金はできていても年齢が年齢だから、ちょっとむずかしいだろうか。



# いい日旅立ち

東京都文京区  
野口とし子

## (こころへんで自立を)

家を出たい！ 一人で生きていきたい。そんな思いを胸の奥底にしまい込みながら、私は二十六歳になっていた。思い切ることができなかったのは、母のためだった。

父は材木を運搬するトラックの運転をしていた。一応自家営業だったが、金銭的にルースな人で、家計はいつも火の車。女性関係もいろいろあつて、メロドラマが何本か書けそうである。

だから母にとって私は、頼りになる娘だった。「私がいなくては、この家はどうにもならない」そんな自負もあつた。でもこのまま家にいても先々希望は持てない。母には泣かれるだろうが、心を鬼にして、家をでよう。ちょうど二人の弟が東京の大学を終え、信州に帰ってくる。弟たちが家に帰って来るとは、うれしい誤算だった。

弟たちの気が変わらぬうちに、今度は私の番よと出ていこう。だってうちの親の面倒みるのって、大変なんだか

ら。弟たちも小学生のころから新聞配達をして家計を助けてきた。でもなんといってもタクマシイお姉さんが防波堤になっていたんだよ。これからは、バトンタッチ、私の役目は終わった。

親を捨てるようなウシロメタサを感じながらも、今決心しなければ、二度とチャンスはない、と思った。私は一家心中的な、親と子がベツタリともたれあつた関係が嫌なのだ。

母に対する気持ちも複雑だ。母は父に女ができた、金がない、と言つては大騒ぎをした。親戚にも、随分世話になった。父には何度も捨てられた。私たち母子が、生活保護を受けずにすんだのは、母の姉妹、伯母たちの援助のおかげである。離婚して欲しいと私は心から願つた。父も根は悪い人ではない。でもよい夫にも、よい父親にもなれるタイプではないのだ。父は自分のしたいこと、欲しいものを我慢できない。

あれは第一次オイル・ショックのときだった。ちょうど私のボーナスがでた日、



家に帰ると父がしょんぼりしている。オイル・ショックのため、トラックの軽油をまとめ買いしなければならぬが、金がないという。私は迷わず買ったばかりのボーナスを袋のまま渡した。十万円入っていた。父はその金を持ってガソリンスタンドに出掛けて行った。そして買ってきたのはドイツ製の三十万円もするカメラだった。十万円を頭金にして月賦で買ったのである。そのころ父はカメラに凝っていた。

何かに夢中になると、見境がなくなるのである。結局、軽油は借金して買うことにした。母は私を叱った。「おまえがお父さんにお金を渡したおかげで、借金が増えてしまった」と。

母は父には逆らわなかった。私は自分の給料の八〇パーセントを家に入れていた。我が家の経済で、弟たちを進学させるのは無理だったのだが、弟がどうしてもというので、送金のため、昼の勤め以外にアルバイトもした。そんな中から、将来のためにとコツコツ貯金をしていた。その金を母は無断で

下ろしてきた。父がきまぐれに、金沢へ行きたいと言ったからだ。ちょっと借りただけだというが、二度ともどつてはこない。東南アジアに父が遊びにいったとき、母は質屋に行って金を作ってきた。はつきり言ってバカである。しかし、バカな子ほどかわいいう。私にとっては、バカな親ほど見捨てられない、といったところだ。だがこのまま一生親のために生きていけるほど、私はお人よしではない。それに、私がいなくては、なんて思い上がりかもしれない。これからで、私も両親も自立しなくては。

### （緊張と不安で旅立つ）

行く先は東京と決めていた。

東京に行こう。田舎育ちの私にとつて、東京はあこがれの地だった。だが二十六歳にはなっていない、一度も家を出たことがない。不安だった。何の目的もなく上京したのは、大都会に飲み込まれて、流されそうな気がした。私は高校時代、あまり勉強しなかつ

た。大学進学などとても無理だった。

高校時代は父が、親から貰った家を叩き売って、愛人のもとへ行ってしまった最悪の時期だった。私は一日も早く働いて母を助けたかった。勉強は高卒の資格を取る程度でじゅうぶんと割り切って、アルバイトにせいを出した。しかし、ホントは進学したかったのだ。せっかく上京するのだから学校に行つて勉強したい。学びたいことはたくさんあるが、まずはインテリア・デザインを。専門学校だったら、無試験で入れるところがある。進学準備などないもしない私にはピッタリだ。でも大事な問題があった。お金がないのだ。お金がなくても勉強できる方法はないだろうか。たまたま見た新聞に、新聞奨学生募集の記事があった。「働きながら学べます。生活費も学費も自分の力で」これだ、これ。こんな方法があったのか。新聞配達なら弟たちがやっていた。私にだってできるだろう。早速地元の新聞販売店に相談に行った。長年弟が働いていたので顔みしり

だった。しかし返ってきた答えは厳しいものだった。

「やめたほうがいいですよ。そんな甘いもんじゃない。うちでも、若い男子何人が紹介したけどね。体壊したり、学校と仕事両立できなかつたりして、結局途中でやめちゃうのがおおいんだよ」

ましてや、あなたは女で年も二十六歳にもなつて、と言いたいのだろう。そろそろ嫁にいくほうがいいんじゃないの。これが一般的な反応だ。人に変人と見られてもかまわない。私は、「あのとき思い切つてやっていたら」と後悔しながら暮らしたくない。

私の意志が固いので、東京の朝日新聞の専売所を紹介してくれた。そのとき九月ごろだったので、上京する三月まで地元で新聞配達をした。ウォーミングアップだ。信州の冬は厳しい。早朝に新聞配達して、昼間の勤めもある。でも私は平気だった。やっと夢が叶うのだ。

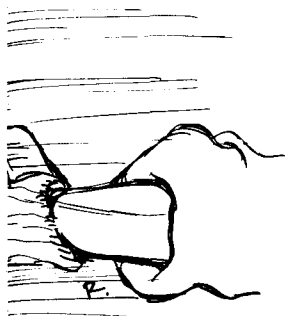
そのころ、山口百恵さんの「いい日旅立ち」がはやっていた。この曲は私

の応援歌だ。これからどんなことが待ち構えているのか、そして私にも日本のどこかに待っていてくれる人がいるのだろうか。緊張と不安を抱えながら私は東京へと旅立った。

### （ゴキブリと同居して）

私の行った朝日新聞の専売所は、東京大学の近くだった。私の他に四人の女子と五人の男子。女子寮は店の近くにあった。ビルの谷間の狭い袋小路の奥で、電気をつけると、たくさんさんのゴキブリがワッと逃げていく。もし火事があったら逃げ場がない。ともかくこれで二年間の生活が始まった。

まず順路帳をもって先輩の後につき、新聞を配る順番を覚える。一人で二百五十軒から三百軒を受け持つのである。



順路帳には、お客さんの名前と新聞を入れる場所、時間（人によっては、朝五時までに届けるように、と指定することがある）、集金の時の注意事項などが書かれている。これがあれば、翌日から一人でなんとか配ることができる。もちろん昼間何度も歩いて、間違わず、速く配れるように練習した。

田舎でやっていたときは、百軒ほどを受け持っていた。家も道も、勝手知ったるで楽だった。しかしこは、西も東も分からね東京である。とにかく自分の区域だけは隅々まで丸暗記だ。四月に学校が始まるまでに、仕事に慣れておかねば後がきつい。

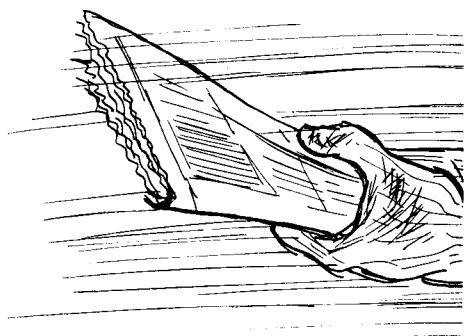
私と一緒に入った女の子は関西からきたNさん。背は高いがとても華奢な感じの人で、新聞配達などやるタイプにみえない。私たちは古新聞をいっぱい自転車につんで、東大構内に行った。配達する前に中継地点まで新聞を分けて運ぶのだが、自転車の背に一メートルから二メートル。私たち二人は人よりニブいほうだったから、バラン

スを取るのが下手だった。そのための特訓である。

春休み中とはいえ、構内には結構人が歩いている。でも恥ずかしいなんて言っていられない。専売所では、自分の仕事は責任をもってやらねばならない。配達ミスをしたときは、学校に遅刻しても、自分でお客さんにあやまりに行かねばならない。本人がいなくてきだけ他の人が代わってくれる。体の具合が悪い時でも、よほどのことがないと、休めない。

私は働くことに関しては、自信があった。高校を出て四年勤めた医院の院長は、元軍医で医師会一佈いと評判の先生だった。私は受付事務だったが、どんな小さなミスも許されない。怒るとメスや注射器を投げ付けられたり、大勢の患者のまえで怒鳴りつけられたり。ここで耐えられればどこへ行っても大丈夫、と思っていた。

でも、やはり甘くはなかった。仕事だけなら何とかなる。学校との両立が難しいのだ。



起床は午前四時。朝刊を配り終わって、朝食。登校。午後二時前後に帰り翌日の折り込み広告の準備や集金などを少しして、夕刊の配達。終わったらまた集金など。その間に学校の課題をやる。夕食のあとも、集金などするときもある。

デザイン学校という所は課題がたくさんある。次週までにやらなくては、授業についていけない。私のクラスは新聞奨学生と、留学生、大学を卒業してから入学した人などだった。

「大学よりずっときつい」という人もいた。

（落ちこぼれまいと必死）

私達奨学生は時間の余裕がない。よほどしっかりと目的意識をもってないと、学校を続けるのは難しい。入学時、たくさんいた奨学生が二、三か月もするとポロポロとこぼれていった。学校の教師にも、評判が悪かった。遅刻がおおい、課題をやってこない、授業中に居眠りをする。奨学生はレベルが低い、とも言われた。私は負けたくなかった。時間がないことを言い訳にしても始まらない。仕事と勉強、二年間それだけで、遊ぶ暇など全くない。

そんな生活が続けられたのも、女子寮の仲間のおかげである。大学生が一人、専門学校生が四人。夜中トイレにいくと、皆の部屋から明かりが漏れている。みんな、頑張ってるな、よし、私も頑張ろう！と、力がわいてくる。

「朱にまじわれば」というが、皆まじめで頑張り屋だった。そのころはまだ、

女子奨学生はすくなかった。いても、賄いの仕事はほとんどで、このように、男子と同じに配達するのはめづらしかった。同じ地区の、毎日や読売には一人もいなかった。

「女の子のほうが、勉強と仕事を両立できる子がおおい」

と所長が言ったが、なるほどと思う。話を聞くと、彼女たちの両親は離婚していたり、父親が亡くなっていたり。保護者がいないとき、女は強くなる。多分、男以上に。

夏、夕刊を配っていると、汗びっしょりになる。着飾ったOLとすれちがって「キタナイワネー」なんて顔されると、年ごろの娘としてはやはり切ない。そんな思いを噛みしめているのだから、両立できるはずだ。

私は、弟たちに送金したことを後悔した。過保護だったと思う。勉強しなかったら、いくらでも自分の力でできたのだ。

奨学生の給料は当時で手取り三万円。授業料は奨学金で賄えるが、教材費や

昼食代は自分の給料から出す。かなり苦しい。デザイン学校は教材費がかかる。私の授業料は二年間で八十万円だった。二年間仕事をすれば、返済しなくてもいいが、途中で専売所を辞めるときは、期間に応じて返済する規定だった。だから学校に行かなくなっても仕事だけは続けざるを得ないのだ。

この専売所の若者たちは、皆さわやかな気持ちのいい人たちだった。年上の私に対しても親切だった。所長も奥さんもいい人で、とくに奥さんの手料理はいつも楽しみだった。その点私は恵まれていた。なかには、かなりひどいところもあるそうだから。

二年間の思い出はまだまだ尽きない。正直いって、逃げ出したい時もあった。上野に飛んで行って、信越線に飛び乗ったこともあった。途中で引き返したけれど。家をでるとき母に言われていた。「卒業できなかったら、帰って来るな」と。私は、母の言葉がありがたかった。「苦しかったら帰っておいで」と言われたら、二年も我慢できなかった



たかもしれない。そして、挫折感にさいなまれただろう。

今、私の枕元に、小さな目覚まし時計がある。これは卒業のとき、学校から贈られた奨励賞の記念品だ。私の宝ものである。

### （自分の醜さを知る）

だがここで私が得た最大のものは、自分の弱さ、醜さを思い知ったことだ。大学生のSさんを私は憎んだ。理由は、彼女が若くて、美人で、頭がよくて、性格もよかったから。

理不尽なことは、分かっていた。私は、自分の辛さ、苦しさを彼女を憎む

ことで持ちこたえた。私に精神的な余裕があったら、こんなことにはならなかっただろう。Sさんには、なんといって謝ったらいいか、言葉も見つからない。

私は、自分の両親を、愚かで弱い人間だと軽蔑していた。私は違う。私は親のようににはならない。そう思うのが私の支えだった。しかし私の中にも、同じものがあることが分かった。辛いけれども、それを自覚できただけでもここでの二年間は無駄ではなかったと思う。

卒業して、私が就職したのは印刷会社だった。せっかく学んだインテリア・デザインだったが、この職は私には向いていないと思った。ちょうど父が大怪我して、私も早く経済的に安定する必要に迫られていた。写植オペレーターは、腕さえよければ高収入になる。この会社で夫と巡り会うことになる。うとは。夫は三歳年上で、三十二歳。穏やかな、やさしい人で、少年のような生き生きとした瞳をしていた。彼は

二歳のとき脊髄性小児麻痺を患い、足が不自由だった。惚れ込んだのは私のほうだ。この人と一緒にになったら、きっといい人生が送れるだろう。そんな直感に当たっていた。彼は物事を理性的に考える人で、感情に溺れがちな私には、彼の話は新鮮だった。

「俺は障害者だけど、自分のことをかわいそうだなんで、ぜんぜん思わないよ。人と同じ速度で歩けなくてもいい。俺は俺のペースで歩いて行けばいいんだから」

夫は自然体で、あせらず気負わず、それでいて普通の人にはできないことをやりとげてしまう。九年前、結婚するとき、安いパソコンを買った。忙しい仕事の合間にコツコツと勉強して、今では大型コンピュータをあやつる

プログラマーだ。夫のような人こそ本当に強い人だと思う。

初めて両親に紹介するとき、私は心配だった。両親が彼を傷つけるようなことを言ったらどうしよう。反対されても結婚するつもりだったが。

父と母は温かく、すんなりと彼を受け入れた。私は、父と母がこんなにいい人だったとは知らなかった。私の親も捨てたものではない。

お互いに愛し合って結婚できたら、最高だ。結婚生活がバラ色ばかりでないことは嫌というほど知っている。だからこそ愛しあった人と一緒にになりたい。母のように生きたくないと思いつけてきたが、いつの間にか母と同じ生き方を選んでいて。父がどんなことをしようが、やはり母は母なりに、父を愛していたのだと思う。

東京で夫と巡りあうために、私は旅立ったのだ。





# 今が 決断のとき

宮城県仙台市

立花 由利(36歳)

## (静かでおとなしい夫)

夫に突然、尋ねてみた。

「フィリピンとか台湾の買春ツアーって知ってるでしょ。あなたもそういうところに誘われたら行くの?」

「病気がうつるからいやだね。エイズになるからね」

いかにも本当っぽく夫は答えた。

夫は神経質だ。表面的には温厚でもの静かで外では評判がよいらしい。家でも静かでおとなしい。きれいな好きで、頼まれれば黙って家事を引き受ける。

茶碗洗いなど手早いし、洗濯もうまい。ただし料理はしない。ジグソーパズルが好きらしく、やり出したら終わるまでやめない。私はそれがいやでパズルを夫の目に触れさせないことにした。自分で買って来てまでする気はないらしく、久しくパズルをしている姿を見ていない。

実は夫は単身赴任中。会社の独身寮に入っている。朝食と夕食付きの寮だ。「おまえ、また太ったなあ」

私のぶっくりした腹をつつく夫は月に三回か二回しか帰って来ない。夫がいつもいないので、「淋しい女は太る」からか、本当に私は二十キログラムも太ってしまった。何でもおいしく食べてしまう。ダイエットは続かないのでやめてしまった。

夫は金曜日の夜遅く戻ると、金、土と泊まり、日曜日の夕食を食べてから来たときのスーツを着こんで帰って行く。

日曜日の夜七時、夫が車から降りる。車やタクシーで混みあう降車場で私はあわてて車を発進させる。夫の手のぬくみがハンドルにすこし残っている。

バックミラーにうつる夫の姿はよその人みたいにも見える。東京なんてやっぱり遠すぎる。私はカセットテープを押し込む。バラードよりロックがよい。バラードを聴くとよけいに淋しくなる。

金曜日の夜遅く夫を迎えに行くときはラジオもかけない。帰りは夫が運転をする。

「ね、たまにしか運転しないんだから、

気をつけてよね。缶ビール、飲まなかった？」

夫は乱暴に急ブレーキを踏んだりしてみせる。口元が笑っている。車の中では二人きりなのに話をしたり、しなかったり。夫から話しかけてくることはほとんどない。

家に帰り、お風呂に入り、お酒を飲みながらスポーツニュースを見て、お茶漬けを食べてから猫と遊び、またお酒を少し飲んでから、

「疲れたから、先に寝るよ」と夫は寝てしまう。

土曜日の朝、子供たちが起きて来て、「あ、パパ来てたの」と騒ぎたてるが、夫は半分眠っている。

夫がいてもいなくても子供たちは喧嘩ばかりするし、テレビばかり見ている。

「あなた、いるときぐらい子供を怒ってよ」

と私はヒステリックに大声を出してしまふ。

夫は馬耳東風でにこにこして娘とじ

やれたり、息子とプラモデルをいじったりしている。

## （夫と話がしたい）

土曜日の夜は、いつもよりおいしいものを多めに作って夫に食べさせる。夫はいつも黙って食べる。いつものことだけれど、

「ね、おいしい？」

と私が言う。夫が黙ったままだと、

「おいしいでしょ」

と念を押す。

「うん」

と言いながら夫の目はテレビを見ている。

夫は空腹だと機嫌が悪いので早目に用意して念入りに作ったのに、いつもこの調子だ。

「私の仕事は主婦だから、料理を作るのも仕方ないよね」

と私は心の中でつぶやく。

子供が寝てから、夫と二人でテレビを見る。夫はお酒を飲むが、私は飲めない。

「あなたはお酒も飲めるし、タバコも吸うし、ストレスがたまらなくていいわね」

「おまえは食うのがストレス解消だろ」

夫は、まだテレビを見ている。

十二時を過ぎると酔いがまわるらしく、

「もう寝る」

と夫はふとんに入り、すぐにいびきの音が聞こえてくる。

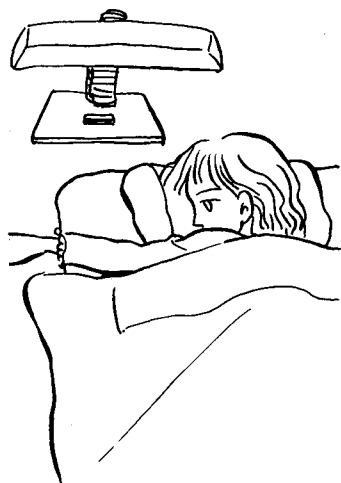
私は深夜映画を見たり、映画がおもしろくないときは本を読んで、二時ごろ自分のふとんに入る。となりで夫は口をぽかんと開けてまぬけな顔をしていびきをかいている。お酒とタバコのおいがある。私はお酒もタバコも嫌いなので夫に背を向ける。

お酒をたっぷり飲んだ夫は朝まで起きないのを私は知っている。

いつのことだかもう忘れてしまったけれど、夫のふとんに入って起こそうとしたら、

「うるさいなあ」

と夫は大きな背中をくるりと向けてし



まった。そんなことが三度か四度あって、私の「プライド」は傷ついたが、夫は何も気付いていないだろう。

夫は疲れているのだ。残業に出張、そして単身赴任。夫は私と子供たちを食べさせるため仕事をしてカネを稼いでいるのだ。

不倫をする人妻って、私のようにワーカーホリックの夫に冷たくあしらわれた日々が毎日毎日続いたのかもしれない。

夫とコミュニケーションがほしい。

私は家にばかりいて夫以外の人と知り合う機会がないので、不倫の機会もないし、仮にあったも夫や子供を裏切れない。それでも今のままの夫では不

満だ。だんまり夫はいやだ。

夫と妻って何だろう。私が十代からずっと影響を受けた故ジョン・レノン、二度結婚した。二度目の妻が、小野洋子だ。ジョンとヨーコがいて、たくさんさんの世界が広がった。二人はたくさん語り合った。

私も夫と話がしたい。

### （まず私が変わらねば）

昨年の三月、仙台で田中さんの「書きたい女たちへ」という講演会に行き、「わいふ」の購読を始めた。フェミニズムに関係する本も読み始めた。どの女の人も元気が良くて心強い。六月には、再度田中さんの講演会があり、「やるか、やらないか。チャンスがあったらやるほうを選んで下さい」という言葉に出会った。

ずっと専業主婦をしていると「やる気」がなくなってしまう。「どうせ私は……」と目の前にある食べものを食べてしまふ。家事は毎日同じ繰り返しだし、子育てにも手がかからなくなる

と退屈で仕方がない。

子供の教育費と単身赴任で我が家の経済は火の車だ。私が働きに出ればよいのだが、まだ健康に自信が持てない。無理に働けば、病気が再発するのだ。私の体には大きな手術のあとがあったのだ。

すぐに働けないなら、今のこの不満だらけの毎日の暮らしを解消していきたいと思う。

仕事と単身赴任で疲れている夫との関係を「改善」したいと思う。

この前、夫が帰って来たときに思い切って言ってみた。

「あなたは私に何も言わない。お酒ばかり飲むだけだし、私を見ようともしない」

「……」

夫は無言だ。

「どうして、私たち、一緒にいるんだろ。こんなふうなら、結婚しないほうがよかったんじゃない？ あなた、どうして結婚したの？」

「子供がいたほうがいいじゃないか」





夫はたよりなげな表情で答える。

「子供ねえ……」

子供にずっと振りまわされている私は、毎日毎日、山のような洗濯をし、育ち盛りの食欲を満たすための食事作りにうんざりしている。夫は我が子を食べさせ、着せ、教育するために単身赴任までして稼いでいる。

子供がほしいかった夫は人生のひとつの目的を達成してしまった。子供ほんのうの夫は子供にとっては良い父親だろう。賭け事もしないし、浮気もしないし、家計に口も出さないし、私にとっでは良い夫なのだろうが、私は夫に不満がある。

もっと話をしてほしい。私のほうを

向いてほしい。私の存在を認めてほしい。  
「私のこと、嫌いなんでしょう？」  
「いい年して、おまえはおかしい」

夫は、たぶん私を嫌いではないと思う。私も夫を嫌いではない。しかし、このごろ夫が「よその人」みたいに思えるときがあって、不思議な気がする。ことがある。

「好き」だとか「嫌い」だとか夫と妻でこたわるのはおかしいのだろうか。

でも私は好きな夫と一緒に暮らしたい。夫に「おまえのことを好きだ」と言われたい。夫にとって大事な存在でいたい。

地球の上で出会った二人なのだから、そしていつかは死んでしまう二人なのだから、生きていて感じたことを、いろいろなことを語り合いたいのだ。ジョンとヨーコのように、語り合いたい。

子供たちがもっと小さかったころ、いつも夫は電話もよこさずに夜中の一時すぎに酔って帰って来た。ある日、そんな夫を私が見ると、夫は、

「そんなにギャーギャー言うなら、おまえがカネを稼いでくりゃいいだろう」

と声を荒らげたことがあった。あのときの夫は恐ろしい顔をしていた。自分のカネがないことはみじめなのだと思うされた。

「子供のことはおまえにまかせている」これは夫のいつものセリフだ。このごろは夫に反論するが、夫はだんまり。「はらへった、ごはん、まだ？」

と、息子が私に言う。

「あんた、家庭科で料理、習ったんでしょ。ママに作って食べさせてよ」

「なに言ってんだよ、ごはん作りはママの仕事だろ」

「何でママの仕事なのよ？」

「うるせえなあ、早く、ごはん作ってよ」昔は可愛かった息子も今は憎らしい。

「性別役割分業」の洗礼を受けてしまった息子を改心させたいが、「どっぶり専業主婦」の私には自信が持てない。まず私が変わらなくては……と思う。どのようにしたら変われるか今、真剣に考えているところだ。

だんまり夫が変わらないなら、まず私が変わってみるつもりだ。



# 22歳の ターニングポイント

東京都府中市  
黒田美奈子

## （転んでから翔び立つ）

アッと思った瞬間には、天と地が逆さになり、私はもののみごとにひっくり返り、腰と頭をしたたかに打った。給湯室の前にほんの少しこぼれていた水に足をとられたのだ。

しばらくの間、頭の中は真っ白——我に返って立ち上がったとき、なぜか身も心も羽のように軽くなっている自分を感じた——転ぶってこんなに気持ちのいいものだったんだ……。

翌日、私はもはや何の迷いもなく、卒業後五か月勤めた会社に辞表を出した。二十二歳の八月だった。

それまでの私は、転ばぬよう、転ばぬように歩いてきた。転んだ経験もほとんどなかった。比喩的な意味でなくとも、私は実際転ぶことが苦手で、自転車も一度も転ばず覚えたし、スキー・スケートの類には近づかなかっただらう。

そんな臆病な私は人生においても、

世間がごく標準的なお勧めコースとして、少女にそして若い女性に示している道を、用心深く歩いていた——転ばぬように、皆と歩調を合わせて。

地元の公立小学校から、私立の中等学校そして国立の大学へと、ほとんど何も考えず、親や教師の勧めのまま進学した私は、手のかからない、いい子、だったと思う。

何だかおかしい——と気がき始めたのは、大学に入ってからだった。理数系の成績がよかったので、迷わず選んだ理科系の学部は女子は一割ほど。できると思っていたのも「女子校の中では」だということに気が付き、実際の講義に接してみたら、本当は関心の持てない分野だということがわかった。大事な進学先を決めるのに、一番尊重しなければならなかった自分の本当の興味、それがどこにあるのかを見極めることをしなかったツケがまわってきたのだ。

このままではいけない、あたらしい一番輝いてしかるべき時期を無駄に過ごし

ては——もんもんとしつつも、当時の私には、他の大学を再受験することも中退して就職することも全く考えられなかった。「世間なみ」から少しでもはずれる勇気がなかった。

身が入らないまま、それでもなんとか単位だけは取り、留年することもなく卒業。ゼミの先生の紹介で就職。専攻分野からんだ仕事ゆえに、当然仕事も全くおもしろくなかった。やめることばかりを考えていたが、決断はできないままズルズルと五か月が過ぎ、給湯室の前での転倒の日を迎えたのである。

親にも紹介者であるゼミの先生にも、事後報告をするだけという形で退職した私は、五か月間で貯めたいくばくかのお金でできることを、できるところまでやってみることにした。何を——何でもいいが、選択の基準は、「自分がやりたい」ということのみにしぼった。世間体がいい、就職や結婚のとき有利かもしれない、ということではな

く、純粹に自分のやりたいという気持ちだけを基準にした。そんな風に考えたわりには、常識的な結論になってしまったのだが、私が選んだのは、全日製の英会話学校で学ぶことだった。お弁当持参で週五日だから、ヘタな大学よりハードだ。

### （狭い世間からの脱出）

そこには、留年した大学生、二部や大学院に通っている学生、企業から派遣されている人、外国留学を目指している中年の牧師さん、英語の教員採用試験にトライしている人、外資系企業への再就職を準備している人、リタイアしてボケ防止のためという人から、パトロンの世話になりながら優雅に外国へよく遊びにいっている人など、まさに老若男女さまざまな人が集まっていた。

教える講師のほうも、アメリカ人、オーストラリア人、中国系の人もしればアイルランド系の人。在日年数もさまざまで、いずれにせよ、異国で不

安定な職業についているからには、それなりの人生を背負っていて、日本人と結婚している人もいれば、日本人が大嫌いらしい人もいた。

同じ年代の同じような環境の人たちばかりの中で育ってきた私には、こんなにもいろんな人がいる、こんなにもいろんな生き方がある、ということがとにかく新鮮な衝撃で、自分は今までなんと狭い狭い世間しか知らなかったのだろう、その狭い狭い世間での「常識」や価値観なんて、何なんだ——このことに気づいただけでも、退職してこの学校に入った意味は充分あったと思った。今までの友人たちとは全く違



ったタイプの多くの新しい友人を得て、一年後に「卒業」したとき、私は混沌とした私の明日を、混沌としているがゆえにおもしろがれるようになっていた。この先いっただいどうなっていくのだろう、これほどおもしろいことって世の中にあるだろうか——なんていったってこのドラマの主役は私自身なんだから。

### （輝きはじめた？私）

かわいい？ だれのこと？ 私？  
エッ！ ウツォー！

ある日二人連れの男性に道を尋ね、お礼を言って歩き始めたとき、後ろからその二人の話し声が聞こえてきたのだ。

「やけに親切じゃないか」

「そうさ。オレ、かわいい子には弱いんだ」

その「かわいい子」が自分のことだと気づくの少し時間がかかった。なぜならかつてそんな風に言われたことは、全くなかったから——。理屈ぬき

にうれしかった。女性ならだれだってうれしいだろう。まして二十二歳という若さだ。

ショーウィンドーに映してみた自分は、相変わらず背だけ高く、ちょっと太めの女の子でしかなかったが、どこかが違ってきていたのだろう。この一件の後、男性から誘われることが多くなったし、電車の中で声をかけられそのまま自宅までついてこられて困った、なんていう、若い女性ならだれでも一度や二度は経験があることを、遅まきながら経験することになったのだから。自分の人生を自分のものとしていとおしみ、それゆえに責任も自分が持つんだ、という緊張感が、平凡な顔立ちの十人並みの私を美しく見せていたのだろう。

前述した英語学校へ通ったことは、結果として全く思いがけない二つの幸運をもたらしてくれた。一つはNHK外信部という職場であり、もう一つは現在の夫である。

## わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いでない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 事↓こと 丈↓だけ 方↓ほう 様↓よう 御↓ご 迄↓まで etc

◆送りがなについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変わる↓変わる 浮(か)ぶ↓浮かぶ 話(し)合う↓話し合う 気持(ち)↓気持ち 行(な)う↓行なう 表(わ)す↓表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。

◆投稿は必ず原稿用紙にたて書きでお願い致します。

NHK外信部——超エリートが集まるここに、NHK職員という正規のルートで入り込むことは至難の業だ。まして全く畑違いの理科系大学を出た、新卒でもない女性にとっては、全く考えられないことであったが、くだんの英語学校で知りあった友人の紹介で、IECという会社からの出向という形で、私はその外信部内に自分のデスクを得た。

そこでの仕事は雑用を主としたものではあったが、六十人からの部員の中で女性がたった三人ということもあり、大事にされ、かわいがられ、多くの貴重な経験をさせてもらった。外信部長はあの磯村さんだった。

おりしもベトナム戦争末期で、つきからつきへと打電されてくるテレックス、続々と到着するニュースフィルムが、刻一刻と変化する戦況を伝え、最後の一週間くらいのアマリのアツケなさ、アレヨアレヨという間の終焉に、人知の及ばぬ歴史の必然を感じた。負けるはずのないと思われていたアメリカ

力が負けたのだ。変化を続ける世界の中の自分、歴史の中の自分をハダで意識した初めての経験だった。

昨年来の東欧情勢の激変のニュースに聞き入るとき、当時の外信部の緊迫感が思い出され、熱い興奮が甦った。結婚し、第一子出産前に辞めるまでの三年半のNHK勤めで、私は私なりの「世界観」「歴史観」を形成できたのだった。

### （好きな男性と結ばれて）

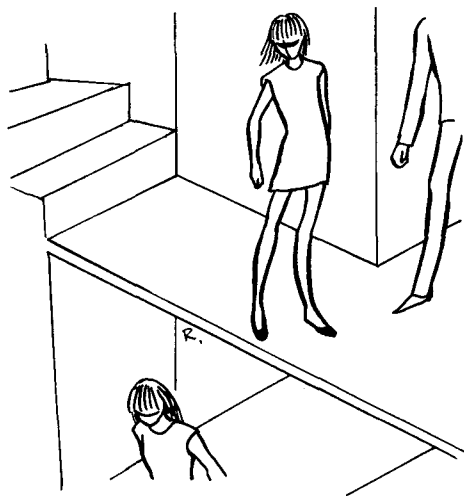
もう一つの幸運である夫との出会いも、くだんの英会話学校が舞台であった。例の七十年安保のあたりで、就職に乗り遅れた彼は、一たん卒業はしたものの学士入学して、二度めの四年生をしつつ、英会話を学ぼうとしていた。生まれも育ちも私とは全く異なる関西の專業農家の長男であり、身長も私より八センチも低く、通常では結婚するとは思われなかった二人だったが、縁というの不思議なもので、もう十六年余りの結婚生活が続いている。そして、

### ご投稿のさい、次のことにご注意下さい

●住所変更や本のご注文など、事務連絡を原稿末尾に書いたり、びんせんに書いたものを同封することは間違いが起ります。ちです。

編集部では原稿と思って扱うので、見落したり、封筒に残って発見されなかったりします。何度か例がありますので、別便になさるか、同封の場合は表書きに「事務連絡同封」と赤ペンでお書き下さい。

●原稿用紙を二つ折にし、製本のように重ねて、ホチキスで二・四か所もとじてくる方があります。二つ折ですと整理、割り付けが困難です。ホチキスを大苦心ではずして、開かなければなりません。原稿用紙は開いたまま、右肩一か所をホチキスなどで止めていただくと助かります。●投稿のさいはまず投稿規定をよくお読み下さい。



自分で言うのもナンだが、これがかなりの、堀り出しもの”で、彼との結婚は、我が人生最大のヒットだと確信している。

当時私には、結婚も意識しておつきあいしていた大学のときの同級生がいた。東京の人で次男で公務員、私と並んでも遜色のない体格のその人は、入学したときから心に留めていた人であり、卒業後に初めて一対一のデートに誘われたときは、思わず「ヤッター!」と心の中で叫んでしまった人だったのだから、英会話学校での出会いがなか

ったら、私はこの人と結婚していたかもしれない。

結婚ということを考えたとき、以前の私だったら、世間でいうところの”つりあい”を第一に考えていただろうが、あの日の転倒以来、自分の気持ちを最優先にすることにしてきたから、好きだ、という思いを確かめさえすれば、迷いはなかった。

できるだけ長く一緒にいたい、という思いに忠実に、あのころトレンドだった”神田川の世界”も体験し、親には随分心配をかけてしまったが、私が自分の生を精一杯充実して幸せに生きることこそが、一番の親孝行だと思っていたから、気持ちの上での揺るぎはなかった。親となった今、この考えはまちがってなかったことを断言できる。

歴史に、イフ、がないように、人生においても”もし”はありえないが、でももしあの日給湯室の前に水がこぼれてなかったら、転ぶということの爽快感を味わうことがなかったら、私は

あれからの二十年をどう過ごしていたのだろうかときどき思う。年々ともにより臆病に、慎重になっていったかもしれない。他のキッカケを見つけて、やはり転ぶことを恐れずに生きてきたかもしれない。私の周りには、見ても歯がゆくなるような生き方をしてる女性もいれば、アップレとエールを送りたくなる女性もいる。そして私だって、ちゃっとしたことで、あんな人にも、こんな人にもなっていた可能性があるのだ——そう考えたとき、私の人生だけでなく、どの人の人生もいとおしいと感じるようになった。

いろんな偶然の重なりの中で、現在は、三十六歳からの再就職としては、かなり恵まれた職についている。嘱託とはいえ、管理職だ。というもののこの安定した状況に少々苛立ちを感じ出しているのも事実だ。次のステップのためのキッカケを心のどこかで望んでいる。長く転ばないでいてまた転ぶのが恐くなってしまいう自分を恐れているのかもしれない。

# 一人一芸

## 私のフレグランス・

## ブレイクタイム

### ―香りを創るとき―

千葉県千葉市

布施美佐子

今から六年前、私が学生時代の大病の後、家の中でウツウツとすごしていた一時期、週刊誌の広告欄で、Yプロジェクト・フレグランス教室という香水創りの通信講座のあることを知った。

およそ我慢じゃないけど、幼いころから「犬猫並みの嗅覚」と人に言われ、自負(?)してきた私。「もしかして、コレハ私に向いているかも」と思い、この通信教育を受講してみることにした。

十日ほど後に、テキストと教材の香料等

一式が届く。さっそく、テキストをパラパラとめくってみる。

「この世の中には、だいたい二百万の混合物があり、その中の四十万のものには『におい』があると言われている。その中でも、良いにおいと思われるものは約一割ほどで、残りはほとんど悪臭に近いものだ」「香水の原料となる、香料(オイル)を抽出するのに、例えば、バラなら一キログラムの香料を手に入れるためには、約千キログラムのバラの花ビラが必要になる」。フムフム、へえ、と感心して読むうち、香水が「液体の宝石」と呼ばれるそのゆえんがうなずけてくる。

### 香水は「香り」のソナタ

中でも、香水をつけた後に微妙な香りの変化が起こるのは、「その人なりの体臭とミックスされていくため」……なんて、私

はそんな大ざっぱな理由だけを考えていたのだが、実はそれは、揮発性や保留性などの、性質を異にする、大別して三タイプの「香料」たちがインパクトを与えたり、アピールしたり、ときにはコクのある雰囲気をかもしだしたり……と時間の経過による「香りのバリエーション」を持つべく構成されているからと知り、香水が併せ持つその「ミステリアスな時の芸術性」には思わずうならされた。そうした香りのイメージや主張の移り変わりのさまは、ふと「香りのソナタ」を思わせる。

第一章・トップノート(上立ち。香水瓶を開けたときや皮膚につけたてのときに香る、香水の第一印象。ライトで揮発性の高い物質から成る。香りの保留性は低い。主に柑橘系の香料。大体つけてから約五、十五分内外持続)

第二章・ミドルノート(中立ち。その香水の特徴が一番表れる。トップノートが「第一印象」ならば、これはセカンドシーン。いわば心臓部。中間の揮発度と保留性をもつ。ジャスミン・ローズ・リラをはじめとした花々の香り。持続時間は大体三、



#### 四時間

第三章・ラストイングノート（残り香）  
肌につけた香水がたどる最後の状態。揮発度が低く、保留性に富む。動物性香料、ムスク・アンバーgris・シベット等。香り全体をコクを持たせしかり支える役目をしている。半日〜二、三日以上も持続するものもある）

これらの性格の異なる香料が、ひとつの小瓶の中で静かに眠っていたのが、ひとたび人の温かい柔肌に一滴こぼれ落ちた、そのせつな、各々異なる「つぶやき」を持つ香りが目覚め、次々顔をのぞかせ、違った「香り」の楽章を奏でていくなんて、チョット素敵だ。

オリジナルの香水を創る前に、テキスト

の処方箋に添って、レールデュタン・シャネル十九番・ジョイ・ミツコ・タブー・フイジー、各タイプの香水が教材の香料をもとにつくれるようになっていく。それらの有名香水の調香率のバランスを参考にしながら、いよいよ世界中でたった一つの自分だけの香り創りに入っていく。

#### いざ！フレグランス・ブレイク

よく、創った香水をプレゼンした先方に、「どうやって作るの？」「煮るの？」「焼くの？」と聞かれるが、つまるところ、ここでは二十数種類の香料の選択と、そのブレンド具合が本スジとなる。

たかがブレンド、されどブレンド。なかなかイメージした香りにならないのだ。思いもよらないにおいになったりもする。試行錯誤のすえ、「アア、これは己のイメージネーションの貧困さから来るのだ！」と思ひなおし、原点にもどる。

まず、香りのイメージを決める。トップ、ミドル、ラストイングの調香率を決める（たとえば、アフターファイブ向きや、重厚なタイプの香水を創りたかったら「ラストティ

ングノート」の役割を果たしている香料を多分に調合する、等）。次に、そのイメージにあわせて数種の香料を選ぶ。それらの香料をそれぞれ何ccずつ用いるかをあらかじめ計算してメモしておく。

香料瓶に注射針を刺し、注射器でそれぞれ香料を正確に量り、小さなビーカーに移す（「一トンのバラの花びらから得られる、たった一キログラムの香料」が、これら一本一本の香料に込められている、と思うと何だかワクワクしてくる）。

さて、香りは如何に……？ におい紙（細い紙片）の先でスメリング（少し浸して、香りをかぐ）してみる……この香りで「納得」したらば、安定剤（ろ過剤）を入れ、静かにかき混ぜ、香水瓶に静かに移し、タッパー等で他に香りが移らないように密封して、一週間〜十日間、冷蔵庫の中でねかす。

一週間後、小さな紙を使って、作った香水をろ過する（化学変化等によって生じる不純物をとり除くため）。これでデキアガリ！

後は、でき上がった「香水」に適量のア



ルコール（A無水エタノール）を加えると、トワレやコロンにもなる。

結婚後、妊娠時のひどかったつわりの時期から育児中、すっかり「香り創り」から離れてしまっていた。

子供が二歳になったのを機に勤めを再開。職場と育児と家庭……と、雑多な生活のシガラミの海（？）の中をアップアップしながら、ときとして、自分が磨滅し「腐葉土」と化していくのではないか、という焦りを感じる日々のなか、ふと思いだし、押入れの奥に押し込んであった「香料」の箱を実に三年ぶりに引つ張り出してみた。

一日の終わり。夫も子供も皆寝静まった、星もまたたく、静かなしずかな「独りきりの世界」の開幕。香料の入ってる箱のフタを開く。パアッ、と立ちのぼるイイ匂い……

——ああ、ワタシはこのときを、待っていたのだ……！

久し振りに、どんなイメージで創ろうか。私の背中に、想像の真つ白い翼が生える。どきどきしてくる。香料の香りとともに、ふあっ、と心が宙に舞う。あわただしい生

活の中で、この唯一の「孤独なるイマジネーションの世界」に浸れる私の貴重なときは、私にうるおいと安らぎという、イオンの働きを与えてくれる（幸いにして、香水には生活のにおい、というものが全くない！のだ）。

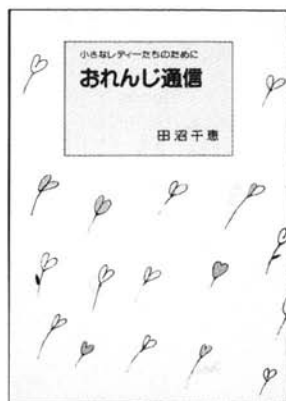
創った後の用途もさまざま。「香水」というとなんとなく身構えてしまうようなものでも、「私の手づくりの、ちょっぴりハッピーな気分になれるエッセンス」よく眠れるように」などと少しシャレた小奇麗なカードにメッセージを一言入れて、誕生日の贈りものになったり、出産のお祝いの品に添えて、新ママにプレゼントしたり、というのも、喜ばれる。

私の個人的な使いみちとして、単なるオシャレの小道具の域から出ると「アガリ防止の薬」。淡いタイプの香りで、気持ちを集中させやすい、オハコの香水をひとつ創り、バッグのなかにもいつも入れておく。こ一番、というときに、手首に一滴つける。こころなしか、じたばたと波立った心の水面がより早く平静になっていくような気がする。使いかたによつては、ときには「妙薬」にも早変わりする。

創り方も、贈り方も、使い方も、さまざま。私にとって「香りを創る」ことは、ちよつと大袈裟な言い方かもしれないけど、今では「心の平安を得るための精神的な財産」の一部と、落ち着きつつある。



（え・カステラネンコ）



# そして

## たまたま自費出版

東京都渋谷区 田沼 千恵

人との出会いはどうしてきなことではない、  
と言ったのはK出版のMさん。拙著『おれんじ通信』がとりもつ縁で知りあった。確かに言われてみればその通りで、人との出会いがなくては何事も始まらない。

『おれんじ通信』だってそうだ。『わいふ』田中編集長との出会いがなかったら、私はまだあの薄汚れた原稿の束をかかえて、ウロウロしていたに違いない。

二年ほど前、『わいふ』編集部で電話をした日のことを、私はいまもはっきりと憶えている。その日、私は朝から緊張していた。洗濯と掃除を済ませ、朝刊は隅から隅まで

読み、アイロン掛けも終えた。午前中の主婦の仕事はすべて完了。残っているのは『わいふ』に電話をすることしかない。にもかかわらず私はなぜか急に迷いだし、部屋中をグルグルと歩きまわり、コーヒータて続けに三杯も飲んでしまった。

『わいふ』編集部で電話をして原稿を見てもらおう。うまくいけばどこか出版社を紹介してもらえるかもしれない。そうすればこの原稿も日の目を見ることができるのだ。勇気を出そう、と自分を励ましてみる。これが最後のチャンス、駄目でもともと、ふてぶてしく居直ってみる。

だがやっぱりちゅうちょする。断わられ

るだろうなと思う。「出版は難しいですね」「原稿はついでのときにお持ち下されば」きつと気がなさそうに言われるだろう。でもいい。あちらこちらの出版社で断われ続けた原稿である。いまさら強がり言っても始まらない。

そんな一方的な思いがドツと体中を駆けまわると、今度は妙に淋しくなった。

### 一本の電話から

女の子の月経の本を書くかと思ったのは、企業の消費者相談室に勤めていた七年ほど前、たまたま受けた電話がきっかけであった。

「子どもが月経になったのですが、どういうふうに説明したらよいのか困っているんです。それで生理用品を選ぶポイントを教えてください」電話からの声はか細く、遠慮がちに言う。

「買いに行ったんですが品数が少なくて、それに商品の説明もしてもらえませんか」困り切っている様子がヒシヒシと伝わってくる。私は一瞬、本当だろうかと思った。この大量生産、大量消費の時代に生理用品を選べないなんてことがあるのだろうか。第一、月経教育は学校がやっているではないか。何を心配しているのだろうか。電話機を持つ手に思わず力が入ってしまった。

ところがおもしろいものでこの電話がきっかけで、私は生理用品や性教育に関する本に関心を持つようになった。買い物などの折、デパートやスーパー、専門店へ寄っては担当者から話を聞いたり、書店をのぞいてまわったりした。

結果は、あのお母さんの言う通りで、初潮を迎えた小さな女の子の生理用品の数は少なく、デザインも古くさい。よくいえ

ばオーソドックス。悪くいえば遅れている。これでは購買欲も起らない。もっと楽しくって明るいものはないのだろうか。

性教育の本も同じことだ。著者は医者や教育関係者が多い。内容も高度である。対象が教師とか親むけだから、科学的、論理的で、図解や写真が多いことも妙に気になる。この部分の図解や写真を見て、なるほどと思い、美しいと思える人は何人ぐらいいるのだろうか。よしんばいるとしても、そう多くはないはずだ。

子どもは体のしくみを知らなくても、初潮を迎える。そして大人となり、妊娠し



て母となる(だろう)。体のしくみを教えることは大事だが、今、この時期に伝え急ぐことはないのではないか。それよりも、自分の体の変化をどのように受けとめるのか、といったことのほうが大切だ。

楽しくキラキラしている若い時間だからこそ「命」の重たさを考えることができるのだ。そのためには、まず自分を大事に思うところを育てたい。人を愛することの大切さは幅広い人間教育以外のなものでもない。

使い終わったナプキンを水洗トイレに投げ捨てて排水管を詰まらせる。汚れたナプキンをむき出しのまま捨てて、平気な人もいる。そのとき、自分がよければすべてOK。面倒臭いことは苦手なの。ファーストフードとインスタント食品が大好きで、自分の下着を洗うのに何十分もかかる女の子。数えあげたらキリがない。

でも彼女たちはできないのではない。やらないだけだ。少女期のスタートの段階で、誰かがほんの少し時間をさいて、しっかりと教えていたら、と思う。「月経はこういうものなのよ。およそ四十年間も続く長い

おつきあいだから、仲よくしなくてはいいけないの。体も心も健康であることが大切よ。品物を選んで買って、使ってみる。使いながら工夫してみましよう」と、ポイントを押さえて伝えることができればマスターできる(はずだ)。

だが、それを丁寧に伝えることは難しいに違いない。環境、性格、生活条件、家族構成が各々異なっている。伝えたいという気持ちはあるても、どうもテレクさくって、という人もいる。「性」を「生」として受けとめるにはどうしたらよいのか。月経教育は人間教育である。そしてズバリ消費者教育だ。考え選び体験する時間をたっぷりあげたい。

そう思ったとき、私は子供が自分で読む「月経の本」をなんとか書いてみたいと思った。しかし、一体全体、素人が本を書くなんていうことが本当にできるのだろうか自分自身でさえ疑わしい、抛りどころのないスタートである。

こんな私の頼りない思いとは対照的に、わが娘(当時小学生)は、テーブルに置かれたたくさんのパンフレットや資料に興

味を持ち、「ママ、すてきな本を作ってよね。絵がいっぱいあって、月経の本だって分らないように作ってよね」等、難しい注文をする。「分かった、分かった」と答えながらも、頭の中は不安で一杯。加えて、あんなことも入りたい、こんなことも入れよう、と欲ばってしまふ。でも、娘からの注文はとても参考になった。

## 出版にいきつける

原稿ができあがったのは一年ほどしてからである。初めは原稿さえできればなんとかなるだろう、と思っていたが、素人の書いた原稿など紙クズ同然なのだ。訪ね歩いた出版社のほとんどに断られるという毎日。ときにはアイディアだけをちゃっかり盗用されるというアホな経験もした。さらにおかしかったのは、「月経の本」といったとたんに、自費出版の会社にも断られてしまったのである。

私がこう言うと、たいていの人は「そんな馬鹿なことがあるだろうか」とかなり冷やかかな顔をするが、本当である。自費出版は自分でお金を出しての本作りである。

自分の意見が尊重されて当然なのだが、作る側にだって理屈はある。お金をもらったからって「いや」なものはいや。月経の本なんて趣味悪い。そんな本を作る必要があるのか?と言いたいところだろう。もちろん単刀直入、ズバリ「やりません」とは言わなかったが、突然、相手の口数が少なくなり、無言のまま深々とタメ息をついた。そのあと乾いた声で、「再度、検討しませんか!」と言った。こんな経験を二度もしてしまった。これはまさに貴重な体験といえよう。

私はいつのころからか、この原稿は男性編集者では駄目だ、と思うようになった。母親の気持ち、女の思いを分かってくれる編集者に頼みたいと思ったのである。この願いは日増しに強くなった。

こんな気持ちを「わいふ」なら分かってくれるはずだ。なぜこの本を出版したいのか理解してくれるに違いない。そうだ、「わいふ」にしよう。それがいい。

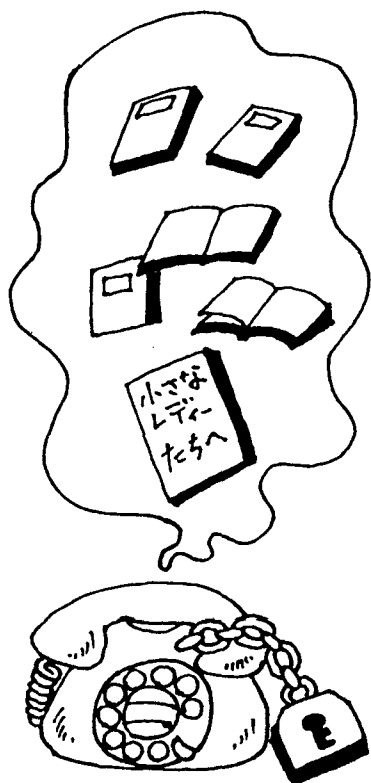
ところがいざ電話をして頼もうとすると、妙に緊張が高まる。十数回も断わられているのだから、断わられ慣れしているはずな

のに、なぜかドッキン、ドッキンしてくる気の弱さ。私にも、こんな女らしいところがあったのかと改めて感心(?)してしまっただ。

さて、やつの思いで電話をした結果は、まさにおかしいほどあっけなかった。

電話口に出たのは好運にも、田中編集長である。「原稿、見たいですね。すぐ持ってこられますか、無理なら来週のはじめごろにしましょう。いいでしょう」

こんなことを言われるなんて思ってもい



なかった私は、ボーとしたついでに、おもわずその場で日時の約束をしてしまった。数日後、原稿を持参したときもそうだった。原稿を読み終えると同時に「自費出版でやりましょう」と言う。「費用はできるだけ安く、部数は五百部でどうでしょう」

自費出版なら百部で充分と思っていたのに、根が素直にできているから、つられて「はい」と言ってしまったのである。

とにかく田中編集長は話が早い。うしろじしていない。どうしよう、明日考えよう、などと答えを後に引きのばさない。ポンポ

ンとリズムミカルに言われるから、こっちもついその気になって、「ハイ、オネガイシマス」。

結局、自費出版はいやです。出版社を紹介してください……との本心は最後まで、言い出せなかった。

半年後、本はできあがった。「小さなレディたち」のために『おれんじ通信』と題した本は印刷部数五百・頒価七百八十円。少々、高いような気もするが、印刷部数が少ない自費出版は、どうしても一冊あたりのコストが通常市販されている本に比べて割高となってしまう。

それにしても自分の本を売り込むのはどうもテレ臭く、私はやっぱりセールスマンには向いていないようだ。山積みされた本を前にして、出るのはタメ息ばかり。どうやって、この本をサバイたらいいのか、胃が痛むのであった。

最初に本が売れたのは、原宿のミズ・クレヨンハウスである。ここは落合恵子さんのやっている女性の本の専門店で、私はここに委託販売という形で、当初十冊だけ置

かせてもらった。店の手数料は、販売額の三〇パーセント、売れなければ返本というかなり厳しい条件でのスタートである。どうなるものかと心配したが、ボツボツと売れ、ちよっぴり「ほっ」とした六月の初め、家族計画協会から機関誌に本を紹介したいとの申し出があった。田中編集長が紹介してくださったとのこと。とにかく、ありがたいの一言につきる。急いで原稿を書いて送ったが、このときはまだ、このことが後々大きな福音になるうなんて思ってもいなかった。

一か月ほどして機関誌に「本」の紹介記事が載ったとたん、本を読みたいとの電話や手紙が全国から殺到した。この記事が導火線となり、新聞に取りあげられるとさらに、たくさんのお便りが届いた。北は北海道、南は沖縄、そして遠くシンガポールからも依頼があった。

だが、そのとき、本はすでに初刷は売り切れ、あわてて増刷するというハプニング。家族の対応では間に合わず、友人、知人をまき込んで、ワープロ打ちに宛名書き、梱包作業にあぐくれた数か月。目のまわるよ

うな、とはこのことを言うのだろう。

## 反響の大きさに驚く

本を読みたいとお手紙をくださった方は、実にさまざまである。老人ホームで暮らすおばあちゃまは遠く離れて暮らす孫に贈りたいと、古い切手を代金代わりに送ってきた。まもなく結婚する恋人と読みたいという青年。子育ての悩みを便箋五枚、細かな字で書いてきた若いお母さんからの便りは、子を思う母の愛にあふれている。学校の先

生。看護婦さん。子どもたちからも、かわいい手紙が届いた。

しかし、何よりも驚いたのは、お父さんたちからの手紙だった。離別、死別と理由はいろいろあるが、世の中にこんなになくさんのシングルファーザーがいるなんて、お便りをいただくまで想像しえなかった。

体のしくみは別としても、月経の手当てやナプキンの種類、ショーツの選び方。母親ならなんのことはないことも、男親となると難しい。苦手とおっしゃるその気持ち、私にはよく分かる。女である私だって、娘に伝えるとき、さてどう話したら一番よいかと考えた。

「月経をすてきなこと」と思えるように話すことは案外難しいのである。月経を好きになれるように話すつもりだったのに、結局は平々凡々、ありきたりの話で終始した、という話はよく耳にする。「自分が月経を好きになれるのに、子どもに好きになれるようになって話せないわよ」とわが友は正直に言う。

お父さんたちからの手紙を読みながら、私はとっても複雑な思いがしていた。父子



家庭が直面する悩みは、直面した人でなければ分かり難い、日常的なことに端を発している。いやむしろ、日常的ゆえに問題の根は深いのもかもしれない。

そうは思っても私にはどうしてあげることもできない。何もできない分、私の心は重かった。だから、せめての思いをこめて、私はその父娘家庭の女の子宛に手紙を書いた。「困ったことがあったらお手紙くださいな」と。だが、結局その手紙は出さなかった。こんな手紙で解決できるようなことではない、と思ったからである。

本がなくなった今も、「本」はありますかと電話がかかってくる。手紙が届く。「ごめんなさい」とお詫の返事を書きながら、私の胸中は複雑である。売れる情報、売れる本とは一体なんなのだ。「月経の本なんて誰も欲しがりませんよ」と男性たちは横を向いた。「そうだろうか、そうかもしれない」と半信半疑で出版した本。だが、いただいた問い合わせは三千通を越えて、まさに予期せぬ出来事となったのである。



## 売れねば悲しく、 売れたら売れたで

さて「自費出版」とひと口に言っても、やっぱり大変な仕事だ。原稿から資金調達、出版社探し、依頼—校正—配本—代金回収まで、すべて一人でやらなくてはならない。これがけっこう忙しい。売れねば悲しく、

売れば売れたで忙しい。気の休まるひまがないのである。

だが冒険に満ちている。時にはハブニング、おもわぬアクシデントにも出会うけれど、それも楽し。売れねばならないという使命感のもとで作られる商業出版とは異なって、自由なのがいい。

とは強がり言ってみるものの、自費出版に対する評価はやっぱりいろいろある。スタートが自分史や家族史、遺稿集、趣味、嗜好、といった私的な部分からのものが多かったため軽視されがちだ。児童書の推薦団体であるR協議会も「どんなにすばらしい内容であっても自費出版本は対象外です」と公言している。

「そうか、それならそれでいい」と思う。

いずれ世の中は変わる。自費出版に対する評価も少しずつ変わっていくだろう。

お医者さんが自分の患者さんたちへのアドバイスを出版したという話を聞いた。原発の本を作ってしまった主婦たちもいる。あせることはない。それまでゆつくりと待つ。家康スタイルでいけばいい。自費出版には自費出版のよさがあるのだ。

最近では、「本」の問い合わせと一緒に、自費出版に関する相談もいただくようになってきた。

「費用は？」これが最大の関心事である。次は、「制作期間はどれくらいでしょうか」とくる。続いて、「出版社はどこがいいでしょうか」いろいろなことを聞いてくる。尋ねられるから丁寧に答えする。相手はフンフンと神妙な面持ちで、メモをとったりする。なかにはかなり過激な質問をする人もいる。「自費出版って儲かりますか？」「……」まさに「ア然」親しき仲にも礼儀あり。それが初対面の人間に堂々と尋ねるのである。

「まあ、儲かりませんね」と答えると、「本当ですかあ」相手はなおもたみこむ。なんとにしても儲かりましたと言わせたいらしい。

さてこれは蛇足だが、自費出版の本は、貰っていただくものと決まっているようだ。手紙を添えて送っても、着いたのか着かないのか返事もない。反対に、ちゃっかりした人もいる。「面白かったわあ、あと二、三冊欲しいの、友だちにあげたいから……」

「私にはくれないの？」と請求する人もいる。差しあげる方だって、代金が欲しいのではないからケチる気持ちはないが、せめてひと言、「受け取りました」と言って欲しい。それで満足する。素直な書評を送ってもらえば、これまた感激である。ギンギラギンの見えすいたお世辞より何倍、何十倍も嬉しいものなのだ。

ところで、もしあなたが、自費出版をしたいと思っているのなら、大事なことが三つある。

第一は、書き手（あなた）と出版社の相性の問題。相性がよくなくてはよい作品は生れない。自費出版なんだから、と事務的に仕事を進めるような出版社は、私ならお断わり。書き手の気持ちをしつかりと、受け止めてくれるところを探すことだ。

第二は、出版費用。これは原稿量にもよるし、イラスト入り、写真入り、データ挿入、といういろいろと条件が違うから、ズバリいくら、とは明言できない。見本誌を見せてもらい、見積書をもらって（数社から）比較、検討することが大切だ。

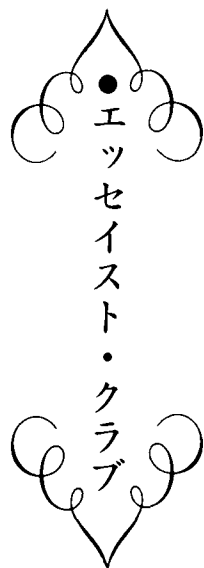
第三は、いまは宣伝の時代である。だが

多額の宣伝費を使えない自費出版は、せっかく出版してもそこで終わる。せいぜい知人、友人に知らせるぐらいが関の山である。マスコミ関係にコネのある人は別として、普通の人はなかなか売り込めないのが実情だ。でも、出版社によっては、販売路について細かなアドバイスをしてくれるところもあるから、そのへんをきちんと確認しておくことを忘れてはならない。

（ちなみに「わいふ」の場合、本人が希望すればマスコミなどに紹介してくださること……希望者は相談してみるといい）  
「いいえ私はおくゆかしく自費出版をしたのです。経費はかけたくありません」という人は自分でワープロをたたいてのワープロ出版がよいだろう。原稿入力さえできれば、あとは編集も印刷もワープロがやってくれる。デパートには自費出版用（？）の製本セットも売っているから、買ってきてコツコツ作る。これが本当の自費出版。楽しみながら作る。真正正銘、手作りの「本」である。それもまた、楽し。楽しくなければ自費出版ではない、と私は思っている。

（え・小宅昌枝）





## 「下駄世代」と私

東京都足立区

山内いく子

物置を片付けていたら、十数年も前に娘に買っ  
てやった下駄が出てきた。夏祭りに浴衣を着てで  
かけると言うので初めて買ったおとな用の下駄で  
ある。黒塗りに赤いべっちゃんの鼻緒がついていて  
当時九百円ほどであった。

祭り好きだった娘も今は仕事をもち、浴衣を着  
て出歩く余裕もなくなって、下駄は奥深くしまわ  
れたままになっていた。「もう履かないから捨て  
て」と言うが、一・二回しか使っていない物をむざ

むざ捨てる気にはなれない。かと言ってまたしま  
い込む場所もない。こうしてしばらく出しておい  
た下駄を、いつしか重宝に使うようになっていた。  
靴のように急いで履いてかかとを踏むこともな  
いし、サンダルのように夏はベタベタと汗ばむこ  
ともなく、素足で快適である。汚れは雑巾でひと  
拭きすればきれいになる。何より、我が足の指は  
自由を謳歌していて痛めつけられることがない。  
私は十八歳までを伊豆半島南端の町で過ごした。  
幼いころは父が呉服商をしていたこともあって和  
服を着ることが多く、小さいころから下駄に親し  
んでいた。

正月や祭りが来ると母が私を下駄屋に連れて行  
って、新しいのを買ってくれた。そんなとき母は  
「桐下駄の軽いのはどう？」とか「つぎ歯でない  
のがいいね」などと言って、高級なものを何足か



選んでくれたが、私はそんなことはどうでも良く、ただ色鮮やかな格好の良い物が欲しかった。

赤や黒のつややかな塗り物の下駄を買ってもらって、親指とかかどにあたる部分が剥けるまで、鼻緒をすげ替えては履いた。学校に入ってからはずく靴を履くこともあったと思うが、革靴は余程のことがない限り使わなかった。

戦争が激しくなってきたから、わらじを履いたこともあった。学校でわらじの作り方を指導し、宿題ででき上がった作品を履いて町中を歩いたのである。さらに物資が不足すると「足を鍛える」という名目で、学校では時々「はだし教育」が行なわれた。厳寒の朝はだして神社に詣でたこともある。

戦後、高校生になってからも、革靴はなかなか手に入らなかった。私の町ではこれが普通で、制服姿でちゃんと並んだ当時の記念写真でも、足は下駄というのが何枚かある。

八つ手のように指がひろがって幅広の私の足は、こうして青年期までに形成されたのであろう。おとなになってからも、おしゃれな靴を履くと、二・三日続けて強行軍したときのように全身が疲れる。こんなことで疲労するのはつまらないから、余程のことがない限りかかとの高い靴は履かない。

娘の見捨てた一足の下駄を愛用するようになってから一年になる。庭を掃除するときも、ゴミを捨てに行くときもこの下駄である。一度、片方の下駄の歯が一つとれたが、セメダインでびったりついて、履き心地は相変わらず良い。冬でも指のない靴下に鼻緒をくい込ませて使用している。

「カタカタと音がして近所迷惑じゃないか」「洋服とじゃあ、全くサマにならないわ」などと、文句をつけていた夫や娘も、あきらめたのかこのころ何も言わなくなった。

橋本治編「消えた言葉」の中で、亀田武氏は次のように書いている。

「洋服に下駄は似合わない。……中略……下駄はやっぱり素足か足袋でない絵にはならないようだ。

足袋に似せた靴下というのがあるにはあるが、実に見た目がグロテスクで、この時世にわざわざ下駄を履こうという酔狂な人たちの美意識にとっても適うとは思えない」と。

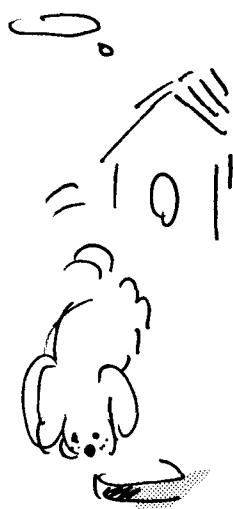
しかし私は今日もあたりに騒音をまきちらさないよう気がねをしながら、カタカタと音をたててゴミを捨てに行く。そんな私は「酔狂な人」ではなくて、しまりやの「戦中派」のひとりなのである。

# 子犬

東京都武蔵村山市

大沢 陽子

昨年の暮れ、「うちの軒先に捨てられた子犬が、餌もやらないのにどこへも行ってくれない。かわいそうだけど飼ってはやれないし、どうしたものか」と相談を受け、預かることにした。生後一か月ほどの、とてもおとなしい子犬だった。その子



は間もなく、人を介して百草園の近くの人にもらわれて行った（「犬の飼い方」というパンフレットとともに）。

今日その子犬を見に行った。子犬は私にとびついてそれはそれはうれしそうに歓迎してくれた。暑い日だった。子犬のそばに水もなかった。近

くのスーパーで牛乳を買って来て、子犬に半分やった。子犬はゴクゴクと飲み、目が合うと私をなめ、またゴクゴクと牛乳を飲んだ。私も飲んだ。私と子犬はおしたりおされたりしながら、一本の牛乳を分けあって飲んだ。

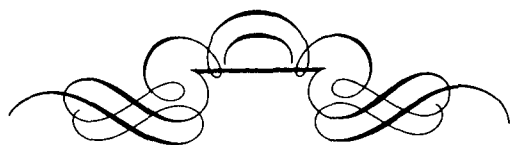
成長して喜びを表現するのがうまくなったのか、私を覚えていてくれたのか、子犬は一生懸命私の手や顔をなめてくれた。かわいかった。頭をなでてはおずりした。

百草園は家から二時間もかかる。立川までバスに乗り、そこから高幡不動までまたバスに乗り、そのあと一駅だけ電車に乗る。

そんなに時間をかけて来て、私のしたことは子犬の頭をなで、牛乳を買って来て分けあって飲み、そしてまた頭をなでただけ。子犬と一緒にいたのはほんの十分ほど。

半月ほど前、初めてこの子犬を見に来たとき、鎖がからまって身動きできなくなっていた。雨もかかっていた。何より糞の多さに驚いた。あんまりたくさんあるので数えたら糞の山は二十六もあった。

からまってなかなかほどけない鎖をほどき、ぬれた体を拭き、あたりの糞を少し片寄せて頭をなでた。この子はいつか捨てられてしまう、と思っ



た。

小屋のまわりが汚くなるのは犬のせいではない。世話しない飼い主のせいなのだ。が、犬がいると汚くなる、と捨てられてしまうことが多い。この子もそうなる。世話したくないのなら今のうちに返してもらおう、と思った。が、何日かたって、私の考えすぎかも知れない。今は散歩に連れて行ってくれないでも、そのうちもうすこしちゃんと世話してくれるようになるかも知れない、と思った。そして今日、この間よりよくなっていたら黙って帰ってこよう。この間のようだったら、世話が面倒ならいただきたい、といってもらいうけて来ようと思って来たのだ。

どっちだろうと思いつつ、もう大分大きくなっている子犬にそーっと近づいた。糞の数が少なくなっていた。このくらいなら大丈夫、この子はここで生きていけそうだ、と思った。ひざしが明るかったからそう思ったのかも知れない。表情豊かに育っていたことで、この子はそれほど孤独ではないと思っただけかも知れない。

気にはなるけど、この子のことはこの家の人に任せよう。多分、もう来ることはないだろう。と思いつながら、子犬の頭をなでて別れてきた。子犬はキューンキューンと私を呼んでないでいた。

## 延命辞退

大阪府東大阪市 中塚 末子(65歳)

七十八歳の嫂は痴呆症が嵩じて、ついに飲み下す喉の動作を忘れてしまった。家に連れ帰って、終焉を家族で看取るか、病院であらゆる延命治療をするか、医師より、二、三日のうちに決めるよう求められたとのこと。

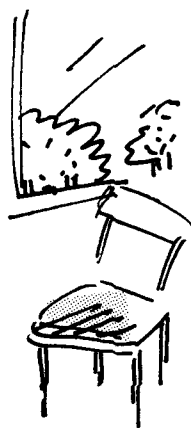
驚いて姉と駆けつけた病院で、長椅子に小じんまりと掛けているいつものにこやかな嫂を見て、狐に騙されているようにしばらく茫然。そんな私たちに嫂はつぶやくように、

「どうぞ、掛けて……」

「どうしやはったん嫂さん、元氣そうでよかった」椅子を出そうと手が宙を這う。

「嫂さん、私、分かりますやろ」と、姉。

「ええー、ええー、は、え、さん？」



重い呪縛から解放されたように姉の喜びようもひとかたでない。何しろ毎日見ている息子に「あんた、どなた？」なのだそうだから。それに体には何の苦痛も、食べないことへの不安もないらしい。

末っ子のわたしは小学校四年生のときから嫂とともに暮らしてきた。大家族の長男の嫁であり、先の大戦では夫の二度の応召と実弟三人の戦死に遭っている。結核で戻ってきた義妹の世話や姑のみおくり。はては、長女を三十三歳の若さで癌に拉致された恨み等々。惚けは嫂から悲しみと喜びの区別もなく消し去り、一まわりも二まわりも小さくなってしまって、少しはにかむ笑顔が透明である。

夫を四年前に送り、長い民生委員の役も退いたから、ときどきみんなで旅行でもしましょうと約束していたばかりだった。血管性の痴呆は癒る望みがあると聞いていたのに、嫂の脳の老化した血管はときどき破れた。生まれ故郷への帰心ひとすじに放浪をはじめ、やがて過食癖も出て、家族は昼も夜も目を離せなくなっていった。

この二年のあいだ、同居の嫁、近くに住む妹と次女の三人のチームプレーで、良かれという介護は落ち度なく行なわれ、いつも身綺麗にされ、孫

たちも優しくおばあちゃんの相手をつとめていた。入退院を繰り返し返した病院でも嫂は評判の幸せな病人であった。

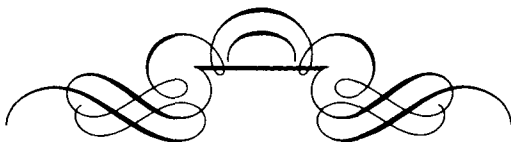


「私は長女で兄弟みんなのお守りをしてきたからこうして大事にされるよね。あんたらも若いときに、よおう人の世話をしといたらええねんで」

娘時代に返っていた嫂は、昔に教えられたことが甦って、付き添う者とちぐはぐな対話をしながら、持ち前の明るさに、介護者の気持ちをはぐした日もあっただろう。しかし病気は少しずつ進行し、とうとう食欲も出歩く力も失ってしまった。

病室を生まれた家でしょうと言って眺める色の白い丸顔は、ますます神に近くおだやかである。されるがままの姑、子供を見守らんばかりの嫁、親子はすっかり逆だけれど、あとしばらくこの平和な眺めのままでいてほしい。

「昨日ちょっとばかり、ジュース飲めましてん。やつと思ひ出してくれはって。少しでもお腹に入ると、ねえ、今日は元氣そうでしょう。他はどこも悪くないといわれてます。家に帰らはったら、ひょっとして食べること思ひ出さはって、また元氣にならるかもわかれしませんし。お姑さんの



持つてはる寿命だけが頼りです」

医者は「自然看護が一番良いのだが、家に連れて帰って、このまま食べなければ四、五日で脳梗塞を起こすだろう」と言うらしい。若い嫁は不安よりも姑の天命を信じる決意を持たようだ。寝た切りにならないよう、毎日、服に着せ替え、抱き抱えて椅子に座らせ、姑の日常を保たせている。ましてや、ただ生かせておくために痛い思いをさせ、寝たきりにさせるのは忍びないだろう。

てきぱきとした若いお嫁さんを拝むような思いで病室を出た。久し振りの吹雪がひりひりと頬を打ち、町を覆い、故郷はたちまち昔日のさまに戻っていった。

まもなく、子供三人で医者に延命治療を断わったと聞いた。

## 第一子

大阪府豊中市 高宮 みか

母親が初めての子どもになにかと思入れる話  
はよく耳にする。入れ込み過ぎて子離れができて  
いないとか、逆に母親離れができないとか、期待  
のかけ過ぎだとかいろいろに言われる。



私は三人の子持ちだが、自分がとしごで五人き  
ようだいのせい、子どもはとしごで五人生むつ  
もりだった。

それが、五人というのは時代錯誤であることが  
分かって（母の子育ての時代は私の時代に比べて  
家の広さと人手が十分にあった）子どもを三人に  
しぼったが、としごというところは思いどおりに  
実現できた。

一時的にせよ、夫とふたり、あるいはひとりで  
三人の世話をしなければならないことが大変だろ  
うという想像はできた。だが、はっきり言ってそ  
こが私の狙い目でもあった。

ひとりで三人もの赤ん坊の世話をし、ひとりで

三人もの反抗児をかかえ、悪がきを相手どり、偏差値戦争を切り抜け、金食い虫のためのやりくりをする。

これらを三人ひとからげに済まされないものだろうか、と考えた末の結論というわけなのである。もう一度念を押すと、この結論はあくまでも自分自身が、としご五人きょうだいで育てられてきた体験からでているのである。

そう言っでは親に申しわけないが、私はどちらかというところ放りっぱなしに育てられてきたような気がしている。自分がそうされたから、仕返しをしようということではない。私の育った時代がだいたいそんなふうであった、と言えなくもない。私だって自分の子どもは自分の信念をぶつけた育て方をしたい。しかしそれには今の時代が豊かに過ぎると思ったのである。

では私の子育ての信念とは何か。

戦争が終わってからはじめての春に小学校へ入学した私の子ども時代にもどこにでも転がっていて、どこへ行くにもぶつかったあのハングリー精神、もちろんそのころは精神なんて神聖な称号はついていなかったが、それをなんとか子どもに伝えたい、というへんな信念を持ったわけなのだ。

その信念を成就するための三人ひとからげ論な

のである。

それにはひとりひとり丁寧に手をかけたくも手がまわらない、手をかけられない状況に自分と子どもをおいてしまうことに限る、と考えた。

その結果、第一子である私の長男には一歳二か月にならずして妹が、二歳五か月にならずして弟ができた。

私は男の子は男らしくとか、女の子は女らしくと分けて考えるのを好まなかったし、兄と弟の差も二歳半では誤差範囲と思い、比べることより個性と認めたいほうで、おおむね子どもたちとはその線を貫いて接してきたつもりでいる。

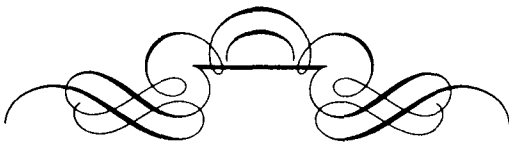
前置きが長くなってしまったが、今年長男が大学を卒業し社会人になる。これで私の彼に対する母親業もおしまいだ。やれやれ、これで無罪放免ばんざーい。

私のキャラクターから察すれば、友人の多くは私の心境をそう解釈すると思う。

ところがものごとはそう簡単にはゆかないものらしい。

最近の私は、結構しんみりとそのことを想っている。

彼が生まれて、そろそろ五か月になろうかというある日、それまで夢中になって吸っていた私の



乳首を彼はふいと離した。

「母子とも六か月になると味を覚えて離し難くなるから、おっぱいは六か月でやめたほうがいい」と、聞いていた私は難なく実現した乳離れにはくそえんだ。それが二週間たって二番目の子を宿していたことが判明したのである。

もしかしたらそれが彼の遭遇した第一子の悲哀のはじまりだった。

三番目の子を妊娠したとき、上ふたりはまだおむつがとれないでいた。長男がふたつになりそろそろおむつを取るべき時期になっていたが、だんだんお腹は大きくなるし、どっちみち洗濯ものはあるのだし春に赤ん坊がうまれるまで、とおむつははずしてやらなかった。その結果二歳半までおむつをさせられ、おねしょの長かったのも彼である。

お腹の子と抱っこの子、それに荷物を持った私は、彼にはしっかりスカートの前をもたせて歩いた。下の子が早くから塊の肉を好んで食べたのに、いつまでも離乳食につきあわされた彼はハンバーガーのほうが好きである。

転校や受験、大学を決めることから家を出ること、すべて彼との体験が私の子ども体験の指針となった。三人ひとからげといいながら二子、三子

を一子の後ろに束ねているだけだったような気が今ごろになってしてくる。

そうなるとどんな信念であろうと、母親の子育ての信念などというものは、第一子に分け持たれてやっそこさつとこ、ここまでできていることになる。

今にして思えば、彼に元人（げんと）と命名したのは当を得ていたかもしれない。元は、もと、はじめ、かしら、あたまなどと辞書にある。私たちの初めの子、子どもの中のかしら、元になる人である。

そんなことを考えていると、母親が最初の子どもにかける思い入れを他人事のように笑ってばかりはいられない気持ちになるのである。

春きたりなば、

イカナゴを炊く

兵庫県神戸市 岩田 佳子（53歳）

春先から当分の間、神戸の路地裏を歩くと、花の香りにまじって甘辛い匂いが漂っている。

この時期、いつもどこかでだれかがイカナゴを炊いているのだ。

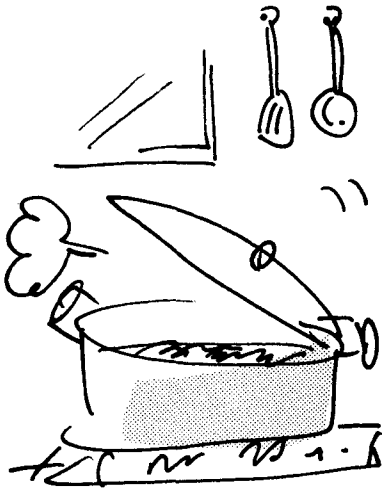


三月に入ると、神戸の漁港にイカナゴの稚魚が大量に水揚げされる。

地元の人たちは、この時期を待っていてイカナゴを甘辛く煮付けて佃煮をつくる。でき上がった姿がちょうど折れ曲がった釘のような形になることから、イカナゴのくぎ煮と呼ぶ。

神戸に住んで十八年になる私も、いつのころからか地元の人たちに交じってくぎ煮をつくるようになった。

もとはといえば、蛋白質を長期保存するために先人が考えだした加工食品であるが、食生活が豊かになり、つくりおきをする必要もなくなった昨今では、くぎ煮づくりは、お花見と同じように春のお楽しみ行事のひとつになってしまったようだ。イカナゴは大雨でも降らない限り、毎日午前午後と二回にわたって水揚げされ、すぐに神戸近辺



の魚やトラックで運び込まれる。弱り易く三時間が勝負だと言われている。店の前には入荷の頃合いを見計らって集まった客が列をなして待っていて、とろ箱から手づかみでビニール袋に一キロずつ詰めこまれたイカナゴが、片端から飛ぶように売れていく。一人で二キロ、四キロ買うのはざらで、八キロ、十キロと買う人もいる。

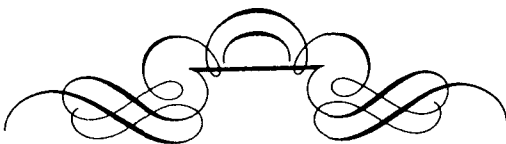
そんなに、たくさん買ってなににするのか。もちろんくぎ煮をつくるのである。くぎ煮をそんなにたくさんつくってどうするの。親戚知人に神戸からの春のたよりとして配るのである。

私は今年、二キロずつ三回買って六キロ炊いた。二キロ炊くのに約二時間はかかる。しかもガス台のそばから離れられない。お砂糖の量が多いので火加減に気を配らねばならないからだ。炊き上がったくぎ煮は金網の笊に入れて冷まし、市販の容器に詰めて得意先?の順に送る。

世の中が平和であればこそ、自分が健康であればこそ、手づくりの佃煮を人に配って楽しむことができるのだ。

昨秋来、ひざの具合が悪くて、この春のイカナゴ炊きが危ぶまれていた私は、例年になく春の行事をし終えた喜びをしみじみと感じている。

(え・カステラネンコ)



## 憂国のドン・キホーテ 赤尾敏氏を訪ねて

東京都板橋区 志賀壽美子(46歳)



女性スキヤンダル、贈収賄、政治的うそもここに公認され、まさに日本人の民意を反映した衆議院選挙も終わった三日後、Tさんから電話があった。用件も終わり最後に半分冗談、半ば真面目な口調で「そういえば志賀さん、選挙に出なかったじゃない、どうしたの？」さらにつけ加えて「たいし

たことはできないけれど応援するわよ。」  
そういえば、そんなことを勧めてくれたあの老人を、彼女とSさんの三人で訪問してから一年が経ち、彼はもうこの世にいない。

「拡声器騒音を考える会」の結成に参加して以来、その諸悪の根源の一つは政治活動にあると考えるようになった。「拡声器騒音？ 選挙が一番いかな」私達のピラを受け取った鯨岡元環境庁長官が即座に発した言葉とその後の手紙に意を強くし、理想選挙（欧米では普通選挙だが）を掲げ、哀願、連呼等を一切しない青島幸男元参議議員も二度訪問した。

政治活動といえば、大音量で街を闊歩する右翼の街宣車も見のがすわけにはいかない。東京の数寄屋橋交差点でのぼり旗を林立させた街宣車上でマイクを握る、大日本愛国党総裁の赤尾敏氏を知っている人も多いであろう。そこで立ち止まって耳を傾けたことはないが、衆・参両院選や東京都知事選など主な選挙に彼は必ず立候補するので、政見放送は何度か耳にしている。言い

たい放題の彼の演説は実に痛快ではある。右翼の代表として彼の言い分をぜひ聞きたいものと常日ごろ考えていた。彼の唯一の著書、憂国のドン・キホーテ、中の経歴によれば、もう九十歳を目前にした高齢で、急がねば――。

文京区大塚にある赤尾敏氏の道場を訪れたのは、昭和も終わりに近い六十三年十一月二十七日のことである。訪問者は私を含めて三人の女性、いずれも四十代のナイスミディである。

最初は一人で行くつもりでいたが、かなりの女性好きという彼にサービスしようと考へ、会員の女性を誘った。皆最初は「恐ろしい」「気味悪い」など言っていたが、「きつとおもしろいから」と説得した。もっとも彼に言わせると「こわいもんだから三人で来たな」になり、私のサービス精神は通用しなかったが。

道場は二十畳以上はある広さで、一方の壁面いっぱいキリスト、釈迦、明治天皇が描かれ、正面には天皇一家、蒋介石などの写真が飾られている。姿を見せた彼はや

せてはっそりとして、その上足もとが少々おぼつかなく、訪問を決断して良かったと秘かに思った。上きげんで話し始めると、さすがに巧みな話術で、何をどう話してもおもしろおかしく、あごが外れるかと心配になるほどだった。

ぼくはもう三十年もの間、雨の日以外は毎日午後数寄屋橋で「辻説法」しているが、選挙になると街頭での活動が規制されるんで選挙に出るんだよ。供託金が二百万円かかるが、それだけで自分の主義主張が全国に伝わるんだから、そう政見放送や公報でね、これは大宣伝なんだ。ハガキ一本出したって何億とかかることを思えば安いもんだよ。

そうだ！ あんたもぜひやったら良いよ。皆から寄付金集めて、ぼくも供託金の百分の一ぐらいは寄付するからさ、もっとも戻ってきたら返してくれよ。機関誌のことも書けば良いんだ。女の立候補者はまだ少ないし、なんたって女はもてるからね。特別良い写真を出すんだよ。そうすれば男なんてバカだから、こりゃ社会党の土井委員長

より良いなんてな。あの委員長だって女だからもてるんだろう。イギリスのサッチャーもエライね。天才だ。ぼくは尊敬してるんだ。

ぼくと共産党の野坂（参三）君とで推薦するってのはどうかな。右と左が一緒じゃ訳がわからないって？ どうせ訳のわからない世の中だ、思い切っちゃってみたら良いんだ。あれももうぼくより年取ってるが偉いところがある、良い宣伝になるぞ、これは。

ぼくの主張は天皇中心だが、中味は共産主義のようなところがあってね、土地は国有にすべきだと言っている。これ、共産党と似ているでしょう。左翼よりぼくのほうが危険だって、田中・中曽根君もぼくをこわがっているんだ。天皇中心なんて言うだけに抑えがきかないってね。

右翼が大きな音出して迷惑だって言うがね、金はない、マスコミ初めすべての機関から締めだされる、で、結局は怒鳴るしかないじゃないか。騒音がいかんて言っちゃってそりゃ人にもよるよ。くだらない内容じゃ迷惑だが、ぼくのは世直しのため説法す

るのが目的なんだから、そうあの日蓮上人のようにね。まあ「現代版辻説法」ってわけだ。

ぼくのことを頑迷固陋だの時代おくれだなんて言うがね。ぼくは怒っているんだ、この世の中に。ぼくの理想はキリストやお釈迦さんの世界だよ。彼らは次元が高いもの。

赤尾氏は大正時代より社会改革に身を投じ、昭和十七年の衆院選で東京六区より立候補し、全国四位の得票で当選したが、戦争に反対したため翌年議席を失った。戦後公職追放を受け、二十六年解除後日本愛国党を結成した。昨年七月の参院選中から体調を崩し、入院院を繰り返し返していたが、今年二月六日、心不全で亡くなった。九十一歳であった。

世の中、正しいと考えたことがとおるわけではない。わかってはいても時には怒り心頭に発して我を忘れてしまうこともある。「眉間のその縦じわなんとかならんか」と夫に言わせる痕跡がいつしか私の顔に残ってしまった。

天皇制と共産主義が同居するといった非論理性もその理由のひとつであったろうが、彼の政治理論は政治勢力とはなり得なかった。



た。しかし「怒鳴るしかないんだ」と言っただ彼の心情にはどこかで共感を覚えてしまった。

## 曜変天目の鬼

奈良県生駒郡 高松 恭子

Kさんは陶芸教室の先輩だった。がっしりした体、目鼻立ちのはっきりした顔から、若いころはさぞハンサムだっただろうと思われる。次々と焼く独創的な作品には、七十年代半ばという年齢を感じさせない若さが溢れていた。

私が初めて教室に行った日、Kさんはふらりとやってきた。Kさんの練習目ではないのだが、先生と土のことやうわ葉の話をしながらも、目はずっと私の手元に注がれていた。慣れない手つきでろくろを回し、歪んだままで出来上がっていく私の作品に手を出したくてたまらない様子がありありと窺えた。

先生が席を外すや、Kさんは、「ちょっとこっちへ貸しなはれ」と、ろくろごと私の作品を引き寄せ、自分の好みに忠実に、私の第一作目の湯呑みを作ってしまった。



Kさんの価値感覚は実にはつきりしたものであった。焼き物というのは、抹茶茶碗や、壺や、立派な飾り皿を焼いてこそ価値があり、湯呑みや飯茶碗などはガラクタにすぎないというのが一貫した考えであった。夢は、秀吉でもとびつきそうな、曜変天目の茶碗を焼くことで、その執念は凄まじく、自宅に電動ろくろと小型の窯まで備えていた。

天目茶碗というのは茶の世界でも首位に据えられて貴人の器とされるが、神技とさえ言われる油滴天目も曜変天目も私は大嫌いだ。抹茶茶碗も興味はあるが、自分で作ろうとは思わない。Kさんには、そんな私

が不思議だったようだ。私の練習日に必ずやってきては天目の魅力を懇々と説いた。

自分中心に世界が回り、自分の価値感覚を人にも押しつけるところは、明らかに老人そのものであったが、私はやや辟易しながらも、Kさんの情熱には心を動かされた。

Kさんは教室の窯でももちろん、自分の窯でも次から次から曜変天目に挑戦した。

しかし曜変天目は、この世にも宋代のものが四点残っているだけで、再現は不可能と言われる代物である。偶然に焼けるようなものではないのだ。Kさんの失敗作はどんなたまっていた。失敗と言っても、私の作るガラクタとは雲泥の差。

私は、Kさんが処分してしまいそうな作品の中から、大きめの茶碗を一つ欲しいと言ってみた。Kさんは喜んで惜し気もなくくれた。これが私の運のつき（？）であった。それ以降、Kさんは失敗ではあるが捨てるには忍びないといった作品を次々と私にくれた。私の部屋には所狭しとKさんの失敗作が並び、最初のころこそ喜んで貰っていたものの、欲しいものしか持たたくない性格の私には、次第に有り難迷惑になっ

てきた。

しかし嬉しそうに失敗作を抱えてくる年老いたKさんにいらぬとは言えず、私は喜んで貰うことにした。Kさんは、これらの茶碗で私が心静かに茶をたてているとも思っていたのだろうか。Kさんの茶碗はガラ入れになり、灰皿になり、時にはストレス解消のため壊されるハメになった。私は何も知らないKさんを気の毒に思った。

そんなある日、「今日はあんたに、とっておきのを持って来ましたで」に私は、またか！とうんざりしてしまった。ところが、Kさんが取り出した茶碗は天目ではなく、淡い伊羅保のうわ薬のかかったステキなものだった。「えっ！これ、頂いていいんですか？」と目を輝かせた私にKさんは満足そうに頷いて言った。

「ああ、よろしおまっせ。これはあんた、大事にしておくんははれや。今までのとはちがいまっせ。不燃物ゴミに出したらあきまへんで」

私は思わず返事に詰まり、肩をすくめ、心の中で舌を出した。見事に一本取られた気分だった。

# 姑さんの 思い出

千葉県八日市場市 青木 利子

六十三年の秋に結婚して、アパート暮らしをしている長男夫婦が、暮れから正月の三日を実家ですごした。明日からは、また勤務がはじまるので、アパートへかえらなくてはならない。

もう一年も前から心臓肥大や胆のう炎で通院していた姑さんが、十一月のはじめから、足がたたなくなつて床にふしてしまっていた。そのベッドの傍らに行き、

「おばあちゃん、明日から仕事だからアパートへかえるからね。おとうさん、おかあさんの言うことをきいて、早く元気になつてね」と声をかけた。

「もう行ってしまうのか」と、いつになく淋しい返事をした。まさかこの言葉が最後になるとは、このとき考えもしなかった。

翌朝、いつものように排尿のために傍らに置いたポータブルトイレに腰かけさせよ

うと、姑さんを抱いた夫が、  
「なんだかとても重くて持ちあがらない」というので、私も手伝ったが、ほんとうに今までとはようすがちがう。

「どうしたの。おばあちゃん」と、声をかけても返事をしない。これは何か体調に変化があったのだ。さっそくお医者さんに往診をおねがいした。

「これは、ゆうべ睡眠中に脳血栓になったのです」という。

左脳がおかされたのだろう。右半身不随で言葉をすっかり失ってしまった。若いころに、胆のうの病気、白内障の手術、膝の浮腫とか入院したものが、このごろはもう入院はしたくない、と口にしていたので自宅で看病することにきめた。さいわい夫も私も教員を退職して家にいるので、よい



条件ではある。週一回お医者さんの往診、週に三回婦長さんの点滴をおねがいした。こうして八十五歳のねたきり老人になって一年あまりがすぎた。

最近では眠っていることが多いが、その顔をみながら、この姑さんとくらしした三十年余りのことが思い出される。私もよくがまんして、ここまでこられたものだと思つて自身に感心してしまう。

気性が強く、つい三年前までは、じっとしていることの嫌いな人だった。春になるのを待ちかねたように、少しでも暖かくなると田圃のまわりで野芹や三つ葉をとり、山へはわらび、ぜんまい、うどなどをさがしに行く。背負い籠を背に、近所の仲間二人を誘って行くのだが、負けず嫌いで欲の強い姑さんは、必ず一番多くとって、意気揚々と帰ってくる。秋には茸、冬には枯枝とりと、山野とはきりはなせない人だ。

料理もすきで、特におすし、煮物、漬物には自信をもっていた。たくさんつくって懇意にしている家へくばって歩く。

「おばあちゃんのおすしや煮物は、いつ御馳走になってもおいしい」とほめられるが、

それが何よりのお返しなのだ。姑さんは食べる人の立場になって、おいしく食べられるように愛情をもって料理づくりをしていた。しかし、私にすれば、家で食べるのはほんの少いで、他家へくばるほうが多く、その準備や後片づけには私の手をつかうのだから、こういうものをつくるたびに世話なことだと思ってしまう。

毎日つとめていると、日曜日の朝くらい、いつもよりゆっくりねていたいと思っても、姑さんは遠慮会釈なく早くからがらがらと戸をあけるので、私達はねていられない。

「日曜日は大嫌いだよ。朝寝坊したり一日だらだらしていて」と言う。

そして、庭の草とりをしたり、寒いときにはまき割りもしたりする。こうして家のまわりで働いていられては、私も落ち着いて本を読んだり手芸をしたりはしていない。仕方がないので手伝ってみたり、うろうろして働いているふりをしている。なにしろ体を動かしていなければ横着をしていると思われている。つとめたことのない人には、日曜日のほっとした気分がわからないんだと思う。



俸給も、夫の私のをあわせて全部姑さんに渡す。

「二人がつとめたあと、家を守っているのだから、家の経済も全部まかされなければ、おもしろくない」という考えだ。

結婚するまでは、自分の俸給は私一人で管理していたので、大変不便を感じた。必要なきには言うように言われていても、一度財布にいたららはなさないような姑さんである。私は仕方なく、こっそりと目立たない程度に、自分の小づかい分をとっておいた。しかし、服を新調するとすぐに目にとまって、にらまれる気がするもので、姉のおさがりだとうそをつくこともあった。だから、俸給だって、ボーナスだって、私はただの運び屋のような気がしてつまらなかつた。でも、こうして貯金をしておい

てくれたから、家も建てられたのかもしれない。

これを三十数年続けてきたのである。今思えば、私ももっと自分の意志を強く主張すればよかったとも思うが、姑さんの強さには、とてもかなわなかつた。私がおとなしく言うことをきいて姑さんをたてておけば、家庭内は安泰なのである。

姑さんが気にいらなことのあったときの語気はすごく、私は背すじがぞーっとする程恐ろしかった。しかし、機嫌のよいときは面倒をよく見てくれるし、私の息子二人をかわいがって大事に育ててくれた。

息子達は、おばあちゃんはきついけど意地悪でないし、強くて頼りがいがあって大好きだと言っている。冷静になって観察してみれば、感情をおさえることが少なく、自分の気持ちを正直に表現しているだけなのかもしれない。

こうして、すぎたことをあれこれと思いついて出している間にも、病氣と老衰は徐々にすすみ、平成二年一月十四日、ついに力つきてこの世を去ってしまった。

(え・幡ハル子)



## ●出席者

氏田 恭子 鈴木喜久子(東京1区選出社会党衆議院議員)

氷見 章子 間瀬 中子

## ●編集部 和田 好子

## ●司会 田中 喜美子

### 最後は政治!!

司会 では始めさせていただきます。毎回「わいふ」ではテーマ討論会というのをやっています。アップトゥデートな問題や投稿の中から出てきた問題を取り上げて皆さんに議論をしていただくんですが、最近何といっても女性の政治意識はひじょうに上がってきていますから、このへんで一度政治の話をしてみたらどうかということで今回企画しました。

今度の選挙の一番のハイライトは、「マドンナ」などといやな言葉で言われていますけど、女性が非常に多く進出したこと。その背後には女性の多くが女性に投票しているという事実がある。とても嬉しいことに私どもの地元からも鈴木喜久子さんが出て当選なさった。今日はその鈴木さんをお招きしていますが、なぜ女は女性議員を選ぶのか、女にとっての政治ということで皆さんに話し合っていたかと思いますが、

まず、ご自分たちの政治との関りから、話していただませんか。

氏田 今日は東京・東久留米からやっていました。地域での政治活動としては、自分たちの声を通る市政をということで市長選に関ってきました。私は目立つのが得意じゃなくて、もっぱら選挙事務所で炊き出しをやっていたので、あまり大それたことは申し上げられない状態です。

司会 どうも有り難うございました。間瀬さん、お願いします。

間瀬 私も特別政治に関心があったわけじゃないんです。子どもを通して教育問題に関心をもったり、「行動する女たちの会」の事務局にかかわって、否が応でも関心を持たざるを得なくなったり。都立高校の男女粹撤廃の問題にしても、マスコミを通して話をきいていても何が問題点なのか、ハッキリしてこないんですね。

私が「行動する女たちの会」におりましたときに、教育長に会いに行ったり、請願書出しに行ったりしました。でも声が届かない。マスコミなんかにも全然分かってもらってないというか、本当に声が小さすぎる。でも少しずつやっていけばそれなりの効果はあるということで、そんなところか



# わいふ討論会

## 女にとっての政治 なぜ女性議員を選ぶのか

ら私も政治に少し目を開いていったというところ。でも、(女性議員の)あまりの数の少なさに……。

司会 数が揃わなきや駄目ですわね。

鈴木 せめて一割いないとねえ。



鈴木喜久子さん

司会 私ね、今回の選挙に関しても思ったのだけど、最高裁の最近の判決がね、あまりに納得できないものが多いんで、これじやイカン!!と痛感して、「国民審査」のやりかたを何とか変えなきゃいけないと思って三年前から研究を始めたんですよ。今回の選挙にぶっつけて、われわれのやってきた運動を世間に訴えたのですが意外に反応が

あった。ただそのときにものすごく感じたのは、裁判の問題でも最後は政治の問題だということ。つまり、投票のやりかたを変えていくことを議会が決めない駄目なの。現行は罷免したいという人にはバツをつける。で、あとはそのままなんです。そのままなのは皆いいってことになっちゃう。私たちの考えているのは、本当にいいと思う人にはマルをつけて、判断がつかない、棄権したいと思う人には何も書かないということにすれば、それだけでも状況は全然変わってくるわけです。

そのときにわれわれのしたことは、わいふを通じてアンケートをとったこと。したら棄権のつもりで白紙で入れている人が多かったんです。この私もその一人だったんですけど、何も分からないからそのままボンと入れるわけ。これ、棄権のつもりなの。過半数の人が、何も書かないでボンと入れることが棄権だと思い込んでいたってことが、アンケートをとって分かった。

和田 私は東京八王子なんですけど、今回の選挙で初めて大きな紙が貼り出されて、最高裁の国民審査で投票をしたくない人は

投票用紙を受け取らないでください、って書いてありました。

**司会** 新宿区は旧態依然でね、なかなかあの紙を受け取らないようにできないの。われわれが選挙管理委員会に申し入れしなかったからいけなかった。

**和田** 八王子ではなにか騒いだ人がいたんだわね、アレ。

**司会** というようなことで、最後は政治だ!!ということを感じたもので、ますますこういう企画も出てきたわけです。

## 「お〜、やっちゃえ」

**司会** それでは氷見さん、お願いします。

今回の選挙には投票なさいました?

**氷見** はい、行きました。

**司会** 地元で女性議員はいらした?

**氷見** いなかったんです。

**司会** もしいるとしたら、氷見さんは女性に投票しようと思いいになりますか。

**氷見** どうでしょう……やはりその人の意見ですね。いろいろ講演会などでその人の意見をきいて支持できるのであれば……。  
**司会** やっぱり政見放送をテレビできいて

判断なさる……。

**氷見** ええ。一応、国民の義務だと思ってますから。

**司会** 権利と義務ですものね。有り難うございまして。これでひとわり自分たちの政治との関りを言ったわけで、ここであつと、鈴木さんのほうからのお話をお伺いしようと思います。

鈴木さんは、立候補を決意されたのはいつごろですか。

**鈴木** 去年の十二月、最終的には六日ぐらいじゃないでしょうか。本当にギリギリでした。それまでは、テレビに出演して法律相談をうけてはいたけれど、自分の手で政治をすることに関心があるわけではなかった。それこそ選挙で棄権はしないものの、投票することだけで政治につながっていたというか……。ただ選挙結果にはものすごく興味があつて、徹夜でやるテレビの開票結果はよろこんで見ましたね。政見放送きくのも好きだったから、いろいろな人の話をきくということは積極的にしてましたけど。そのほかは、まったく氷見さんと同じでした。



氏田 恭子さん

**司会** それが口説かれて出馬することになって、それなりの変化はおありになったと思ふのですが、そのへんはいかがですか。

**鈴木** もう出ていかなきゃ駄目だと思ったんですね。というのは、私、社会党を支持していたんですよ、ひいきでね。どんなに弱いとか批判があつても、いつかは強くなるだろうし頑張つてやるだろうし、そうなることを願つていつも選挙結果をハラハラしながら見ていた。ところが、いつまでも変わらない。

私、弁護士やつてたから、いわゆる拘禁二法の問題などで国会へ請願や陳情に行つ



氷見章子さん

たり、代議士さんをお願いして回ったり、することは弁護士会の活動の中でやってたわけですが、でも、やってもやってもまだるっこしい。それなら中へ入ってやったほうがいいという気分がだんだんしてきた。それともう一つは、チャンスということ。これが十年前だったら、いくら私が歯痛みして立候補します、って手を挙げて、誰も後押ししてくれないし、きっと落選するだけだろうと思います。でも今回は、「マドンナ」と嫌な言葉で言われようとも可能性があるあるわけだから、それに賭けてみていいんじゃないか、と思いましたね。出て、

そこでね、あれは単なる「マドンナ」ではないと思われればいいわけだから、よおし、やっちゃえ、と。

**司会** 正直いうと、私、鈴木さんはきっと落ちるだろうと思ってた。だって、ポスターはないし、連呼はチラーと二回ぐらいしかきこえないし、こりゃあ、われわれが一生懸命後押ししても駄目か、なんて思っていたら、そのうちに、トップ当選になるだろう、って読みが出たんですってね。

**鈴木** ええ、出たんですよ、投票日のしばらく前に。私だって、そんなわけはない、あれは謀略だと思いましたもんね。

## 人間の成長は「意志」の問題だけ

**司会** それで結局はいろいろなかたちで支持をお受けになったわけだけれど、政見放送で分かりやすい話をしてくださったとか、唯一の女性であるということも含めて、女性に女性に投票するということの裏には必然性があると思うんですよ。

私もまず最近女性でなきゃ駄目だと思ってきたのだけど、そのへんのことを

自由に話していただけますか。

**鈴木** 私、昔は、やっぱり女は駄目だと思ってました。社会党の候補者に女性が立っても、気持ちの中では男性のほうがいいのになあ、と。自分が女だから女に入れるのは嫌だな、と、思っていた部分があった。

**司会** 女性だから女性に入れるのが嫌だというのは分かるけれど、男性のほうがいい、女性に駄目だと思いいなっていたのは、どうして？

**鈴木** 私自身の不満というものを直接政治にぶつけようという意識がなかったのね、きっと。自分の問題意識をそのまま国政に生かそう、というのがなくて、政治というものをもっと遠くの上のほうへ置いていた。私の身近じゃないの。その国政というところにいるのは身近な女性じゃなくて、もっと上のほうで男性がやってくれるほうが頼りになる、そんな感じだった。

**和田** まかせておく、ってことですね。

**鈴木** そう。自分の身近な問題を国政に上げようという気は、さらさらなかったんじゃないかしら。

**司会** 私、それは大多数の女が考えていた

ことだと思う。

**氏田** 私は男の人のほうが頼りになるとは思ってたんですけどね。職場で労働組合をやっているときに、男性というのは労働組合運動やっても出世が頭にあるわけですよ。組合の幹部はエラくなっていく、というコースがありますからね。だから信頼できる女の人がふえていったら本当に投票したいと思ってましたけど、やっぱり女性の立候補は少なかった。

**鈴木** 私もそれが分かってきたのがここ十年くらいです。私自身が職業をもっているいろんな勉強やり始めてから、少しずつ分かってきた。それでも女性のほうがいいとは思ってなくて、男性でも女性でもいい人がいいわ、ぐらいだった。ただ、いまはちょっと違うのね。やっぱり女性でなきゃ駄目だという部分がある。

これは議員になってみて分かったんです、ホントに。いまの利害関係の問題はね、ひじょうに大きな問題です。

**氏田** 少なくとも、女性で立候補なさった方々というのは男性より清潔だろうと思います。

**鈴木** 発想が全然違うんです。

**氏田** これから食べ物とか学校の教育の問題をやる中で、最終的にやっぱり自分たちの代表という候補者が出せるようになればいいなと思いますね。候補者を開拓していく、っていうかね。

**鈴木** あなたがお出になっちゃったほうが早いですよ。それが一番でつとりばやい。ホントに。人材不足とかいろいろいわれているんだから。

**司会** 間瀬さん、いかがですか、今の話。

**間瀬** そうね、女の人もかなりやれるとは思ってましたけどね。ただ政治の世界はド



間瀬中子さん

ロドロしていて嫌だときいていましたから、その中ではたしてどこまでやれるか、とても疑問でしたけど。でも素人でも入ってしまえばかなりやれるんだな、ということを実感して、やはり当選しちゃうのが先というかそんなふうに感じますね。

**鈴木** 本当に出てしまえば、そのうちに何とかやれる。どの女性をみても、やればちゃんとやるだけの能力を出してくるんですよ。もともとあるのかどうか分からないけど、やってみると出るんですよ。

**司会** そうです。わいふをやっていると、それは痛感します。やった人というのは、必ず、アツこの方はここまで伸びるのかと、こちらが期待していた以上の伸び方を皆さんさる。

**鈴木** そうでしょうねえ。

**司会** やったとやらないじゃ、全然違う。やらなかったらもとのままですよ、だけど何かやろうと思って始めた人というのは、みんなすごい能力。私ね、人間が成長していくってことは、ほとんど意志の問題だけだなと思う。能力の問題じゃない。だから、やってみれば誰だってできるんだ、議員だ

ってできるんだ、っていうの、私、よく分かる。

## フェミニズムと女性議員

鈴木 やってみてこの世界が下らなかったら、下らないってことを言って回っちゃえばいいんですね。いいことがあればこんないいことがあったよ、と言えればいい。これから一生懸命、しっかり見てやろうと思ってますけど。

間瀬 言って回っちゃえばいい、というのは女の人の発想だと思う。男の人って立場を超えられないでしょ。だけど女の人は簡単に立場を超えてね、どこへでもいっちゃう。ある意味では党派も超えられることがある。そのへんがメリットだと思います。司会 私ね、さっき鈴木さんがおっしゃったことがすぐ示唆にとんでいて嬉しかったんだけど、昔は男のほうที่頼りがいがあるから男のほうがいいだろう、と。なぜそんなふうを考えていたかという、政治に求めるものが具体的になかったからじゃないか、とおっしゃった。私はまったくそ

の通りだと思う。

いまこれほど女性議員が出てきた、というのはフェミニズムと無縁じゃないんですよ。男社会の中で女は割をくっている。その中で女としての生理、心理をもっているということで、自分が何を求めているか、ここ十五年くらいの間に非常にハッキリしてきた。

この生活の方向、理想の方向、政治の方向ってものを誰に分かってもらえるかといったら、男は分かんないですよ。どんなにエライ男でも。それはやっぱり生理が違うから。あまりこれを言うと、また、男と女は違うんだ、だから女は駄目なんだ、というふうにウツカリするとなる。母性をもっているという、じゃあ母親だけやってればいいってことになるからマズインですけれどもね。でも、違うっていうことは確か。ただその中で女は、自分たちの住みやすい社会をつくるにはどうしたらいいか、っていつも考えている。考えるようになったわけです。それなのに、頼りがいのある男たちというのは、そういうことを全然考えてくれない。そこがハッキリしてきたから、

女の人の票が伸びたんだと思うの。

鈴木 そうですね。

司会 それでは、時間もあまりないので、皆さんに少しづつ伺いたいのですが、これらの社会はどんな社会になってほしいか、漠然としたイメージでけっこうですから、話していただきたいのです。

氏田 本当の意味で男と女が対等になりたいですね。例えばいま話題になってる夫婦別姓の問題ですが、夫婦が別姓になるということは、一つには家庭の中が民主化されることだろうと思うんです。

司会 もっぱら男女平等の見地から、男と女が平等に生きていける社会になればいい、ということですね。

間瀬 いま私が切実に思っているのは住宅政策の貧しさです。日本の貧しさというのは一番そこにあらわれているんじゃないか、そこをキチンとしていくことが、金銭的に豊かというだけではない、本当の豊かな生活につながっていくんじゃないかと思っています。

司会 はい、有り難うございます。じゃ、水見さん。

氷見 福祉の充実した社会がいいなと思います。老人、身体障害者の方が自由に街へ出て暮らせる社会、年をとっても心配なく快適に老後を過ごせるようになったらいい、あまり具体的なことは分かりませんけど。

あと教育ですね。偏差値重視、私立中学受験なんか大変ですよ。どうにかならないかと思っています。

## 生活のすべてが政治に結びつく

司会 和田さん、この問題について少し話してください。

和田 、「わいふ」で前に政治の特集をやったことがあるんですよ。ところがその本は売れなくてね。全体に女の人は、自分の生活と政治が関係あるということが、分かんないみたいですね。男のほうもそうでしょうけど、男のほうは会社を通じて景気が悪くなったかどうか、そういうことで少しは政治を考えているんだけど、女の場合にはまったく雲をつかむような話に思っている。

例えばいま、専業主婦と働いている人と

の間で意見の相違がおきていますけど、働かない女と働く女とにわかれているのが政治的なことだとは誰も思わない。自分たちの意志だ、と思ってんですよ。いまの結婚制度にしても、これが政治的な問題だとは思っていない。要するに、恋愛で結婚したんだと。自分の利害関係と政治とを結びつけるところまで、まだまだ日本人はいいないんじゃないか。ことに女の人はいいないんじゃないか。

鈴木 それはすごく高度な意識だと思うわね。

和田 女は、男の労働時間が長い、もう少し早く帰ってきてくれないか、とみんな言う。ところが、自分が暇だということ、男がうんと働いているということが結びついていないのね。女が暇で、なんで男があるのに忙しいのか、実は政治の問題なんだけど、全然分かっていない。

つまり、高度成長でひじょうに仕事が増えてきたときに、女を仕事に引っぱり出すということを考えていれば、労働時間が男だけに集中しなかった。ところが、拡大した経済を男だけの労働時間でまかなう、と

いうふうにいっちゃった。それで女は家にいろ、ということになったのよね。

ただ、いまの社会が複雑怪奇でなかなか見えにくく、三世代同居にしても何にしても政治とつながっているということが、いまの人に分かりにくいつてことはあるでしょうね。

われわれの世代なんか、あの大戦争があったから、政治と自分が直接つながっている、政治が悪かったら個人の幸福なんてあり得ないということがイヤというほど分かった。けどいまは個人の自由、または商業ベースの話になっちゃって、政治とつながっていないみたいに思ってるわけですよ。司会 きう新聞が何かに出ましたが、

世界環境会議に対して日本チームは大変臆病なのよね。別に異議は申し立てていないんだけど、いまのかたちで炭酸ガス排出量を規制していったら、その結果GNPがこれだけ減ります、っていう試算をつくっていつて発表したわけ。もちろん規制をやめようとは言っていないんだけど、GNPに結びつけて試算して物申すというのは、いかにも日本的に有能っていうか……、GN

## ソマーズ、シールズ/大塩まゆみ訳 女はどこまで見るのか

アメリカの在宅老人ケア 社会的援助体制確立を訴える。2472円 310

## 鎌田久子・宮里和子他 日本人の子産み・子育て

いま・むかし 各地の産育習俗を尋ね現在の産育を問う。2369円 260

江原由美子編

## フェミニズム論争

70年代から90年代へ若い世代による批判的吟味を通して90年代を展望する。2266円 260

ミッヅリー、ヒューズ/五條・中村訳

## 女性の選択 フェミニズムを考える

混迷する女性解放論の多様な論点を再検討、方向を探る。3090円 310

落合恵美子

## 近代家族とフェミニズム

フェミニズムを生きる著者が鋭く迫る近代家族の核心。3090円 310

H.ウェインライト他  
今村仁司他訳

## 断片を超えて

フェミニズムと社会主義 英国女性運動の現状と思想。2987円 310

\* 定価は消費税込みです。



勁草書房

東京都文京区後楽2-23-15  
☎ 814-6861 (編) 東京5-175253

P優位で生産を伸ばすということを目的にしている人たちは、そこを言っているわけですよ。そういうときに社会党の皆さんはどういう答えをするんですか。

鈴木 そんなにGNPを伸ばす必要はないじゃないか、そういう発想ですね、私。社会党としての答えなんて全然出てこないけど、私自身の答えとしたら、その通りだと思います。いま私は建設委員会と法務委員会に入っているんですが、建設委員会というのはまさに男の社会で、いままで女が入ったことがなかった。いっぺんどんなものか見てみたいと思って入ったんだけど、とにかくつくることだけしか考えていない。本当に。道路を通します、街並みをきれいにします、これだけの社会をつくれます、と。他は見えない。沿道の人たちが公害に苦しん

司会 そういうときに、いいじゃないですかGNPが下がっても、という論理だけでは駄目だと思います。いまの自民党政策に

## GNP・土地高騰の 儲けは誰の手に

でいるのを無視して、周りに迷惑かけてい道路ができたってしょうがない、ということをお願いしたいんだけど、そういう発想ってないらしいんですよ。

自動車の進入規制とか生産台数の規制をしないで、道ばかりつくって渋滞解消してもしょうがない。でもそういう人たちは、これをしないと交通がマヒしますよ、という計算をバババツとされるけど、どうしてそうなるのかという違う面からの発想は全然しない。

反対する人はそれだけだからまずいんですよ。GNPが下がるとあなたの年収はこうなって、生活はこの程度になりますよ、というしっかりした計算の裏づけがないと、一般的に説得力がない。

和田 それからGNPを上げて、その儲かったものを誰が取るか、どこに使うか、という問題がある。

司会 いま税制で、資産価格がひらいていから、土地の税金をとる基準を実勢価格に近づけると言ってますでしょ。自分が昔から土地のあるところに住んでいるから言うわけじゃないですけどね、その後のことをみんな考えていない。

つまりね、経済同友会の石原さんが税金を今までの二十倍にしろと言っているんですよ。年間五万円の税金を払っていた人が、



和田副編集長

百万円の税金を払わなきゃならなくなる。そうするとみんな苦しいから売る、と。あの税制に組する人たちは、そういう見込みなんです。でもね、その売ったのを誰が買うか、ってことなの。誰が買って、そこで何をするか。私、企業以外にそんな高い土地を買うところはないと思ってる。それで、高い土地を買ったら何か建てて売るわけですよ。また高くなる。みていると必ずそうなるの。

関西の早川和男先生という方が朝日新聞の論壇で、税の操作で土地をはき出させるようにして、それで問題が解決したためしはないとおっしゃってる。その後のことを

どうして考えないのかと思う。男って、決して利口じゃない。

鈴木 考えないのじゃなくて、儲けさせたのよ。

司会 そうかも知れない。

和田 地価を下げるとか、住宅をどうするとか、具体的なものが出てこないといんな納得できない。いままで政府のやってきたことというのは地価を上げる効果しかなかった。でもそれはね、政府としては上げたのよ。だって儲かるんだもの。税金がとれるから。

司会 みんなすごく大人しいからね、サラリーマンが。

和田 これだけ東京で地価が上がったということは、大阪も上がってきているけど、一つにはいかに儲かっているかってことね、企業が。アメリカの企業が騒ぐというのは、こんな高い地価じゃ儲けられないから。日本の企業はそれでも儲かっている。

司会 土地が本当に必要で買うのでなく、価格がこうなっているから担保になる、それで膨大な借金してお金を回す。

和田 そうなのよ。だから架空の価値なん

だよ。架空の価値をこしらえて、政府も儲け企業も儲け、で、地価が高騰しちゃったのよ。

## 一党政治はよくない!!

和田 土地問題について社会党のハッキリした政策は?

鈴木 具体的にはまだ出てませんね。

和田 つくってもらいたいですね。代案つくらなきゃ駄目ですよ。地価がどうやって下がるかということをはッキリさせなきゃ。いま国民が何を望んでいるか優先順位をつけて重点的にやったほうがいいですよ。

鈴木 幸福なことに今度の選挙でいろいろな考えや経歴の人が入りましたから、女性も男性も含めて、自由な発想ができそうです。ですから、ご期待を無にしないように頑張ります。

和田 だけどヨーロッパなんかの場合、イギリスで労働党が政権をとると、フランスでもそうだけど、ワァーと権利を取っちゃうでしょ。勘定が合っても合わなくても大騒ぎして取って、国民は取れた取れたと喜んで、バカンスもそれですごく増えたわけ





田中編集長

でしょ。その後で困ると保守党が出てくるというやり方ですよ。

アレを真似なきゃ駄目だと思う。日本人で、相手のことばっかり気にすんのよ。まず自分のことを考えたほうがいいのにね。司会 謙遜にね。国がどうなるかとか、企業がぼしゃっちゃったら駄目とか。

和田 ヨーロッパではそう考えないんだね。とにかく自分が欲しいと思ったら、それを法律で取っちゃって、もう後はどうなるうとかまわらないわけですよ。それでどうになるんだから、日本人ももう少しああいいう精神を学ばなきゃいけない。

鈴木 政権交代させてくれると……。交代

して一回やらせてみられると、本当にいいと思うんだけど。そうメチャクチャにはならない、って。

間瀬 それなりにやりますよ、その立場になれば。

鈴木 やってみればできる。

司会 やっぱり交代しないと駄目。

和田 メチャクチャになったらいいのよ。

全員 メチャクチャにはならないって。

和田 けどまあ、二大政党というのは、ヨーロッパでいろんなゴタゴタの末にできたかたちですもんね。

鈴木 これからできてくればいいと思うんです。国民も、もっと利口に立ち回ればいいのよ。オマエちゃんとかやらないんだったら、こっちへ入れちゃうぞ、と。それだったらお互いいい政治ができてくるんじゃないかしら。

和田 いま、自民党を脅かすってことにはみんな興味もってるみたいね。だけど基本的には自民党を支持しているわけよ。脅かす程度なんです。

司会 そうそう。

和田 ちょっと社会党に入れようか、と。こらしめにムチをあててやる、と。

鈴木 もうちょっとムチを当ててくれないとね。

和田 これね、もっと悪くなるとみんな(社会党に)入れますよ。

司会 つまり政権交代が嫌なのよ。政権交代しない最終的によくならない、ってところの認識がないの。

鈴木・和田 ないの、ないの。

司会 こわがってて。

和田 いまのところ、まだこわがっている。司会 わいふは何か社会党に肩入れして

もう嫌だわ、という人がいなきゃいいけど。(笑)

鈴木 それは一つ社会党の任務でもあるわけ、一党ですーといく、というのはよくないですよ。

全員 よくないですよー。

(まとめ・宮前和)

今回の「わいふ討論会」については一四一ページをご覧ください。



## ●薬害のこわさ●

お医者も倒れる

薬禍既巡

(非<sup>ニ</sup>薬価基準<sup>ニ</sup>)

東京都豊島区

田崎ゆき(医師・36歳)

——なんだ? どうしたんだ、これは……? 慌てて水を流し、個室を出る。洗面所の鏡に映る妙に赤黒い顔。空虚な目。頭、地肌がチリチリする。心臓はドコドコ、毎分一五〇近い頻脈。目の前に霞がかかる。朦朧とし

てくる頭を必死に働かせる。

——この急激な異常はなんだ

? Side effect か?……マサ

カ、Drug allergy? そんな

……今までのんで平気だった

のに……でも、それ以外……考

える間も周囲の音が遠くなる。

マズイ。このままではここで倒

れてしまう。ト・イレで倒れるの

は如何にもマズイ。小児科へ戻

るか? イヤ、内科のほうが近

い。スタッフも多い……「もう

ダメ。二十分ぐらい前に⑧をの

んだから、それかも知れない。

早く先生呼んで」

内科へ行くなりそれだけを口

走り、診察台に倒れこむ。しん

どい。苦しい。看護婦が、Dr.が

来る。目の焦点があわな。誰

の顔だか判らない。何か訊かれ

ても、もう口がきけない。頷く

のもやっと。点滴をされる。痛

みも感じない。息が荒い。全身

がチリチリする。四肢末端が痺

れている。緩慢な思考が、ときれとぎれに飛び交う。

——ヤバイ、かな。しんどい

なア……息子のお迎えどうしよ

う……死ぬかな……イヤ、命ま

で持ってかれるほどのなら、も

っと激烈で、とっくに死んでる

……まだ生きているナ……。

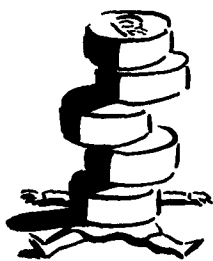
……約二時間の後。周囲の声

が近くに聞こえるようになり、

呼吸も脈拍も落ち着いてきて、

私の薬物禍は一段落した。その

間、内科で息も絶え絶えとは夢



にも思わぬ小児科では、診療途中で行方不明となった私を探しまくりに、全館呼び出しを繰り返していた、そう。

思えば、私はどうも薬と相性が悪い。幼児期、赤チンでかぶ

れ、抗生剤⑥で薬疹が出、中学

のころには別の抗生剤⑦で俗に

言う胃ケイレン。そして前述の

⑧での騒ぎ。その後、今度は咳

止の気管支拡張剤①(本来は喘

息用剤)を診療前に服用したと

ころ、十五分ぐらいで全身が脈

打つほどの心悸昂進をきたし、

一時間余り別室でのびていた。

さらには別の薬⑤で上口唇がブ

クーツと水泡状に腫れ、口裂け

女流行のころ、十日ほどマスク

をかけたこともあった。

以来、私は抗生剤の類をほと

んど使用していない、否、でき

ないのだ。余程の炎症時やイヤ

というときのために、使えるも

のを確かめてはあるが。風邪を

ひいたナ、と思うと己の体にお

伺いをたて、駄目そうとなれば

早目に休んでひたすら眠る。昨

年末、インフルエンザで二十数

年振りに三九度〇四〇度Cが五日間続いたときはほとんど死んでいて、「何でものめる」夫を、さすがに羨ましく思ったが。それでも、特に余病とてなく、人並みに回復してくれた。

だからと言って私は決して薬を敵視したり恐れてはいない。

「薬害」についてはさまざまな研究や運動があるが、ここで議論するつもりはない。だが「薬」全てを否定するのは違うと思う。必要なときはあるのだ。それではか治せぬときもある。それらを全て拒否されたら、医師はどうやって治療したらいいのか。薬を使わずに治るなら、それにこしたことはない。

医師だって本音を言えば、ナニカあったらコワイ、のだ。だからこそ、不必要な薬は極力処方したくないと思う。人間の自然治癒力がある程度信じてもらえる。それでも、必要と思われる

ときには処方する。聞きかじりで無闇に薬を怖がる親には説得もする(強制ではナイ、決して)。

だが、「薬害」の一端には、患者側の知識不足も明らかにある。外来で曰く、乳児に上の子の薬をのませた、近所の人に坐薬を貰った、友達の子と同じ症状なので薬をあげた、熱が下がらないので坐薬をたて続けに使った、三七度Cなので、解熱剤を使った、効かないので倍量のませた……etc. 薬を処方するときには、その種類や使用法を、時にはメモを渡してまで説明して



いるつもりだが、そうした話をきくと、がっかりし、説明が悪かったかと思ひ悩み、やれ幸い何事もなくて良かったと胸をなでおろす(たまに怒っちゃったりもする)。

つまるところ、医師も患者も「知識」が必要なのだと思う。もちろん薬全てを知るのとは不可能だ(膨大すぎる)。おまけに、注意しても薬禍は起きる。けれど遭遇する頻度は確かに減るのだ。医師も学び続ける。だから患者側も正しい知識を持ち、勝手な自己判断や、誤った使用法をしない欲しい。薬は正に両刃の剣、一歩間違えば確かに危険な面もある、のだから。

これが、自ら数々の薬禍にぶちあたり、薬の怖さを身を以て知り、それでもなお薬は必要であると信じる、一人の医師としてのお願いである。

## 不眠薬

埼玉県大宮市

### 中林美代子

私の場合には正確には薬害とは言えないかもしれない。それに私の陥った状況がその薬によるものであるかどうか、今となっては判断する証拠もない。

ことの起こりは私がまだ独身時代、都内で〇しだったころ、風邪で近所の開業医にかかったことに始まる。

その医師の「風邪以外に何か気になることは……」という言葉に親切そうなのを感じた。当時、親元を遠く離れ勤めていた私は慣れぬ都会生活で神経を使い、やや体調が悪かった。医師は「うちでは皆、まず胃の検査をしてもらいます」と言い、その結果について、「胃腸が過敏に反応する。りっぱな病氣だ」

と白い錠剤と胃腸薬らしい色をした粉薬を処方した、薬については「眠くなるかも知れない」との注意を受けた。

さて、その薬を飲み始めて確かに効果があつたようで食欲も出てきて、また下痢に悩まされ



ることもなくなった。

だが、飲むようになって二、三か月たったところからむやみに眠く、休日など、一日中寝ていたこともあった。さらにその時期を過ぎると、突然眠れなくなり始めたのである。二晩ほとんど眠れなかった翌日、その病院へ行き訴えると、医師は「はいはい。よく眠れて害のないお薬

をあげましょうね」と愛想よく言った。

私はうかつというか、その突然の不眠状態がまさか薬に関係があるなどとは少しも思わず、もっぱら仕事が退屈でうんざりしているからだろう、などと考えていた。

結局、私は不眠状態と格闘しつつ働いていたが、それをきっかけに仕事と都会生活に見切りをつけ、故郷に帰ることとなった。

故郷ではすぐ再就職したが、慢性的な不眠状態から本当に抜け出すには少なくとも半年はかかり、大変苦しい毎日だった。

大分後になって何気なく読んでいた本に精神安定剤について触れているところがあり「白い錠剤で長く飲用すると不眠などの副作用があり……」という一節にはっとした。

私には不眠を患うほどの理由

は当時なかった。友人は大勢いて、仕事はつまらなくとも、それなりに楽しい日々をおくっていたのだ。不眠症になったことにより逆にうつ状態にさえ陥った。

が過ぎたがまだ一人で歩けない。今日も二時までに病院へ行くのだが、ひどく頭が痛い。やっこのことで起きた。

最後の診察のとき、今後の生活について尋ねた私に医師はにべもなく言ったものだ。

「お母さんどうしたの、その顔」鏡の中の私は真つ赤なひどい顔をしている。主人は近くの大学病院へ行くように言つて会社に出掛けた。子供達を小学校と幼稚園に送り出して、待ち時間の少ないY診療所に行く。

## パズル

東京都台東区

### 上野 敏子

女医さん貴女は同性の私を、ものの見事にうちやりましたね。土俵ぎわで手を差しのべたのは、酒井先生でした――。

余り待たされずに呼ばれた。カーテンで仕切られた右のほうに入る。私の話を聞きながら女医さんは部厚い本をめくった。

女医さん貴女は同性の私を、ものの見事にうちやりましたね。土俵ぎわで手を差しのべたのは、酒井先生でした――。

「今一錠飲んで下さい。一日四錠六時間ごとに飲んで変わったことがあったらメモして。四日後に私来ますから必ず来て下さ



い。

その日は薬が効いたのか薬に  
なった。

二日目寒いので目が覚める。

体温を計ると、五度六分しかない。  
九時になるのを待って診療  
所に電話を入れる。粉薬をやめ  
錠剤は飲むように、様子を見て  
夕方来て下さいと言っていた。

夜の当番医は男の先生だった。

「大分良くなりましたね。貴女  
は胃潰瘍があるから、今晚の一  
錠飲むのをやめましょう」

カルテを見ながらそう言った。  
ところが三日目頭が割れるよ  
うに痛い。身体全体に紅斑がで  
き膝も痛い。電話をかけずに診  
療所へ飛び込んだ。酒井先生と  
いう三人目のお医者様は四十代  
の男の先生だった。

「副腎皮質ホルモン、プレドニ  
ンですね。この薬は検査をして  
使うものです。無茶ですね。こ  
れでは人体実験です。お子さん

小さいんでしょう。貴女の知ら  
ないところでどんどん悪くなる。

まず薬をきることです。それに  
は入院したほうがいい」そして  
看護婦さんと呼んだ。

「K病院に電話をして今日中に  
入院させて下さい。現在までに  
P八錠服用、胃潰瘍のあとがあ  
ることも、潰瘍が動き出したら  
大変だから」入院したら子供達  
が可哀相、そう思いながらその  
日のうちに入院した。

五人部屋は薬を切るために入  
った人ばかりで、日を重ねるご  
とに薬のこわさを知った。

「七時半になると電話の前に、  
子供達三人で座り込んでいるの  
には参ったね」病院に来た主人  
がボツンと言った。

病院に来た子供達は来た時か  
ら私の手を握って放さなかった。  
夜八時にはお母さんが電話を入  
れるからと約束したので待つて  
いるのだらう。末っ子は電話口

で、

「お母さんいつ帰るの」と涙声  
で言う。

「寝ていてもいいから、早くお  
母さん帰って来るといいなあ」  
と上の二人が言う。

電話の後も涙が出る。同  
室の人に悟られないように屋上  
に上がり涙をふく。

二十日ほど入院して薬が切れ  
た。病院で血液を採って調べた  
結果は、昨年流行した風疹と極  
度の疲労ということであった。

私が退院するのを待つて母も  
退院して来た。  
酒井先生ありがとう。命びろ  
いしました。先生のように信頼  
できるお医者様ばかりになるこ  
とを願っています。

五年を過ぎた今、食事と睡眠  
に気をつけてこんなに元気にな  
りました。（え・松本圭以子）



★わいふバックナンバー

（各号特集テーマ）

198号 長男の嫁

204号 私の受けたカルチュア  
ショック

206号 親子の危機・わが家の  
場合

209号 わがふるさととの現代史

213号 私の夫の労働人生

216号 海外赴任―その光と影

217号 大人が学ぶとき

218号 開花する性―私の場合

221号 私の上司

223号 外国人とつきあってみて

定価二二八号までは四五〇円、  
二一九号より四六〇円。送料

は実費負担でお願いします。

tel〇三―二六〇―四七七一・

四七七三

※わいふ傑作選（定価一六〇  
〇円、送料二六〇円）の注文も  
電話か葉書で直接編集部へ。



## やってみました 代替保母

● 杉村加代子

最近まで経理事務をしていたが、引越して現在無職の身に、ひよんなルートから公立保育園の代替保母の話が舞い込んできた。

保母資格を持っているとはいえ、乳幼児から十年以上、現場からは十五年以上も離れている。体力面で不安はあったが、乳幼児のおいも懐かしく、どんな保母達に出

会えるのかと期待して、昨年十二月に、一

歳〜二歳までの二十名ほどのクラスに入った。代替も含めて六人の保母がいた。二、

三の保育園を知っているが、驚くことはかりで、こんなところもあるのかと、レポートしてみた。

### (その一)

給食は、偏食、食の細い子に少し減らすだけで、決して残させない。叱り、おぼけがくると脅かし、泣いて、そっくり返って、もどしちゃっても、口につつまむ。正に、手段を選ばず、保母三人掛かりで食べさせる。

かつて、私の子供達も食が細く、波が激しく、大いに悩み、松田道雄の育児書の中の「少食・偏食で多少体が小さくても、一歳の生活を楽しく暮らすに困ることはない」の一節に心救われたものだった。中高生になった今、食費を心配するほどの食欲になつた。

つらい食事時間を過ごすこの幼児達の将来の精神面に与える影響を考えると、恐ろしくなる。因みに、給食を問題なくすごしているのは、大食の小太りタイプの子ばかりだった。

りだった。

### (その二)

子供から目が離せないのに昼食も一緒。保母の昼休みがない分、一緒に昼寝してしまふ。昼寝に入ったら交替で休憩してもよいと思うのだが……。気分転換もなく、肉体の疲れはとれても、気疲れだけが残った。

### (その三)

若い代替保母が、気楽というか、非常識というか。お菓子や、お皿を投げる。大にエサをやるんじゃない。これには参った。今、妊娠中で、「子供は抱きません。走りません」というのだが、母性保護も大切だが、保育者としての最低必要限の努力姿勢があつて良いのではないか。

公立の保育園は父母から歳暮が毎日のように届く。それらが子供と同じ食卓に保母の分だけ並ぶ。

### 「いい時期にきましたネ」

冗談かと思つたが、なんの屈託もない。和菓子、洋菓子、果実。子供にはついていないそれら目を引く色どりのものを、悪く言えば、見せびらかして食べる。マヒしてしまった神経には、父母から歳暮の届くお

かしさも、幼い心にどう映るのかの思いもなくなるのだろうか。

ある日、一歳六か月の幼児が、我慢できずにイチゴをひとつ食べてしまった。

「それはドロボウだ!!」

このイチゴは、センセイの!!」

思いきり罵倒し、叱りとばし……。子供の前ではとても食べられずに、冷蔵庫にしまってきた私を心配してくれたが、そうも言えずに、「持って帰って子供の弁当に入れます」と、小声で言うと、

「賢いノ主婦ノ」

この若い代替保母は、独特のアクセントをつけて明るく言ったものだ。この場面を、イチゴを食べちゃった子の親が知ったら、どんな思いがするのだろうか。私の子供が給食の皿を投げてよこされたら、つり返したいし、イチゴを食べて叱られたら、

「子供の前で食べるべきでない」

と、抗議したい。幼児にだって人権もあれば、礼儀も必要だと思う。私は、このときはっきり言うべきだったかもしれない。しかし、話し合える時間的ゆとりがまったくない。

代替保母の仕事内容は、子供との接触よ

り、掃除、洗濯、食事の準備、後片付け、トイレ掃除、戸締り点検。正職員の保母を支える仕事为主で、保母間での持ち回りはない。子供達と遊ぶ間すらない。

人柄の良い保母も中にはいたが、私の働いていた間、保母同士の個人的会話は一度もできなかった。指導的な良い保母がひとりでもいると、ガラリと違うのだろうか、三年から五年で転勤という市の方針からか、保母が育たない。

その上、園長は保母経験もなく、役所の事務職が異動でくるというのでは、保育内容の指導者にはなり得ない。交替勤務とはいえ、淋しい職場環境だった。こんな園生活を、まだ言葉のない幼児が、朝七時半から夕方六時までの長い時間を暮らしている。不安でいっぱいだった。

こういう感じ方は、あまりにも母親的な狭さからくるものなのだろうか。あるいは、私個人の偏見なのだろうか。

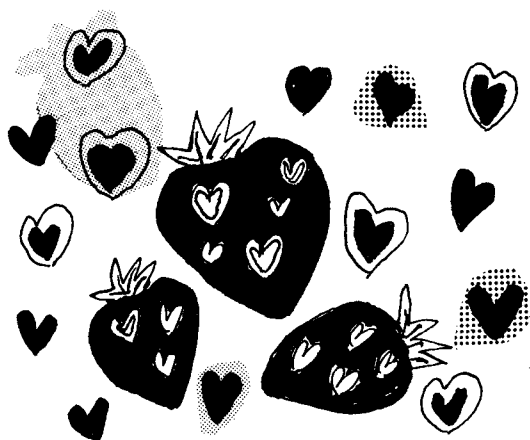
子供を持ち、働き続けている若い父親・母親達へ、心からの声援とともに、ぜひこ

れだけは聞いて欲しい。

与えられている権利として、保育園を利用するのは良いし、力強い味方でもある。

だが、与えられているのは、社会資産としての保育園の器であり、内容ではない。「公立の保育園なら安心」とは言えない。

行政に期待すべき保育環境と人材の量と質の問題は別にあるが、またの機会に譲るとして、より良い保育内容は、親と保育者



とがともに作りあげてゆくものだと思うし、保母を育てるのは親かもしれないと思えるのだ。

顔見世の父母会でなく、手も出し、口も出せる父母会でなければ、長時間保育の子供達の処遇を良くすることはできないだろう。共働きは忙しい。といってそれが全ての免罪符にはならない。

公務員、自営業が半数以上をしめる父母会でありながら、おもいつきに父親の参加がなかったのも貧しさを感じた。まず手を出して、園の生活を知り、参加してゆくことで、保育現場を豊かなものへと改善してゆけるのではないだろうか。

すでに嫌気がさしていたころ実家で事故があり、それを理由に、三月までの契約を三週間で強引に辞めてしまった。こんな辞め方を友人にも非難され、今では反省もしているが、三か月だけの、時給六百七十円の代替保母に何ができただろう。

扶養の範囲内というパートの働き方は、雇い主にとっても、主婦にとっても、都合の良いものかもしれないが、口も出せずに、

方針も出せない代替保母のような働き方はもうしたくない。

やはり、仕事に対しては、責任も愛着も欲しいし、経済力も是非欲しい。再度の脱主婦を目指さなければ等々。いろいろと感じた長い長い三週間だった。

この保育園が特別な特殊な例であることを、切に祈っています。

## 霧のシーズン

香川県小豆郡●広瀬サカエ

瀬戸内海は霧の多発海域である。晩春から初夏にかけてよく発生する。

今年は春さなかの四月一日、はやくも濃霧の播磨灘で、フェリーが漁船を突っ切り沈没させている。数年前、同じ海域でフェリーに衝突された漁船は船体もろとも漁船員も真っ二つになったそうである。

私のうちは小さな海運業者なので、私も船に乗り組んでいる。毎年霧のシーズンに

なると気苦労が多い。

その昔、今は亡き裕次郎の歌を聞いた夫は、

「ナニ、『夜霧よ今夜もあがりとう』だと馬鹿言うな!」

と憤慨したものである。

海霧は、はじめうっすらとかかり、徐々にその密度を増して濃霧に至る場合と、部分的な海域に突如、湧きあがるように発生するゲリラ霧とがある。恐ろしいのはゲリラのほうで、航行中に突然おそわれると逃げようがない。私もこのゲリラ霧にあって肝を冷やした経験がある。

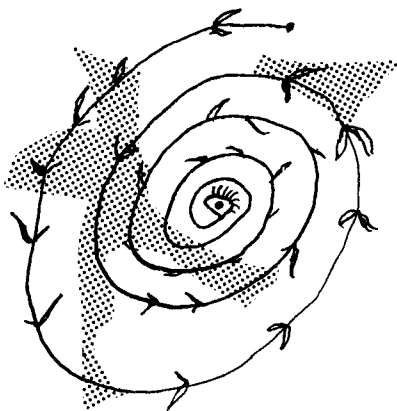
五年前の六月のことであった。

朝の始業時までに大阪南部にある港に着けるべく東進して、明石海峡にさしかかったとき、ゲリラ霧に巻き込まれた。

夜明け前のことで、九州、中、四国あたりから阪神方面に向かうフェリー、貨物船などが幅四キロ足らずのこの海峡に殺到する。船舶の航行量、日本一の明石海峡のラッシュアワーである。

晴天時でも万全の注意を払って本州側から大阪湾へと斜めに渡って行かなければい





けないところで、船同士の衝突事故が頻発する海域である。最悪の場所と時間に濃霧に見舞われたのだ。霧がかかるとどの船も船首に見張りが立つ。

霧のために視界が悪いときは、海上のものが何でも非常に大きく見える。三十センチ四方ぐらいの板きりは漁船に、漁船は何百トンもある船のように。したがって、向こうから近づいてくる船はとてつもなく大きく感じて不安になる。さらに視界が悪くなって、何も見えなくなると、エンジンの音と汽笛を聞いて他船の動向を推察するしかない。船と船が接近しすぎると自船の陰になって、相手の船がレーダーに写らないからである。

ところがまわりに船がたくさんいると、どの方向からもエンジンの音や汽笛が聞こえてきて、どちらに回避したらよいのか分からなくなる。船はストップしていると、潮流によってあらぬ方向に流される。

私が船首に立っていると、右の至近距離で「グワッグワッグワッ」とエンジンの音がした。と思うと、頭上がボーッと明るくなった。ふり仰ぐと、はるか上のほうにマスト灯が見える。

「ゴースタン（後進）」と叫びながら私は、ブリッジに向かって走った。

夫もマスト灯が見えたらしく、すぐ後進した。相手船も気付いて、梶を右に切って前を通り抜けたようである。

「危ないところだった」

船影は見えなかったが、エンジンの音とマスト灯の高さから、すごく大きな船のようであった。「ドシン」とやられていたらと思うと恐ろしくて、もう見張りなどしたくはなかった。けれども霧が晴れてくれないので再び船首に立って、しばらくすると紙をはがすように霧がサッとあがってまわりにうようよいした船がいつせいに動き出した。

「ヤレヤレ」という思いでブリッジの横まで戻ってくると、両膝の力が抜けてその場に座り込み、急に恐怖がよみがえってきて立てなくなってしまう。腰を抜かすというのはああいう状態を言うのだろうか。ともあれ霧のシーズンは海に生きる者にとっては魔の季節である。

## 人間観察と 柔軟体操

大阪市東淀川区●小林千歳（40歳）

私の職場は、このところ巷にどんどん増えてきているコンビニエンス・ストアである。仲間のほとんどが学生アルバイトで、平均年齢二十一、二歳という若さだ。ロッカーームには、サイクリング用の自転車からサッカーボール、テニスラケット、バイク用ヘルメットなどがところせましと置いてある。まるで学校の部室なみだ。

店には常時三十数人のアルバイトが登録しており、三交替制でそれぞれの都合に合わせて週三、四日のシフトを組んでいる。

昼勤は二部の学生。夕方から専門学校生や女子大生。夜間は体格のよい体育系の学生で、男女比率は三対一くらいで女性が少ない。既婚者はオーナーと私だけだ。某公立高校の体育教師をやめて家業を継いだというオーナーは、私より十歳下の三十歳だ。オーナーが元教師ということもあって、職場の雰囲気は学園ほい。ペナルティノートがあつて、遅刻するとトイレ掃除。発注ミスなどの売り上げにひびくような失敗は、長期のガラス磨きやフライヤー洗いなどいろいろ罰則がある。

ふつう月、水、金の朝八時から夕方四時までが私のシフトだ。でも、仲間が皆学生なのでテストシーズンになると私の出番はぐんと増える。これでも守備範囲は広くて、けっこう頼りにされている。時給七百三十円で、月平均百時間くらいの労働時間だ。昼の仕事は品物の発注、補充と在庫管理が主で客は少ない。通りをはさんで公設市場があるので、割高なコンビニエンス・ストアにはよくよくでないとならないのだ。その市場が閉まる夕方から深夜にかけてが、一番のかき入れ時になる。利用客は学生、



単身サラリーマン、OLが多く、主婦はあまり来ない。

売れ筋ベスト五是、雑誌(文庫も新刊を揃えてはいるが、売れない)、レトルト食品を含む弁当とラーメン類、ジュース類、スナック菓子、そして男性化粧品だ。男性化粧品の中では特にコロン、ヘアムース、洗顔クリームがよく売れる。そして、万引きナンバーワンも男性化粧品だ。形が小さくてスッポリ手の中やポケットに納まるのと、需要が多いということだろう。

次々と運ばれてくる商品をさばき、きつちり品揃えて帰り、翌朝品切れをチェックする。そこから推測してみると――。

インスタントで軽く食事を済ませ、雑誌やビデオを見ながらポテトチップスをかじり、コーラを飲む、遊び好きでおしゃれにマメな若者、というのがコンビニエンス・ストアに多い客だと感じている。

ここでの人間観察は、なかなか面白い。朝一番に来る中年サラリーマンは、スポーツ紙を買ってコーヒーを飲む。そのあと決まって試供品のオーデコロンをむせかえるほどつけてから出勤していく。しばらく黙認していたが、きりがないので試供品をレジカウンターに移したら、ましになった。毎週月曜日の昼ごろやってくる浪人風学生。ハンバーガーと牛乳を飲みながら、小一時間かけて「少年ジャンプ」を読みつくして帰る。

朝起きたての顔で頭にカーラーを巻きつけたままのお母さんが、かけ込んでくる。幼稚園児が後から追っかけてくる。お母さんは幕ノ内弁当を買ひ、その場で家から持ってきた空の弁当箱に移し替えて子供のカバンに入れるのだ。あたりに飛んだごはん粒も容器もそのままにして、釣銭だけはしっかり持って飛び出してゆく。



## 介護費用保険



「風に吹かれるように生きてみたい」と。  
「かちつとした生活の中で時にふと思います。」

「介護費用保険」に加入すれば  
もつ私の心は自由です。

保険料「例」40歳女性月々  
5890円「ねたきり・痴呆ともにケア」



火災・自動車・海外旅行  
など  
損害保険のことは

わいふ指定代理店

東京海上火災保険株式会社  
杉本保険事務所 杉本侑子  
☎03-260-4771

もう一人弁当箱持参の人がいる。こちらは保温式のランチボックスだ。いつも白いかっぱを着つけた五十代後半と思われる女性は、どうやら病院の付き添い婦さんらしい。ごはんとおそうざいのパック詰めを数種類、それにインスタント味噌汁がスプーン類を買う。それらを電子レンジで温めたり、ポットのお湯で溶かしてからランチボックスに移し替えていく。まっ白いかっぱを着の両肩にかけたランチジャーと、ブランド物のショルダーバッグが彼女の職業を物語っているように見える。

ちよっと変わった八十五歳のおじさんが、時々線香かローソクを買いにやってくる。この老人は、買い物というよりしゃべりにくるのだ。「わては郵便局に三十五年勤めて……」から始まり「今は、ただただお迎えを待つ」というくどいまで、どんなに店がたて込んでようと、おかまいなしにしゃべって帰る。オーナーは「さしつかえない程度に、ボランティア精神で聞いてやって下さい」と言う。

客ばかりでなく、アルバイト仲間もそれぞれ個性的でユニークだ。

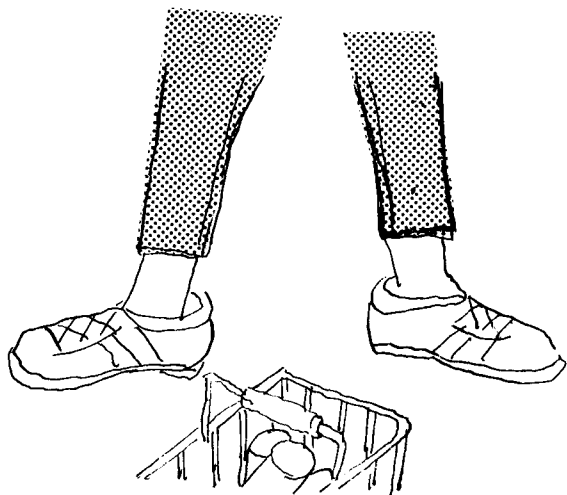
バイト学生の八割が地方出身者だ。女の子はほとんどが短大生で、バイト代は化粧品代と洋服代だと言っている。

徳島出身のF君は虚弱体質のくせにヘビースモーカーで、よくぜん息だといって休む。それも突発的なので代わりを探すのに困る。この改善策としてオーナーは、F君に禁煙したら時給三十円アップという案を

出した。誰も文句を言わなかったが、F君の禁煙は二か月しか続かなかった。相変わらず向かいの薬局のお得意さんである。

O工大二部学生のS君はバイク狂で、念願のナナハンを手に入れて月四万円のローンを払っている。休憩時間はいつもバイクをなでまわしている。バイトとバイクに乗るのが忙しくて二年目の留年だ。

M大演劇部のY君は店一番のシテイボーイだ。バイト代が入るとすぐ洋服を買う。女の子のバイト仲間でも彼と組みたがる人が多いので、オーナーはシフト作成に気を配っている。春休みに北海道旅行をした彼は、私にキタキツネのかわいいキーホルダーを土産にくれた。このやさしさがもてる原因なのだろう。



昨夏、彼の企画で会費制の「ねるとんパ  
ーティ」を開いた。メンバーはバイト仲間  
と、その友人、知人だが女性の数が足りな  
かった。頭数さえ揃えばいいと考えた彼は、  
私に声をかけた。「ちょっと派手めな服を着  
て隅っこに座ってくれるだけでいいんです。  
照明をおとすくらい配慮はしますから、  
よろしく」と言ったのだ。あいにく用事で  
行けなかったが、今回は出席して照明はお  
とさずに、若者たちの実態を観察してこよ

うと思っている。

全般に名門校の学生はいないが、ひとり  
〇大の秀才がいる。これがまたユニークで、  
目下「注目の人」なのだ。面接の時に「ボ  
ク、学校と家以外に自分の居場所を作りた  
いんです。週に一回でも月に一回でもいい  
からアルバイトさせて下さい」と言ったそ  
うだ。交通費は支給されないのに、ずいぶ  
ん遠くから通ってきている。

私もたまに彼と組む。ブリーフの検品な  
どしながら彼に「BVDの意味知ってる？」  
と聞く。「いいえ、おしえて下さい」とくる。  
そこで私「Bはビーツとやっても、V・ブ  
リツとやっても、D・ダイジョーブ」と答  
える。ところが彼は笑うどころか「ハァ、  
えらい凝ってるんですね」と感心するだ  
け。全てが万事この調子だ。私はジャンジ  
ャンくだらないことを吹きこんでやろうと  
はり切ってしまう。彼と組んだ日は特別よ  
く笑うので、寝る前のバックは欠かさない。

ここで働き始めて三年が過ぎた。とにか  
く人間観察をするには絶好の職場だ。和文  
タイピストや一般事務をしていたころには  
見えなかったことばかりで、毎日が興味深

い。新人類にまみれてジーンズとスニーカー  
で走り回っていると、頭も体もほど良い  
柔軟性が保てる。それに鏡を見ないかぎり  
は、二十一歳になりきれれる場というのも貴  
重だ。

この間、満四十歳の誕生日を迎えた私に、  
彼らはいろいろなプレゼントをくれた。ス  
ルメ、ドライフラワー、ホカホカカイロ、  
ルーペと多彩だった。オーナーは規定の休  
憩時間プラス十五分の休憩を、この先ずっ  
とくると言った。この職場ならではのプ  
レゼントだ。なかなかいい気分であれしか  
った。

フルタイムで働くキャリアウーマンも羨  
ましいが、自分にはキャリアもなければバ  
ワーもまいち。かといって、労働力と賃  
金の交換だけという不本意なパートもいや  
だ。老いていく親に費やす時間は確実に増  
えてきている。だが、自分の活動資金は稼  
ぎたい。こんな私に、この職場はちょうど  
良い。もうしばらく、ここで柔軟体操をし  
ながらマンウオッチングを続けることにし  
て四年目に入る。

(え・田沼千恵)

# 読・ん・で・み・ま・し・た

## 続健康のしつけ(農文協健康双書)

決めつけない・押しつけけない・気づかせてあげる

藤森 弘著

東京都八王子市 和田 好子

著者は衛生学を専攻した医学博士である。大学で講師を務めるとともに、診療所の所長であり小学校や保育園の校医も引き受け、臨床家としてつねに現場に触れている人だ。

その専門と経験から「健康のしつけ」という新しいしつけ観が生まれたのだらう。従来しつけというと、社会的なルールやマナー……お行儀……を身につけさせること、であったが、著者はそのほかに健康に生きるための、生活のしかたのしつけを提唱しているのである。

所長をしている大阪の柏花診療所は、もともと「生活と健康を守る会」の会員の手作で作られた。診療と併行して公衆衛生活動を行ない、健康相談、訪問看護な

ど地域住民の健康を守ってきた。その所長として著者は、予防、保健、治療の三位一体をめざしている。

考えてみれば病気になってから、医者に薬よというのは手遅れというべきだろう。病気の大半は長い間の、生活の歪みに起因するのだから。

ことに近ごろは環境が悪い。大気汚染や農業、放射能などいわゆる公害も、その大もととは大量生産と利益効率を追いかける社会の根深い問題だ。考えることなく暮らせば生活は必ず歪んでいく。健康を保つのが難しい時代であるが、わたしたちが家庭内で、子供を守るためどうしつけるかの具体策がていねいに示されている。



今はやりの朝シャン、衛生的でいいことのように見える。しかしそのために朝食がいかげんになり、排便ができず、歯の清掃も手抜きになる例が多いという。朝は時間がないのに、朝シャンなどおしやれに費やされて肝心なことが抜けるのだ。加えてシャンプーやリンスは頭皮と手指を痛める。それを指摘されるとメーカーは、「シャンプーは頭髮だけを洗うもの」「頭皮(地肌)は石けんで洗うのが原則」というそうだ。できるはずのないことで、彼らも害を知っているのだ。「姿勢・体格・身のこなし」「皮膚・爪」「歯・口・食生活」「排泄」「肺・呼吸」「性教育」「生活態度・身だしなみ」など、現代の子供達の抱える健康上のウィークポイントごとに、しつけのしかたを教えてくれる本である。

農山漁村文化協会 一二五〇円

# サーブレス・サーブ

## 「わがアルハンブラの想い出」は…

奈良県生駒郡

高松

恭子

「わが『アルハンブラの想い出』」を、大変懐かしい思いで読みました。

実は私も高校生のころ、今は義兄となった人がギターでこの曲を弾くのを聴き、たちまち魅了されました。あのもの悲しげなメロディーにロマンはふくらむばかり。十年後にスペインのアンダルシア地方を旅したとき、連日四十度近くの猛暑の中で疲れ果て、行くのは諦めようかと思ったグラナダへ私の足を向けさせたのは、あの美しいメロディーでした。

マドリード郊外のアランフェスという町から列車を乗り継ぎ、十時間以上もかかって辿り着いたグラナダ。ところが憧れの町は人・人・人の波。ホテルはどこも満員で、町の片隅のペンションまで「コンプレ」と

断われ、途方に暮れました。仕方なく駅前の路上で、ゴミ箱から拾ったダンボールを敷き、新聞紙をかぶって排気ガスを浴びながら寝るハメになったのです。

翌朝、コンクリートで冷えた体に睡眠不足の目で見えた憧れのアルハンブラ宮殿は、雑踏のような観光客の中で、色あせてぼんやりかすんで見えました。

イサベラとフェルナンドに降伏した回教王ボアブデイルは、涙を浮かべ後ろを何度も振り返りこの宮殿を去ったといま



す。でも私は何の未練もなくこの宮殿をあとにしました。いつもため息とともに思い出す、「わが『アルハンブラの想い出』」です。

浅原さん、どうぞ、シエラネバダ山脈を背に宮殿の中庭におすわりになっているご自身を思い浮かべて、あの美しい調べをこれから弾き続けて下さい。きっと先生にも聞こえるにちがいありません。

## 無駄なこと

大阪府高石市

多田

明子

前号の「無駄の世界」を同感、同感と思いつながら読ませてもらった。「これも無駄なことではないの」と思う記事があった。塾の教育システム「公文式」のレポートだ。こう思う私は二年ほど公文式の採点助手をしていた。公文式すべてを無駄だ、と言うのではない。計算力をつける学習方法とし

てはよく考えられているかと思われている。私が無駄だと思うのは、幼児（二歳や三、四歳）も学習の対象にしていることだ。幼児は塾へ行く必要はない、と思っている。

幼児教材は鉛筆の持ち方、線のひき方、数字の書き方から始まるが、このようなことは、家で遊びのなかで親が教えればよいことではないだろうか。小学校に入学して学習を始め、学校だけでは理解できない、ついていけない、と思ったその時から公文式などの塾を頼ればよい。

幼児対象の塾は「学校へ行ってからではおそすぎる」として、先のことをどんどん教える。入学までにたし算・ひき算、一年生ではかけ算という風に。これでは子供は学校へ何をしに行くのだろう。知る楽しさ、学ぶ喜びを学校では味わえないだろう。かわいそう。学校は遊ぶところ、勉強は塾という風潮がますます強まっていくように思えてしかたがない。

幼児はもっと遊べばいい。服をどろんこにして友達と遊び、そのなかで幼児期にしか体験できないことをしておくべきだと思う。こういう私の考えは、今の技術革新の

めまぐるしい日本では通用しないのだろうか。

## ダニはダニでも… でもダニはダニ

東京都豊島区

田崎

ゆき(36歳)

二二二号ワンポイント情報での、ダニと掃除機について、職業柄(医師)ぜひ一言。今流行のダニとり掃除機は、家ダニ(ツメダニ)駆除というよりは、気管支喘息やアトピー性皮膚炎の原因となるチリダニ(コナヒョウヒダニやヤケヒョウヒダニなど)を、減らすのに有用なものです。喘息などの原因は、生きているダニよりも、むしろその死骸やカケラ、糞などで、これを減らすにはこまめに掃除機をかけるしかありません。

ところが、それらは非常に微細なため(本体〇・二〜一〇ミリ)従来の掃除機では、排気口のフィルターから再び部屋の中に、それも風とともに舞い上がり撒きちらされていました。そこで、一度吸ったそれらを再び外へ出さない工夫(熱処理とか目の細かい集塵袋とか)をしているのが、ダニと

り掃除機というわけです。

バルサンは確かに効果的ですが、それで死ぬのは生きているダニだけ、卵は死にません。それに、前述の理由から、バルサンの後にも掃除機をかける必要があります。

(第一、バルサンは人間にも無害とはいえません) もっとも、ダニとり掃除機も、集塵袋に農薬を使用しているものがあって、閉め切った室内で使うのは良くないとの話もあり、購入の際のチェックは必要ですが。

なお、布団や枕、ぬいぐるみもよく日に干し、たたいてから必ず掃除機をかけて下さい。それらはダニの温床、たたいただけでは中のダニやカケラが振動で表面に浮いてきますので。以上、ダニとり掃除機は、使用目的からいけば無駄ではなく、むしろ喘息やアトピー性皮膚炎の家庭には積極的に勧めています(ちなみに私は小児科医で、家電業界とは無縁です)。家ダニについてはあいに専門外なので、詳しくは判りませんが、大量発生の場合にはやはり専門の防虫駆除業者に依頼されたほうが無難かと思えます。もちろん、その後に必ずこまめに掃除機の使用を忘れずに。(え・堀切潤子)



## この実力でよくやれた

東京都江東区 岩下 佳代

在宅で仕事を始めた。

自分でも「よくやれた」と内心褒めている。前々から始めていたワープロだったが、いま一つものにならず焦っていたところへ、江東区の内職サービスセンターでワープロ教室を無料で開始することを知った。初級・中級を、月曜・金曜十時～三時まで十日間の日程で四十時間である。ダメでもともとと応募したら当選した。

次女の幼稚園の送迎もあり、かなり迷った。が、無料であることから応募者はかなりの数だと考えられ、次に当たる可能性は薄い(後で聞いたら百二十倍だったそうだ)。

主人に相談すると、「行ってみれば」と言う。友人も応援すると励ましてくれるので一大決心して手続きを済ます。

それからの十日間の忙しさは並みではなかった。長く専業主婦をしていると、いつの間にか家を留守にすることに対して内外ともに拒否反応が強いし、時期も悪く(二月十四日～二十七日)、学校・幼稚園関係の用が多く、ワープロ教室を優先させることにはかなりの犠牲を要した。

朝九時に次女を幼稚園に送りそのまま教室へ行く(授業は十時～三時なのだが、そ

の前後一時間を練習時間として自由に使えるため、早く行く)。十二時から昼休みとなるが、昼食もそこに次女を迎えに行く(一時のお迎えのところが先生に事情を話し十二時半で早退)。自宅へ連れ帰り次女との約束というか取り引きというか、ビデオをセットしてまた教室へ戻る(次女のほうは一時間内に主人が勤めの関係で帰ってくるのでそれほど心配はない)。

結局、学校・幼稚園に用のある日などは一日に家と教室を三往復することとなる。しかも、ずっと天気が悪く自転車が使えなかったのは誤算だった。だから次女のお弁当がない日に友人が預かってくれるのは、とても助かった。そして無事十日間終わつたときは充実感が満たされていた。

なのに人間というのは欲張りなもので、しばらくすると折角勉強したのに使い道がなくてがっかりしてしまう。といってすぐ



仕事へ結び付けるほど自信もなく、中途半端で少々持て余し気味であった。そこへ友人の友人が電話をくれた。

「新聞広告」で在宅でワープロの仕事を募集していたから、電話するだけならタダだから電話したら」と助言してくれる。

折角電話をくれた気持ちがいれしくて数件電話する。が、その結果は、

「経験は？」の問いに詰まってしまい「経験がないんですね。では結構です」と断わられてしまう。すっかり落ち込んでしまっているところへ例の彼女がまたまた電話をくれた。

「どうした？ 電話してみた？」経験の話をすると、

「誰だって最初は経験がないんだからそんなことで落ち込んでいたら、いつまで経っても経験はできないし、仕事も見つけられないわよ。適当に経験があると言って仕事を掴まえるのが先よ」

「だけど、仕事をもらってもできなかったら困るもの」

「そのときは私が教えてあげるわよ」そうか！ バックがそう言うってくれるのなら、

とすっかりその気になってまた別口で電話をする。

「オアシスを得意としていてミニコミ誌の原稿打ちなどいろいろやっています」(ミニコミ誌の話は本当)すると、

「じゃあ、今仕事がたくさん入っていますのでこちらから連絡します」と言うではないか。それでも半分はあてにしていなかったのに、「四十ページほどの仕事で一週間

でお願いしたいのですが」と次の日に早速電話があったのですっかり舞い上がってしまった。履歴書を持参してすぐ会社へ行くが、テストなし、履歴書も見ず、すぐ原稿を渡されてビックリ！ しかしその原稿がどう見ても今の私には無理。

「すみません。私、作表には自信がありません」

「そうですか、では、もう少し待っていたければ次の原稿が入りますから、それを見て下さい」待つこと二十分。

しかし、次の原稿にだって作表があるし、苦手の英語もたくさん入っている。でも、ここで断わったら仕事はもう貰えないだろうし、第一どこへ行っても通用しないだろ

## 自費出版は

わいふ、へどうぞ！

「わいふ」編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用下さい。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実に安いのです。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせ下さい。

イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

人生の記念にご計画なさってはいかがでしょうか。





う。バックもいるから何とかなるだろうと引き受けてきた（ここが私の無謀なところかも知れない）。

それからの一週間は悪夢！

「どうしてこんな仕事引き受けたりしたんだろう。実力もないのにあーあどうしようとしてとうとう私にはどうにもならない箇所にて、早速例の彼女に電話すること

となってしまった。忙しい彼女の時間を貰ってワープロ持参で行く。

「これのどかが分らないのかが、分らない」などと、聞きようによっては馬鹿にされているとも取れる発言。しかし、今の私には全く気にならないどころか、

「バックにとってはこの仕事は簡単なんだ」と妙に安心していた。

徹夜に徹夜を重ねてやっと期限の日にはフロッピーと原稿を会社にビクビクしつつ持っていく。念入りに調べるのかと思つたら、フロッピーをコピーしてすぐ返してくれ、

「また、連絡します」そして、事実二、三日後にまた仕事を依頼された。今、三日目の仕事をしている（初めは原稿を自分で直接もらいに行つたが、今は宅急便で送ってもらい、出来たときに会社にフロッピーを届けに行く。先々はモデムを入れようと思っている）。

自分の実力を素直に伝え、三人の子持ちでまだ小さいことなどから、期限のゆっくりにしたものを回してもらいたいと初めにお願いしたこともあり、急ぎの仕事はこない。

金額は実力によると言われ、十五日締め翌月払いで小切手で郵送してくれるとのことだが、まだ貰っていないから幾らになるか自分でも不安だ。それでも、何もしないでイライラしていた日のことを思えば充実している。

一番下の子供が今年の春から小学一年となり、朝八時を過ぎると家の中に一人となってしまう。結婚以来一人になったことが全くなかったので自由になった喜びよりも寂しさのほうが強く、自分でも持て余すところを仕事で救われている。

だが実力が伴わないから、例の彼女にたびたびお世話になっている。

友人から聞くところによると、「あの実力でよくやったわ」と彼女が褒めていると言う。

それだって聞きようによっては褒め言葉とは取れないが、素直に聞くことにしている。彼女なくしては、今の仕事はないし、学ぶことの多さに本当に感謝している。

いかに自分が棚からぼた餅式で、いい話が転がり込んで来るのを待っていたかを思うと、恥ずかしい。ありがとう！

# 「フリーライターいりませんか」

神奈川県横浜市 馬場 直子

私がフリーライターになりたいと思ったのは、市の外郭団体の広報誌編集に携わってからだ。ポランティアではあるけれども今まで見る側だった印刷物の制作の側にまわってみて、そのおもしろさにとりつかれたのだ。「わいふ」を知ったのもこのころ。

フリーライターなら時間の融通がきくだろう。しかもチャンスさえあれば、私のような一介の主婦からなることもできるらしい。などと甘い考えを抱いて私はいいた準備もないまま、大胆にも求職活動を始めてしまった。

まずは地元のタウン誌。意外にもこれがあっさり採用された。ところが仕事のほう一本。まったくこない月もある。これではあまりになさけない。

そこで今度は、新聞の求人広告を見てか

たっぱしからアタック。その中で実際面接に行った数社で、いつもこう言われた。「分りました。あなたにあった仕事のときに連絡いたします」それを採用と勘違いして大喜びで帰ってくる。でも一向に仕事はない。

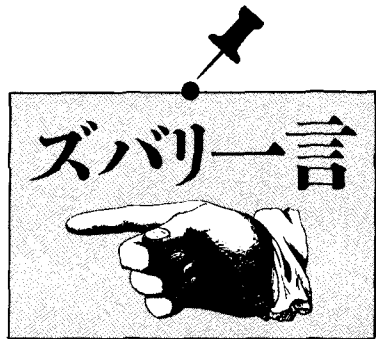
ひどいところもいくつかあった。会社の事業内容もはつきりせず、取材記者のはずが校正の仕事がきて、苦勞して仕上げたものの、報酬の支払いもなかったところ。仕事の内容まで具体的に決まって、打ち合わせに行ってみると、あとからもっといい人が見つかったからと断わられたところ。交通費も出ない。

要するにフリーライターなんていうのは、掃いて捨てるほどいるのだ。しかも契約形態もあいまい。ライターのほうも自分の都合のいい仕事が欲しいのと同じに、企業側

も都合のいいように利用している。その中で生き残るためには少しずつ実績を積んで、自分にしかない強みを持ち、それをいかにアピールしていくかだろう。私の求職活動はまだまだ続く。



(え・堀切潤子)



## 許せない 国旗の軽視

神奈川県厚木市●前田道子(57歳)

今朝の新聞の、

「日の丸 君が代」入学式」

不信対決の影各地で」

この記事を読んで私はムラムラとおなかの奥から突きあげてくるいきどおりで筆をとる。

日の丸。日本の国旗掲揚を拒

否する教師や父母が存在するとは誠に不思議である。

日本の国内で、国の学校の入学式という公的な場所、日本の象徴である国旗を掲げることには当然で、義務と考えるより日本人が自国を意識する第一位のものであり、教育者として日本の国はと教える時の基礎的なもので、しかも、幼児でも一番に明確に覚えられる国旗である。

あのオリンピックで日の丸の国旗があがり、国歌がかなでられれば誰でも涙を流して感動する国民が、国の祭日でも国旗を余り掲げない。それどころか賛否両論が出るとは何事ぞ！

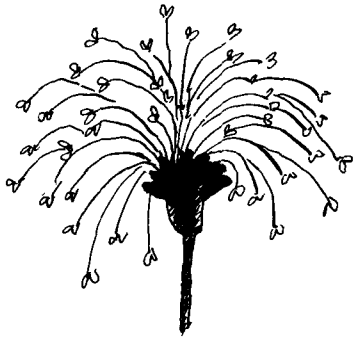
ついで国歌に至っては「君が代」の君が問題になったり、現代にあい入れないという。

日本は皇室国家で、あの戦後でも独立国家として皇室中心として、世界でも認められているのである。大統領の統治国家で

はないのである。長い歴史があつて国歌が生まれたのである。

それが、古いとか新しい世代にはと問題にすること自体おかしいことだ。その世紀、世紀で国旗や国歌が変わるのであつたら、それこそ源平合戦の旗印と同じではないか。

世界のあちこちに出かけたがりの日本人は、もっとも自分の国というものを理解し大切に思い、愛国心を持ってその



上で世界にのり出して行くべきである。

日本の国の未来を築くべき学童に、指導者がこのような論戦をしているとはなげかわしいことである。

知つてますか、この小学唱歌を、白地にあかく、日の丸をめてああ美しや 日本のは

## モノ追放を 思い立つ

三重県名張市●西村和子

このごろつくづく思う、どうして家の中にこうもモノが、あふれかえっているのだろうか。

さして広くもない我が家に、どんなモノが押しよせてくるのが原因らしい。

香典のお返し、結婚式の引き出物、出産祝いや、病氣見舞いのお返し、はたまたゴルフの景

品など。それと中元、お歳暮など次から次へとやってくる。ガラス食器、陶器、なべ類、お盆など、押し入れにも、物置にも入り切れなくなってしまうらしい。

さりとて今使っているものを処分して、新しいモノを使う気にもなれなくて、我が家の人間サマは、せまいせまいを連発しながら暮らしている。

買い物好きの私も大いに反省、もうモノは買わないぞと一大決心したのに、フトン乾燥機を買ってしまった。これは冬使ったからいいでしょう。しかしながら他人様は我が家の事情をご存じないから、やっぱり見栄えがして、いつまでも残るモノがやってくる。

もうこの辺で何でもお返しするという悪習慣は何とかならないものだろうか。せめて石けんとかお茶とか消耗する品を選ぶ

心遣いをしてよい時期と思う。数日前届いた香典のお返し、テレフォンカード数枚は、いつ使い切るか分からないけれど、何より場所をとらないのがいい。

## チェルノブイリを 思い出して 下さい

茨城県稲敷郡●中村道子(37歳)



その本「チェルノブイリの少年たち」を一気に読み終え、最後のページに手をかけたまま、私の体はまるで硬直したように感じられた。首筋から肩に力が

入りこわばっている。胸が高鳴り、ハアハアと、まるで動物のそのように口から息が漏れた。ゴクリーと生唾を飲み込み、私はやっと本を閉じた。

それでも瞳はまだテーブルの上の、今閉じたばかりの本を凝視していたし、頭の中は、この大きな衝撃にどう対処していいか解らず、未だに空白だった。

あの四年前のチェルノブイリの原発事故は、現実のものであったが、その事故の深刻な現実とその後の正確な状況を、私達是一体どのくらい公の機関を通して知らされたのだろうか。

識ろうとした人々は識り得たのかも知れないが、私の得たものは、どこかの火災現場さながらに、ボンヤリと写された焼け

落ちた原子炉の写真や、もはや一般人の姿はなく、汚染された土を掘り起こしているブルドーザーの映像だった。ヨーロッパ

の国々では土中あるいは食料から、日本でも幾つかの輸入食品から、基準以上の放射能が検出され、輸入禁止になったという短いニュース。

それはあくまで、この私からはちょっと離れた場所のニュースのようであった。それからしばらくは、雨が降ると「放射能が含まれているかもよ」などと言いつつ、そこには切実な危機感はなく、現に、私達はまだ健康で暮らしていたから、何も識らなかつたから――。

なのに、今の私は恐ろしさと危機感で胸を締めつけられている。余りの恐ろしさに「これは本当？ 私をパニックに陥れないで」と著者・広瀬さんに叫んでいる。

ふと私は耳をそば立て、隣室の主人や子供達の気配を窺う。ここは日本で私は暖かな炬燵に足を投げ出し、三人の男の子達



はスヤスヤとそれぞれの眠りの中にいるけれど、私や主人がいつターニヤになりアンドレイになり、子供達がイワンやイネッサにならないとも限らないのだ。

セーロフ一家はチュルノブイリに一番近いブリビアーチに住む。ここは言わば原発で働く人々の町である。夫、アンドレイも原発の技術者として、事故の

恐ろしさを識りながら「命令」を受けて事故処理のために（実際そんなことは何の役にも立たない。実質的な口封じなのだ）、命を捨てに爆発直後の炉の中に入っていく。男達の大半はそうして死んでいき、女、子供達は原子炉の爆発の意味を理解できないまま何台ものバスに強制的に乗せられ、何処へゆくとも知らず出発する。

が、早くもバスの中でその意味が解ってくる。吐き気、めまい、倦怠感、脱毛症状。イワンは目がみえなくなりイネッサは全身的な不調から衰弱してゆく。やがて通り過ぎる町々で鳥の死骸や、川の水を飲み死んだと思われる夥しい羊の姿を目のあたりにして驚愕する。

が、もはや幼子から死に至り始めた彼女らの行くところは、ただ最期の場所を提供してくれるだけに過ぎない、病院の隔離

病棟である。医師達が死に至るデータをれば、憲兵が何処へともなく遺体を運び去るだけであつた。

このチュルノブイリのニュースが流れたとき、日本の原発関係者の発したコメントは「日本では絶対に起こり得ない事故です。不幸なミスが重なってしまったものです。日本の原発は安全です」というものだったと記憶する。ところで、私はこの「絶対」という言葉が嫌いであり、信用できない。「絶対に安全です」とは「絶対に安全ではありません」ということの裏返しだと思っている。

形あるものはいつかどこかで形を崩す。

「人間より確かなコンピューター」などと言われるが、何が「人間より」なものか、さっぱり解らない。たかが人間の造った人間が操る機械ではないか。その

人間たるもの、このごろ何と不可解な行動の多いことか。原発の安全性について、などというまことしやかな政府広報を私はフンと斜めに読み過ぐす。

甘蔗珠恵子さんの、まだ間に合うのなら、や同じく広瀬さんの、危険な話、などを読んだ時より遥かに強い衝撃が、私を掴んで離さない。本当にその後ブリビアーチの人々はどんな生活をしているのだろうか。時折、思い出したようにニュースのタイトルに表われる続報では、放射能汚染による直接の死者数は、相変わらず信じられないような低い数字である。



最近では身体の不調を訴える関係者に、「事故によりダメージを受けたというストレスから病状がより増幅されている」として、催眠療法が用いられているとか。我が国でも原爆被災者に「病は気から」と言っているし、ゆくを買った総理がいたが、同じようなものだ。

あのような信じられないニュースは、ソ連という国の事情によるものだから——とはあなたが言えないだろう。この国も信じられないようなことが頻発する昨今だ。

忘却——ということも生きて

ゆくゆくえの人間の知恵だ。だからこそ、忘れてならぬことには外的刺激を与え続ける必要がある。

まるでファッションのように、人々は新たな事件に飛びつき、飾り立て、騒ぎ立て、そして忘れ去ってゆく。

反原発運動も下火となり、先の選挙ではもはや政策の表舞台には出されなかった。が、本当は甘蔗さんの言うように、このことが最も重い問題ではなかったろうか。

リクルートが消費税にすり替わり、消費税が体制論争にすり

替わったように、政府は次々に身代わりを立てて私達の目を欺こうとしているかのようだ。

日本の原発全てを止めても電力は大丈夫、というデータもある。ひところの省エネ、節電、これも声高には言われなくなった。電化製品はやたら付加機能が増え、大型化し、どんどん使って

快適な電化生活を——と電力会社はP・Rに余念がない。

が、このささやかな生活と子

供達の未来を守るためなら、一家五人、一部屋で明かりをとり、

小さな炬燵に暖まり、熱い飲みものでも啜ろう。ドアを開け、

風を入れ、ウチワで汗をおさえよう。ついこの間まで私達はそうして過ごしたはずだ。幸い、外に仕事を持たない私には時間がある。機械に頼らずに頭や身体を使えば、生活することの楽しみや発見も得られるかも知れない。

この日本で、セーロフ一家の悲劇を繰り返さないために。チュルノブイリを思い出し、下さい。

(出版社は「太郎次郎社」です。編集部)

(え・田沼千恵)

## 自然食通信46

隔月刊/定価570円  
(本体453円+税210円)

### 特集 アレルギーに楽しい料理

一年にわたる連載で、それぞれの専門の方から、アレルギーが起るメカニズム、小児科での治療やアドバイス、薬物副作用との関連などを紹介。今号以降、成長に不可欠なタンパク質、脂質除去法が果して最良の予防かといった疑問も含め、食との積極的な付き合い方を通したアレルギーへの対応を展開します。



六月十一日発売

あをいさんの

## ひらめき自家菜園料理

中村あをい著／撮影・川辺紀美子

A5判カラー 定価二二六六円

畑の四季をそのまま卓へ。農業も化学肥料も使わない、野菜は大地の滋養そのもの。脱サラ百姓の夫と子どもめまぐるしい農業の明け暮れの中で、素材にひらめいた料理の数々を一年にわたって撮りました。

東京都文京区本郷2-6-10

☎03(816)3857 振替・東京5-78026

自然食通信社

## 徹底ガイド

# 塾の教育システム

## ②

## コンピュータ 利用の学習法

レポート・岩田 和子

### 学校でする 学習の限界

学校とは「勉強をおそわるところ」、「友達を作るところ」、「団体生活・社会生活を学ぶところ」である。もちろんこれ以外の定義も多々あるだろう。

しかしだれにとっても、「学校」といえばまず思い浮かぶのが「勉強」ではないだろうか。もともと学校とはそういうところであった。親には教えられない「読み書きそろばん」といったものを、「先生」が教授する。教えを与える場所だったのである。だがこれは百年も前のこと。当時ならば、少なくとも初等教育における学習成果に関し

ては、「だいたいこれくらいのができればいい」という程度の曖昧な基準しかなかっただろうし、またすべての子供が「よくできる」必要性もなかった。高等教育を受ける子供が少なかったし、初等・中等教育を受けてすぐに社会へ出て働く子供はもっと多かったからである。

よくできる子もできない子も、分相応のものを身につけて、それなりに大人になっていた。

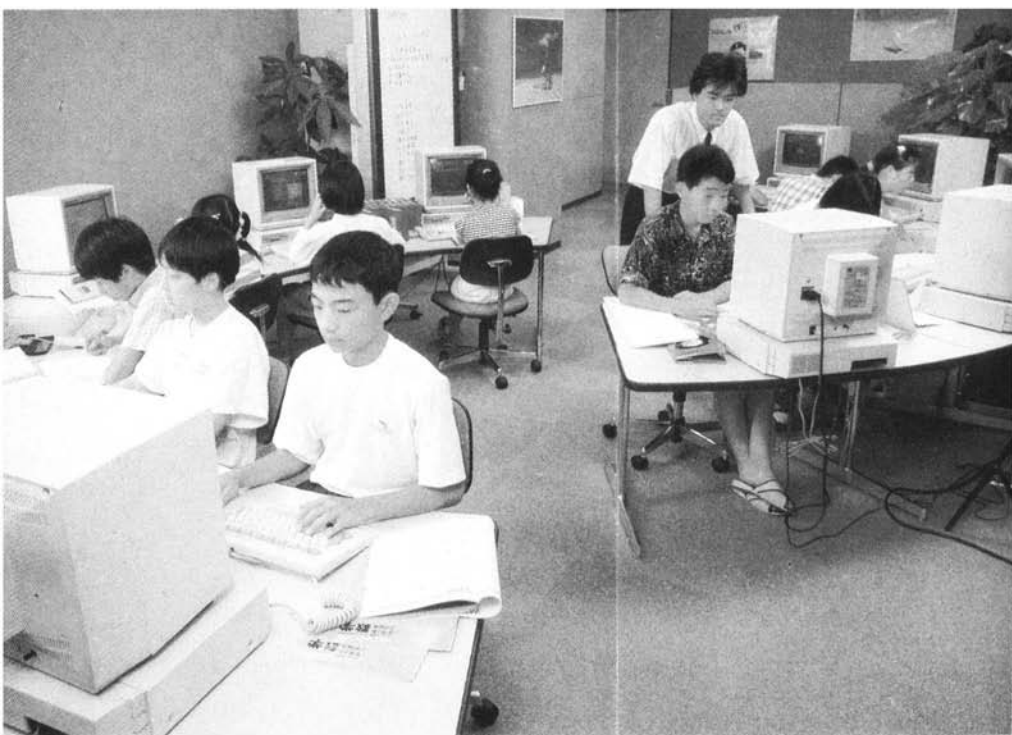
しかし現在はそうではない。ほとんどの子供が高校に進学し、かなりの子供がそれ以上の教育機関に進む。別に決められているわけではないけれど、こうした流れにあって逆らって教育を受けずに社会に出てい

くことは、とてつもない勇気を必要とする（よほどの才能やら、親の資力があれば別だが）。

こうした中で、学校の先生は自分が教えるすべての子供を、あるレベルまでできるようにしてやらなくてはならないことになる。これはたいへんなことだ。絶対にとは言わないが、まず不可能に近い。自分がみてやらなくてはならない子供の数とその個性、物理的な時間数、教えるべきことの量などなどすべての条件からみて、そんなことは超人でもなければできないことではない。

現在、塾が一大産業として繁盛しているのもこうした背景があればこそである。





## コンピュータを 学習に生かす

しかし学校にしろ、塾にしろ、子供たちを直接指導するのは教師。生身の人間が人間を教えるということは、うまくかみあっている関係ならばいいが、そうでない場合もあるのではないだろうか。たとえば、いくら頭脳明晰であっても、教えることは必ずしも上手とはいえない教師だったら？

またある教師は、A夫にはいい先生と思えるけれど、B子にはフィーリングが合わない。こんな場合、A夫とB子の能力に差がなかったら、B子は果たしてA夫と同じくらい学習成果をあげることができるだろうか？

さらに、一人の教師が何人かの子供を指導する場合、その授業のベース配分は教師自身が決めることになる。能力の高い子供に合わせたベースで進めれば、多くの子供はついていけない。または理解の遅い子に合わせなければ、それ以外の子供は退屈してしまう。いかにみんなのことを考える教師であったとしても、いや、一人一人の子

供を大切にする教師であればあるほど、授業を進めることが難しくなってしまうという側面がでてくる。

「教育」全体を考えるなら、このような場面も大切なことだが、学習成果をあげるということだけに限るなら、一人一人の子供が、自分のペースを自分で決めながら、能力に合わせて学習していくことも考えられていいのではないか。

逆に言えば、学習の場面においては、子供一人一人が持つ能力の差を踏まえた上で、各人が学習意欲を持ち続けられるような、しかも子供自身が主体として学習に関わっているような、そんな環境が最もよいといえることになる。とすれば、マンツーマン、それも子供と教師の息がぴったり合った授業でこそそれははじめて実現することだが、これも簡単にできることではない。

このような条件を満たすものというふれこみで開発されてきたのが、コンピュータによる学習法、「CAI」(Computer assisted instruction)である。つまり、子供一人に一台のコンピュータを与えて、

子供自身がキーを操作しながら、学習を進めていく方法だ。

「CAI」の持つ一番の特長は、徹底的な個別化と、学習者(子供)自身がイニシア

の動機づけをするところから授業が始まる。「今日はこういうことを勉強するよ。ほら、○○君、こっち向いてないとか分かんなくなるよ」などというように。

#### ——『トップセルCAIシステム』の4つの特色——

##### ■個別対応の学習ができる

1. どんなレベルの生徒であっても学習が可能である。
2. インストラクター(教師)と生徒の関係は常にマンツーマンである。
3. 学習の成果を、生徒一人一人が確実につかむことができる。
4. 生徒は、いつからどこからでも学習をすることができる。

##### ■学習環境の質的改革ができる。

1. 生徒の内的動機づけを高揚するシステムである。
2. 生徒の特性(能力・個性)に応じた能力開発を可能とするシステムである。
3. 塾経営を設置型産業化・或いは集約産業化するシステムである。

##### ■学習習熟度の判定がリアルタイムでできる。

1. 綿密、かつ的確な生徒指導が可能になる。
2. 生徒の弱点を発見し、かつ生徒は正しく発見できて、効果的に補強しうる。
3. チュートリアル(解説)、ドリル(演習)、テスト(評価)と、段階的進行学習が可能である。

##### ■学習情報の蓄積・分類ができる。

1. 塾と家庭との交流(学習記録・評価の伝達)によって家庭学習が可能である。
2. 指導マニュアルが整備・改善される。
3. 地域、或いは全国提携塾情報網の編成により、さまざまなニーズへの対応が可能となる。

タイプをとるとのことだろう。

ふつう学校で勉強する時は、大勢の生徒に一人の先生が向かい合っていて、最初に学習

しかしCAIでは、子供自身がスイッチをオンにするところで、まず学習の動機づけをするわけである。この時点で、子供は

「このことを今から勉強する」という覚悟が  
できている。

また、内容は各自自分のレベルに合った  
ものを選ぶことができる。具体的にいうと、  
たとえば「かけ算」なら、小数のかけ算を  
練習しようと思う子は、そのカリキュラム  
が組まれたソフトウエア（フロップピーデ  
ィスク）をコンピュータに差し込んで使う。  
分数のかけ算なら、それ用のものを使えば  
いいのである。

学習の達成感、良い評価を受けた時の満  
足感というものも、学習意欲をあげる大き  
な要素である。しかし大勢での授業は、す  
べての子供がこの「ごほうび」をいただけ  
るわけではない。むしろいただけるのは常  
にごく少数の子供で、たいていはいっしょ  
うけんめいやってもあまり目立った評価は  
されない、という場合のほうが多い。しか  
しコンピュータに提示される課題を一つ一  
つこなしていけば、その都度「できた」と  
いう感じを確かに味わうことはできるだろ  
う。

さらにコンピュータと対話する場面にお  
いては、本当にできたかできなかったかは、

いやおうなしにはっきり分かるのである。

どこにつまずきがあったのかは自分で判断  
できるから、そこへもどって理解を確実な  
ものにしないおすということも可能だ。自分  
で自分の時間を管理しているわけだから、  
一斉授業のように「見切り発車」されて、  
おいてきばりを食うこともないといえる。

つまりCAIは、自分から勉強に取り組  
み、自己評価をし、必要なフィードバッ  
クを行なうなど、すべて自分のペースで学  
習することが可能、というのである。

## CAI塾で 見たこと聞いたこと

CAIは、アメリカやイギリスでは、も  
うそう珍しいことではないそうだ。しかし  
コンピュータでは先進国である日本なのに、  
公立小中学校ではまだ使用しているところ  
はたいへん少ない。それでも、いくつかの  
塾がこうした試みをはじめだしているとい  
う。

その中で、東京文京区にある、主として  
旺文社の開発したソフトウエアを使って、  
子供たちの「自学自習」を目指している塾

「トップゼミナール」を訪ねてみた。

「トップゼミナール」では現在、小学三年  
から六年までの算数、中学生は数学・英語  
・理科・社会をコンピュータを使って学習  
する教室を開いている。ただし国語や英語  
の長文読解などはソフト化が困難なため、  
一般授業と同じ形で行なっているという。

コースは、  
「基本クラス」（各学年で必要な基礎学力を  
充実させることが目標。学校の授業に先行  
した予習中心クラス）、

「教科書対応クラス」（不得意な科目、弱点  
の克服が目的で、復習が中心）、

「特進クラス」（有名私・国立進学希望者の  
実力養成クラス）、

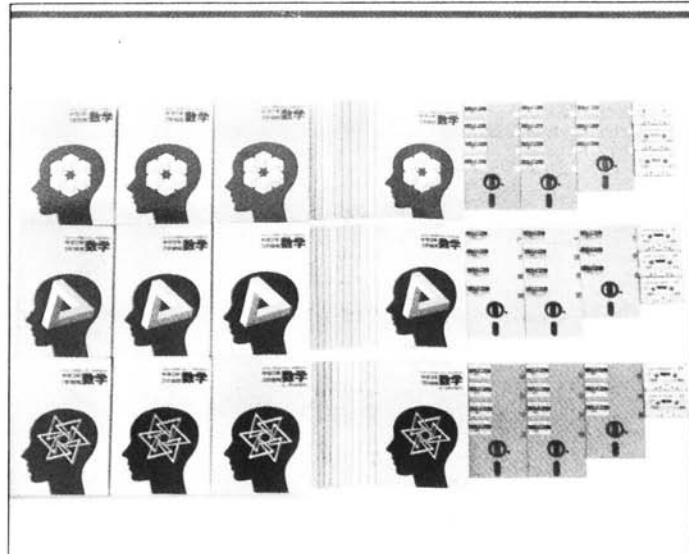
「私立・国立小（中）学校対応クラス」（現  
在私立または国立の学校に通学している生  
徒対象のクラス）

と分かれていて、補習・進学とどちらの通  
塾者にも対応できるよう、何種類ものソフ  
トをそろえている。

そうした中でコンピュータ学習初体験の  
私は、「小学校算数」の「小数のかけ算」と  
いう単元をやってみることにした。指導は、

教務課主任のOさん。

まず小型テレビくらいのパソコンに向かい画面の下に「システム」と「教材」のフロッピーディスクを入れる。このシステムフロッピーが、生徒一人一人の成績を記録するのだそう。スイッチをおすと、あざやかなカラー画面が現われた。微かだが、



BGMも流れていて、ほとんどテレビゲームのように見える。

画面には「この内容はすでに勉強しました」という文章が提示され、その下に「勉強した人は1」「勉強していない人は2」「番号をおしてください」と出る。「2」のキーをおすと、次の画面に移る。イエス、ノーを表わす時は、みなこのようなやり方を使う。

さて、次には「ここでの勉強」、つまりこの単元で学習することの要点が示される。たとえば「 $\infty \times \pi$ 」なら、それぞれを10倍ずつする。つまり100倍したものととして計算してみる、というやり方が画面に表わされる。

「この説明は少し概念的というか抽象的な感じがしますが、だれでも分かることなんですか？」ときいてみた。

「それはこれまでの学習がすすんでいれば、理解できるようになっているんです」とOさん。

つまりどの段階で習うことでも、必ず前段階までに、すみやかに理解できる素地を作っておけるよう、プログラムされている

のとか。

画面では計算の方法や考え方が簡潔に解説される。理解できたら、イエスのキーをおして次に進む。ここまでする「クローズアップ」(基礎的な知識の解説)といい、一般授業では先生が黒板に書いて解説するところにあたるという。計算問題だったためか、ここは比較的簡単に終わった。

次は「チェックチェック」というところ。

ここでは簡単な例題が提示される。「クローズアップ」で習った知識が理解できているかどうか、やってみるわけだ。画面には、小数点のある二ケタほどの数字が、筆算の形で現われる。

「画面を見て、暗算するんですか？」

とあわててきくと、

「いえ、計算はノートにやってからキーをおすんです」とのこと。

ノートに計算して、テンキーをおして答えを提示する。キーの操作は電卓と同じだからそうとまどうことはない。答えはさいわい合っていたので、次に進めることになる。

次は「ドリル」。本格的な計算の演習に入

## 「中学TOPゼミ数学」の基本構成

〔1年〕

- フロッピーディスク：11枚（うちメインシート1枚）  
データシート1枚につき、5レッスン分の解説、演習フェイズに該当する内容が収められています。
- テキストブック：3冊  
解説フェイズの学習内容を記述したものです。
- チャレンジ問題集：10冊（評価フェイズに該当）
- 解説テープ：3本（数学の学習方法を解説したもの）

〔2年〕

- フロッピーディスク：11枚（うちメインシート1枚）
- テキストブック：3冊
- チャレンジ問題集：10冊
- 解説テープ：3本

〔3年〕

- フロッピーディスク：11枚（うちメインシート1枚）
- テキストブック：3冊
- チャレンジ問題集：10冊
- 解説テープ：2本

る。画面には、一問ずつ筆算形式の問題が現われて、先ほどのように答えを入れていく。このとき答えがあっていると、画面下に「やったね!」とか、「君はすごい!」などとおほめの言葉が出る。何となく面映いが、こういうことでも、子供にとっては何もなによりはやる気が出るのかもしれない。

問題は少しずつ高度なものに進んでいく。答えが合っているときは、画面の下に緑の線が出るが、間違うと赤い線が出る。赤い線が出てしまったら、リターンキーをおすと、やり直しがきく。二度目間違えたと解答が出て、まだよく理解できていないと

いうことが分かる。

「こういう場合に、インストラクターが助言を与えて、理解を助けるのです」とOさんは言う。

ドリルでトレーニングした後は「テスト」で実力を試す。ここでこの節の習熟度を最終的にチェックし、実力がついていたら「まとめの問題」（1、2とある）に進む。これらが六〇パーセント以上正しくできると、さらに高度な「ハイレベル」の問題に挑戦、という運びになる。「テスト」の段階でまだ実力が不足していた場合は「チェックチェック」や「ドリル」にもどる場合もある。

これが一単元の学習の流れだが、「クローズ」「チェック」「ドリル」「テスト」と、一回でクリアする子供は少ないようだ。もちろん単元の内容にもよるが、何回かはもとにもどって復習しながら進めていく。次の段階に進むかもどるかは、原則として子供自身が選択をする。

「でも、子供が迷っていたり、適当と思われない選択をした場合には、もちろんこちらから指導します」

インストラクターは、ふつうは子供たちの後ろにいて、いちいち学習指導することはない。ただ子供たちがとまどったり、つまずいたりしていたら、助言するのである。人数は子供五人に一人ぐらいの割だろうか。ここでは若い女性二人が受け持っていた。現場の教師経験はなくとも、教員免許は持っている人ばかりだ。

午後五時から小学生のクラスが始まる。教室に入って、子供たちの様子を見ることにした。

広さ約十畳ぐらいの洋室に、デスクが十個ぐらい、壁際においてある。各デスクにはコンピュータがあり、きている子供たち（男子三人、女子三人）はそれぞれの段階に応じた内容の勉強をしているが、みな壁のほうを向いている。つまりおしりを中心に向けて、放射状にすわっているわけだ。これはインストラクターが各画面をよくみることができるようするためのだろう。床はカーペット敷きで足音もしないし、みな自分の画面に向かってノートをとったり、キーを打つただけだから非常に静かである。

——こういう勉強って、よく分かる？

「うん」

「むずかしくない？」

「むずかしくない」

「自分からここに来ることにしたの？」

「おにいちゃんに来てたから」「小三男子」

「この勉強のやり方ってどういいうところがいいと思う？」

「(しばらく無言)自分でやってるって感じがするからかな……」

「勉強にコンピュータを使うのには、すぐに慣れた？」

「うん」

「お勉強中、失礼ですが……」という感じでおそろおそろ何人かの子供にきいてみたが、勉強に熱中しているせいか、静かな雰囲気のか、みな言葉少なで、とっぴうしもない答えは返ってこなかった。

確かに勉強しているという雰囲気はある。厳肅な、という感じがえる。だが、小学生ばかりがいるにしては、どこか冷ややかな感じでもないではない。もっと子供特有の汗っばさや、ある種の活気あるいはやかましきはないのかと思う。算数という学科の特殊性にもよるのだろうか。算数の場合、



どうしても抽象的な思考の世界に入りやすく、理科や社会などのように実際の現象を見ながらの、「わあー」とか、「へえー」などというつぶやきが聞こえにくい傾向にはあるのだが。

さらに塾が子供にとって、学校とは違うもう一つの友達とのふれあいの場として、役に立つ、という話もきくが、その役割に關してはどうなのだろうか。

「しかしここは楽しさを求めてくる場ではないのです。あくまでも学習をするところなのですから、楽しくやりたい、というお

子さんには向かないでしょうね」とOさん。そうこうするうち、一人の男の子が入ってきた。するとそれまでしんとしていた室内がやや変わった。その子が隣の子とおしやべりを始めたからである。その子はいつまでもしゃべり続けたわけではないが、こういうふうにな「楽しんで」いる子は別な場所に移動させられることもあるそうだ。

やはりここは純粹な「学習」の場なのだろう。小学生は週二回、一時間二十分、中学生は同じく二時間十分、自分でコンピュータを操作しながら、他者の介在なしに学習に没頭するのである。

## さまざまな意見

「子供が勉強にコンピュータを使うなんて、そんな必要があるのかしら……」

「勉強してるって感じがしないし、なんか、非人間的な感じがするわ」

「情緒がそこなわれるのでは？」

「目が悪くならないかしら」

何人かの親からはこうした意見がきかれた。機械オンチだし、と、自分が勉強するわけでもないのに、機械アレルギーを強調

する人もいた。

確かにC A Iは、今の親の世代には全くなかった学習法であるから、不安を抱くのは当然だろう。だが、すべてに否定的な面ばかりを憶測するのはどんなものか。この点子供自身はあまり抵抗がないようだ。中には自分には向かない、という子もいるようだが、そのときはその子の選択にまかせればよい。親としては、頭から否定してかかるのではなく、コンピュータとは、一つの学習機器、あるいは学習をよりよく分けるための媒体（メディア）と考えればよいのではないだろうか。

目を痛めることについては、「トップゼミナール」の場合、画面に「アイ・セーバー」というギラつきをおさえるフィルターを用いていた。また、一回一時間二十分の学習時間に対して、実際画面を見ている時間は約三分の一くらいだった。これが絶対に目を痛めない保証になるとは言わないが、目への心配だけがコンピュータの否定につながるとは考えにくい。

「コンピュータでは教育はできないですよ」というのは、あるベテランの小学校教師。

「だって、子供というのは集団の中にいて伸びていくものでしょう。『あいつができるなら、よし、ぼくも』ってがんばることもあるし、いろんな人の意見を聞きながら、自分の考えをまとめていくことも大切なんです」

親たちから出た危惧と同じように、確かに「教育」全般を通していうなら、これは当たっているだろう。他人とのふれあいなしに人は成長することはできない。ただし「学習効果」だけを考えるなら、ある種の学問には、コンピュータの適切な診断を適用して、それを学習に生かすことは可能だ。言えるのは、C A Iはあくまでも教育の一つの分野であり、方法にすぎない（少なくとも現在のところは）ということではないだろうか。

さらにC A Iが普及する背景には、もう一つの側面がある。それは塾を経営する側から見て、コンピュータの導入は大きなメリットがあるということだ。

どの塾にしても、優秀な教師を配するにしたいへんな努力がある。お金もかかる。しかも前述のようにいくら優秀でも、一人

の教師が多くの子供を指導するには限界もある。しかし、コンピュータのソフトを使えば、その点で省力化、能率化が図れるのである。もちろん、ソフトの内容にもよる。粗雑な内容のものではだめだが、時間とお金をかけ、練りに練ったものを厳選して使うなら、質の高い効果をあげることが可能はずである。

しかし学習の内容は、基本的にはいわゆる「ドリル」である。ペーパーのドリルをやるのと、コンピュータの画面を使ってそれを行なうのと、この二つの間に基本的な差はない。ただ、子どもの答えの正否が、一瞬のうちに判定されるというところだけが違う。このことはプラスなのか、マイナスなのか。効率だけを考えるなら、たしかにプラスといえるではあるが……。

さらにうがった見方をすれば、コンピュータ時代に乗ろうという一種の「ファッション化」にも通ずるところがある。あるいは他の塾との「差異化」といふべきか。塾の経営という点からみると、確かにこれにねらっているなと思えるふしもある。

けれども、世の中全般がコンピュータな

してはいかなくなっているということも事実だ。子供は遊びを通して成長するというけれど、まさに今の子供たちは遊びの主流にコンピュータを使っているのである。将来、コンピュータを日常茶飯に使うであろう子供たちの数は、私たちが予測するよりはるかに多いのではないだろうか。

これからの理想のコンピュータとは「鉛筆のようなもの」だという人もいる。つまりいちいち「鉛筆を持っている」と意識しなくても、だれだって自分を表現しているではないか。それと同様だというのだ。そういう方向から考えてみると、日常の学習の中にC A Iを取り入れることは決して悪いことでも、とりたてて奇妙なことでもないのかもしれない。

しかし忘れてならないことは、インストラクター自身も言っていたが、コンピュータは決して万能ではないのである。機械が教えるのではなく、子供自身が学習するために使うものなのだ。そしてより大きい「教育」そのものは、家庭や学校、社会の中で人間によって行なわれなくてはならない。私たちがそのことにもっと自信がもてれば

逆に、コンピュータにアレルギーを感じることなく自由に使いこなしていけるのではないだろうか。

ソフトウェアの制作側は、さらにいっそうすぐれたものを開発していったほしいと思う。

「対話式」とはいつでも、使っている子供を見ていると、やや受け身な感じがするのは否めないし、もうひとつほのぼのとしたものが欲しいような気もするのだ。もちろんゲームではないのだから、ことさらおもしろおかしくする必要はないかもしれない。しかしいかに機械とはいえ、コンピュータは人間の頭や心に直接うったえかけるものであり、この点でなにがしかの感動が感じられるなら、いっそう学ぶ喜びを得ることができるのではないだろうか。たとえば、「お母さん、今日ね、コンピュータにぼくがこんな答えを入れたら、コンピュータがくやしがって、じゃ「こんなのはどうか?」って挑戦してきたんだよ。それでもぼく、よく考えたらできちゃったんだよ。そして、今日は負けたけど、次はぜったい勝ってやるからな」だって。でもぼく、この

次もきつと勝ってやるよ」

こんなふうにコンピュータと友達になれたなら、C A Iはもっと親しいものになっていくのではないかと思う。

「トップゼミナール」

本部

〒101 東京都千代田区外神田三二一六  
有地ビル

Tel ○三二二五六―三二八八

Fax ○三二二五六―四〇一七

音羽本校

〒112 東京都文京区音羽一―一五―一五  
シティ音羽

Tel ○三一九四四―六三三一

横浜本校

〒221 横浜市神奈川区鶴屋町二―二四―一  
谷川ビル六F

Tel ○四五―三二六―〇二二

(資料提供・トップゼミナール)



# 期限なしの支払いの果て

神奈川県 川崎文子

## ゴミ箱に直行した菓子折り

「T様より」と書いたOデパートの菓子折りらしい包みは看護室の休憩室の角に放置されたまま、誰も開こうとはしなかった。

あの狭い産道に頭が落ち、おぎゃあと泣くまでの暗くて苦しいトンネルにイサちゃん（愛称）はもう入っていた。あと二、三日もすればあらゆる苦しみから解放される新しい世界に旅立っていくことがわかっていたのだ。

その人を他の病院に連れていった娘夫婦のやりかた、薄情さとその強引さに私たち看護婦は皆アタマに来ていて、「あんな奴の買ってきた物など食べたら反吐が出るわ」と触るのも嫌だと言わんばかり、結局ゴミ箱に直行した。

娘夫婦の期待通り、イサちゃんは転院して二日目に亡くなった。そのとき着ていた病衣を返しに来たおり、看護室

に立ち寄り「長い間お世話になりました、皆さんでどうぞ」と置いていった菓子折りだった。

## 無言の死願望

イサちゃんは八十六歳、脳梗塞後遺症による右片側マヒで、私がこの病院に就職した去年三月には、すでに身辺のことは全て介護を必要とする患者だった。背骨の湾曲がひどく、歩くとしたら土をなめるくらいに腰を曲げた姿勢が想像された。曲がった背骨が邪魔で真っすぐ上をむいて寝ることができず、必ず左右どっちかをむいて丸くなり、両脚は胸につくほどに曲がって動かず、マヒ側の肘も曲がったままで、身体の割には頭が大きく、骨と皮の胎児を連想させた。

顎がこけ入れ歯は合わず歯ぐきだけとなり、食事はミキサー状に粉碎したものを、私たちが介助して食べさせてい

た。というよりは、口を開いた瞬間を狙って流し込むといったほうが正しいかもしれない。一口か二口で口をへの字に硬く結んで首を振って拒否をした。両便が失禁でオムツを使っていたことが、食べ物拒否する最大の理由だったように思われる。

「遠慮はいらないのよイサちゃん、誰だって老人になるんだし、私だって誰かのお世話になるのよみんな順番なのよ」  
どんな風に言っても意識の清明な明治の女には、「しもの始末」を他人にしてもらいうくらいなら、食べないほうがましだったのかも知れない。脚が開かないからオムツ交換は三人がかりだった。耳はよく聞こえ、私たちの話は理解したが、自分から声を出すことはほとんどなかった。

「どこか苦しい?」「痛いところはない?」などと聞いても必ず首を横に振るだけで、タテに振ることはなかった。苦痛の表情すら私たちに見せることはなかった。

鶏ガラのような小さな手は、いつも左側のベッドの柵をしっかりと握っていた。二時間ごとに体位を交換して右側を向かせても、いつのまにか左向きになってしまふのだった。イサちゃんの右側は窓で、人の気配はいつも左側なのだ。隣の患者には家政婦が付いて細かい世話をしているの、いつもそれを見つと見ていた。羨ましかったに違いない。私とその部屋に入るとイサちゃんは必ず私の行動を目で追、自分の所に来て欲しいと言っているように思えるのだった。

「イサちゃん、どうしたの」

そう声をかけてしばらく手を握ってあげていると、こんどは「もう行ってもいいよ、あんたは忙しいんだから」と言っているように顎を突きだして自分から手を放すのだった。ずっと左を向いて、白い冷たい金属の柵が暖まるほどイサちゃんはいつも柵から手を離さなかった。薬指にはめた指輪と皮膚との間に隙間ができ、抜け落ちそうになるのをよく絆創膏で止めてあげた。体重は二十キロぐらいで、軽々と抱き上げることができた。

## イサちゃん容態悪化

そんなイサちゃんの容態が急に悪くなったのは、六月に入って間もなくのことである。高熱が続いた。真っ黒いタイル様の血便がオムツ交換のたびに流れでた。赤くただれた陰部は湯で拭くたびに血がにじんだ。尿の出が極端に悪くなり、あの皺だらけの小さな体がむくみで、蠟を塗ったようにピカピカと光り、ツマヨウジを刺すとびゅっと弾けるあんこ玉のようになった。

ジョクソウがお尻や背中、踵などにでき始めた。下血は血液の中の血小板が減少してきたせいである(多分、昭和天皇もこのような症状だったことが推測される)。輸血する以外止める方法はないのだが、家族はいかなる治療も拒否している。尿が出ないのはこれも血液検査から腎不全を起したものと診断された。

それでもイサちゃんの意識は鮮明で、私たちが何かしよ



うとするとマヒのない左手を鼻の前に立て、拝むような仕草をした。その仕草は、

「どうか何もしないでくれ、静かに死なせてくれ、お願いだ、お願いだ」と言っているに違いなかった。

ジョクソウが痛い、身体中がだるい、呼吸が苦しい、千の言葉でも訴えきれないほどの苦痛があるはずなのに、イサちゃんはそういうときでも仏様のような穏やかな表情を崩さなかった。

## 娘を呼ぶ

私はこの三か月、イサちゃんの家族を一度も見たことがなかった。他の同僚に聞いてみても、入院したころはときどき見かけたけれど最近是谁も見た者がいないと言う。

私は意識がはっきりしているうちに一人しかない娘に会わせてやりたくて、顔を見せて欲しいと電話をした。娘らしい声で「はい」というたった一言の応対だった。

やってきたのは私と同じ年格好の娘だけで、大学生だという二人の孫も、娘婿も来なかった。ただの一度も愚痴を言わず、何の要求もせず、どんな苦しいときでも仏様のようないサちゃんが育てた娘とはどんな人物か、その親子の対面に私は限らない興味を持っていた。

初めて見る五十がらみの中肉中背の娘はみるからに専業主婦といった感じで、服装もどこか野暮ったく、化粧もせず、台所からそのまま出てきたような無表情の人だった。「お世話になりました」でもなく、「大変危険な状態です」との私の説明にも表情一つ変えず、何一つ質問すらしなかった。

イサちゃんがどんなに待っていたであろう母娘の久々の対面もわずか数分、それもぶかぶかのかっぱう着で身を包み、顔が全部隠れるほど大きなマスクをつけ、タクシーの運転手がするような白い手袋をして、ベッドの側に立っただけである。

「お母さん」でもなければ、ベッドの柵を握る瘦せこけたイサちゃんの手を握るでもなく、汚い物を見るような目つきでただ棒のようにしばらく立ち、黙って帰っていった。

たった一人の生みの母のいまわの際に、マスクをし、手袋をはめて側に立つ娘の心境を私はどうしても理解することはできなかった。

汚いものか、恐ろしいものを見るような娘の目つきが私の心に焼き付いた。

今日か明日かといわれながら、イサちゃんの命の灯はなかなか消えなかった。

かっぱう着とマスクと手袋をはめた娘が三、四日ごとに事務的な面会をするようになって三週間が過ぎても、利尿剤と水分の補給をしているだけで、イサちゃんの肺は自力で呼吸をし、心臓は規則正しく動いた。

## 待ち切れず

六月三十日、私は日勤を終わろうとしていた。夜勤者に引き継ぐ間際の四時過ぎ、婦長と主治医とケースワーカーのKさんが一緒にナースステーションに入ってきた。

婦長がいきなり、

「川崎さん、Tさんの看護サマリーを書いて欲しいの、大至急お願い！」と言うではないか。サマリーというのは「看護要約」ともいわれ、他の病院に患者を転送するとき転送先の看護婦宛に、患者の入院中の経過を整理要約して

紹介する書状である。

「えっ、イサちゃんのですか。イサちゃんがどうかするんですか……」

「某病院に急に転院することになったの、家族の強い希望で、言いたいことはいっぱいあるでしょうけど、もうそう決まったの……」

常に冷静な婦長がかなり興奮気味に私に命じた。

「早い話、生かし過ぎだというんだよ」

主治医が吐き捨てるように言った。私は納得できなかった。

「こんな状態で動かすくらいなら、つけているもの（水分補給の点滴と尿を出す管）、全部外したらいいじゃないですか、三日も持ちませんよ」

「それが困るんだとサ、延命なんて何もしてないじゃないか、それがあの人の寿命なんだよ。初めから病院になんか連れてくるなって言うんだ！」

主治医も興奮している。



「それじゃあ、自宅につれて帰るのが一番ですよ。イサちゃんだって畳の上で死ぬことを望んでいるはずよ」

すると、ワーカーのKさんがいかにも困ったという顔を  
して、

「それもできないというのよ、家に連れて帰る勇気もないし、要するに金がかかり過ぎることなんです。ドブに捨てるようなものだ、娘婿がはっきり言うんですよ。まあまあから金がかかり過ぎると言われていて、付き添いも付けず全面的に看護サイドをお願いし、病院としても雑費を普通より安くするなど、やれるだけの努力をしてきたんですけどね……」

「某病院は安いわけ？」

「むしろ料金は高いんじゃないかな、動かすことで死期を早める魂胆なんでしょう、それ以外考えられないですよ……」  
ワーカーも完全にアタマにきていたといった風だ。私が言いたいようなことは、婦長と主治医とワーカーとが家族を囲んで、すでに言い尽くした後の結論で、もはや、私が出る場面ではないことがすぐに解った。

「普通以上の家庭なんですよ、庭つきの一軒家に住み、一流商社のエリートよ、年収は一千万を越し、娘は金のかかる音大に、息子も私大の理工科に入っている家庭で……、実の母親なんですよね……」

もう話は決まったのだ。私は言われた通りイサちゃんのサマリーを書くしかなかった。



分厚いカルテを広げながら、入院から今日までの十か月間の記録を要約した。

最後に次のように書き添えた。

「……穏やかで誰からも愛され、大変辛抱強い患者さんでした。私たちとしては最後まで看取ることができなかったことが残念でなりません。苦しまず安らかな最期でありますよう一同祈っています。どうぞよろしく願っています」

日勤者は時間が過ぎても誰も帰ろうとはしなかった。イサちゃんを送るためである。娘と娘婿を待たせたまま、私たちはイサちゃんの頭をとかし、顔を拭き、耳や鼻の中ま

できれいにし、ジョクソウの交換をし、病衣もオムツも新しいのに替え、ストレッチャーに乗せた。曲がった背骨が痛くないように背中に毛布を丸めて当て、イサちゃんが好きだった左向きにして寝かせた。イサちゃんの左手は空でベッドの柵を探した。私はその左手をしっかりと抱き締め、布団の中にしまった。

そしてイサちゃんのむくみの強い冷たい頬に頬ずりをしながら、

「イサちゃん、約束を果たせなくてごめんなさいね。最後まで必ずお世話をするって約束してたのに、さよならなの……。ほんとにごめんなさい……。苦しみながらこの世に生まれてきたように、苦しみの向こうにきつとまた新しい世界があるのよ、もう少しの辛抱だからね」

私の涙がイサちゃんの頬に落ちた。イサちゃんは目を閉じたままだった。看護婦がつぎつぎに来てイサちゃんへの別れの挨拶をした。

玄関に迎えにきていた某病院の救急車の後ろの扉が開いて、イサちゃんの乗ったストレッチャーが車の中に入ると、ドアは事務的にパッシンという音を残して閉じた。

娘夫婦は私たちの冷たい視線を感じてか、ろくな挨拶もせずに頭を一度だけ無言で下げて車中の人となった。それが私たちとイサちゃんの別れであった。

そしてイサちゃんは二日後に死んだ。

## エピソード

ワーカーの話によると、イサちゃんの毎月の支払いは次の金額である。

### ① 老人医療の自己負担分

一日 四百円 × 三十 〓 一万二千元

### ② 医療外費と称する自己負担

一日 二千五百円 × 三十 〓 七万五千元

### ③ オムツ代

一日 千円 × 三十 〓 三万円

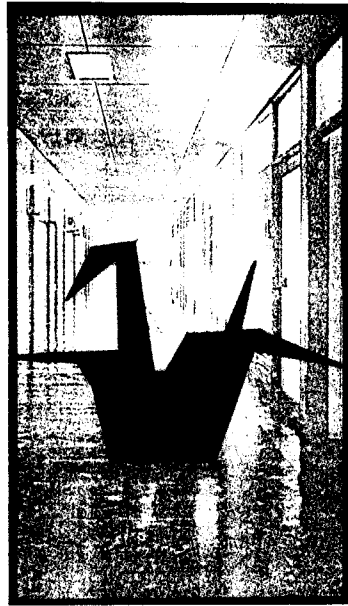
### ④ 介護料

一日 五百円 × 三十 〓 一万五千元



病院への支払い合計は十三万二千元。他にティッシュ、タオル、洗濯のコイン料など本人持ちの雑費が二千元くらい。

イサちゃんの場合は、全面的な介護を必要とする患者で、基準看護でない本院では付き添いの家政婦をつける対象な



のに、家族の合意が得られず、看護サイドで全面的に世話をしてきた例外的な患者であった。入院が長期にわたったために、介護料の五百円を特別免除をして、途中からの支払いは十万円だったという。

しかし、娘婿は「死ぬのが解りきっている人に、毎月十万円も支払うのならドブに捨てるほうがまだまし」と言っていたという。「大学なら四年という期限があるが、いつまで続くか解らない果てしのない支払いはもう限界！」と病院を罵り、「死なせてくれる病院を探してきた」と、もう何

を話しても通じなかったと嘆いた。

しかしKさんは、あれほどはつきり言う人はまれだけれど、心情においては誰もが同じ思いをしている、とイサちゃんの家族が特殊ではないと言うのだ。

それにしても私が最後まで納得のいかなかったのは娘の態度である。特別美人というわけでもない彼女が、某商社のエリートだという夫に嫁ぐには、それなりの家庭で育ち、しかるべき教育も受けた女性であると推測するのが妥当であらう。

あの娘はまるで夫の従属物だ。五十過ぎの今日まで、ひたすら夫に仕える家政婦、子どもを育てるメイドであり、自分というものを抹殺して生きてきた人相をしている。

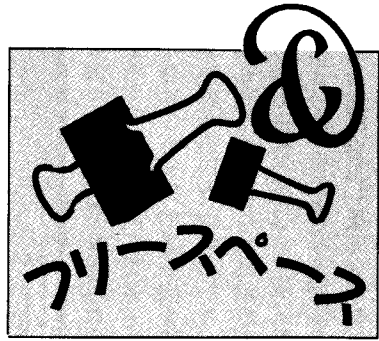
出費が嵩む母親のことで、毎日口汚く罵る夫の前に、いつのまにか母親に対する心までも失ってしまったとしたら、最大の被害者は彼女だったとの図式も考えられる。

見掛けだけの高級な住宅、ローン地獄、際限もなくエスカレートしていく子どもへの投資、「ドブに捨てたほうがまだまし」だと言われ続けた老母の病院費用、現代社会の縮図を見る思いである。

夫に仕え、夫に依存して生きてきた女。意思も涙も枯れた人形のようなあわれを感じてならなかった。

そう遠くはない彼女夫婦の老後が、イサちゃんよりもっと悲惨なように思えてくる。

(え・西田淑子)



## 行方モ知ラヌ 恋ノ道力ナ

●いこうスワン

「仕事が入ったから、またということで」

昼に電話があった。「分かった」と柔らかく答えたものの、その声の調子から私は分かrazuにはいられなかった。またすれ違ってしまったのだ、あい

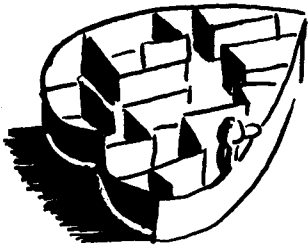
つと。二日間でまた何かが起きてしまったのだ。一昨日の電話では、以前のようにあんなに親しく和やかに言葉を交わしあえたのに。会う約束をしてからのこの二日間、どんなに私が安らいで安定していられたか。極端なことを言えば、会う必要はないとさえ思った。もう話すことも何もないと、それで充分満ち足りているとつい先刻まで思っていたのに、受話器を置いたその瞬間から、心はまた微妙にバランスを崩し始めた。

こんなことであるのだろう。感情というものの扱いにくさ。それから時間の途切れ途切れに、空白だった脳みそにまた忘れていた言葉やイメージが浮かび始めた。

「坊やだよ、あんたは」。腹立たしくもあった。電話が切れたとき、そう思わずにはいられなかった。こんなに経っても、忘れ

ようとしても、やっぱりお互いに会いたいと思ったんじゃないの。何があったのよ。もっと素直になんないよ。人の気持ちなんて、一年前とちっとも変わっていない。驚きあきれるほどだ。

ただ恋はもうたくさん。タワムレニ恋ハスマジ、だよ、本当に。私の恋は……ある日、抜けてしまったよ。それは確か。なのに今もって救われないうこの気持ちは何？ 会えばきつと言葉が通じあえ、互いに受け止めあえると思いがら、ど



うしても何かが狂って傷つきあっている。バカだよ、弱虫だよ。早くしあわせになんないよ。神様は、二度と二人を会わせてはくれませんでしたーナノか。女もツライよ。

## 親の心・子の心

神奈川県中郡・石井しのぶ(31歳)

四月初旬の暖かい日、実家から植木がトラックでやって来た。「植木がふえ過ぎてしまったし、お前達が車で来た時のための駐車場も作らないといけないから……」と午前中、掘り起こしてきたのだと言う。

南天やツツジ、キャラ、さざん花、木犀……七本ばかりの植木はどれも見覚えのあるものばかり。あれは門の側、あれは窓のすぐ横、とひとつひとつと



の様子が浮かんでくる。

植木屋さんは慣れたもので、

もともと無造作に植えてあった

何本かの植木を掘り起こし、持

ってきたものとのバランスを考

えながら、次々と場所を決めて

いった。

一度に七本もふえると、統一

がとれずにバラバラだった庭が

急にひとまとまりの日本庭園に

変わってしまったようである。

旦那はもともと植木が好きなの

で満足そうに眺めている。近く

に住んでいる旦那の両親も見に

来て、「よくなった」と喜んで

くれた。一緒に来た父も上機嫌

である。私も笑っていた。でも

心の中では何かが寂しくてしか

たがなかった。

どうして実家にそのまま植えて

おいてくれなかったのだろう。

植木がほしいなど言った覚えが

ないのに勝手に決めてしまうな

んて。駐車場を作るといっ

口実だろう。本当は私のところに植木を持ってきたかったに違いない。

「あのキャラは丹誠こめてあれ

までにしたんだ」と父は得意そ

うに旦那に説明している。そん

なに大事なものでしょうして持

ってくるのよ。いつものように

不満の言葉を口にしてしまいそ

うで、ぐっと堪えた。みんなが

喜んでいるのに私ひとり怒り出

しては、せっかくの日が台無し

になる。

親とは皆、自分はどうな暮らし

しをしていても、子供は豊かで

あってもらいたいと望むものな

のだろう。でも私は、いつもそ

れが心苦しい。

はらお祝いだ何だと理由をつ

けては、一万とか二万とか小遣

いをくれる。せっかくお中元な

どを持っていても、結局半分

以上もらって帰るようになって

しまう。とてもありがたいこと

なのだけれど、私は自分のほうばかりもらうのがいやなのである。両親が普段から自分達のた

めにお金を使っているのだった

らもっと気楽にもらえるのかも

しれないけれど……。

私の両親は、子供の目から見

て、若い時分苦労ばかりしてい

たように見える。寝たきりのお

じいさんを看た後、誰からの援

助も受けず、三十代で小さな家

を持った。その借金は私が小学

六年生くらいまで残っていただ

ろうか。自由なお金はどこにも

なく、ぜいたくとは程遠い生活

だった。

昭和三十年代後半から世の中

の景気が上向きはじめて、周り

の子供達も徐々にいい服を着、

おもちゃを買ってもらえるよう

になって、うちにはまだ余裕

がなかった。私のおもちゃは、

母が作ってくれたボール紙にア

トムの絵が書いてあるお面や、

古いシートで作った大きなくまの縫いぐるみだった。でもそのころ私が一度もみじめな気持ちにならなかったのは、かえって手作りおもちゃのほうが人気があったからかもしれない。

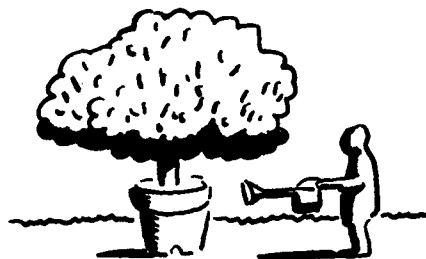
私はいつの間にか物に対して

執着心のない人間に育っていた。

何もねだらない子供の私を、両親はどんなふうに見ていたのだ

ろう。今になって、いらな

いと言う物まで買ってくれよとする。



## 長男・長女

大阪府和泉市●定永淳子(28歳)

植木をもらったおかげで、確かに素敵な庭になった。でも、やはり私は素直に喜べない。親のほうこそ、ずっと買いたい物も我慢して暮らしてきたのではないか。ゆとりができた今、子供のためではなく自分達のためにもっとお金を使ってもらいたいと思う。そのほうが何かをもらうよりずっと嬉しいのだということをわかってもらいたい。だから、植木もあのまま実家の庭で楽しんでいてはしかった。一週間後、実家の庭が半分ほど空地になっているのを見たとき、一瞬胸がつまった。そんな気持ちを知ってか知らずか、相変わらずわがまま娘だと思っているに違いない。親心と子供の心。

お互い相手と思う気持ちは同じなのにどうしてうまく伝わらないのだろう。

夫は長男である。兄弟は妹が一人いる。私も同じく長女で妹が一人いるだけだ。客観的に見れば同じ条件のはずなのに、夫にとっては、自分は長男であり家の跡取りであり嫁をもらったのであるから、自分の両親を妻のほうよりはるかに優先させて当たり前、それが世間の常識であると堅く信じている。

旅行には必ず両親も一緒に連れていく。今年には、夫と夫の両親だけで海外旅行にも行った。小遣いは年中渡しており、ボーナスも三分の一は親のもの。私の実家と夫の実家は我が家から同方向、同距離にあるにも関わらず行くのはもっぱら夫のほう

のみ。私のほうは全く無視している。自分で行けばいいのだから、車でも電車でも二時間かかる道のりを乳幼児二人を抱えてはとても無理である。

先日、夫の親戚に行く用事があり、そのついでに久しぶりに私の実家に行きたいと思い夫に言ったところ、そんなことをすれば夫の両親が気を悪くするからできないと言う。夫の親戚(夫の母の姉の家)に行けば、来たということが夫の親に伝えられるだろう、その親戚の家は、我が家と、夫と私の実家の中間に位置している。そこまで来ていて夫のほうに行かなかったとなると、長男としては許されない行ないであるということなのだ。そうだ。

では今までさんざん夫の親にばかりしてきて、私が何とも思わなかったと思っているのか。今までがまんを重ねてきたもの

が爆発した。そんなに長男が偉いか、男が偉いか。私にだって親はいる。子供の顔だって見せてやりたい。しかし夫には通じない。すべて自分は長男だからの一言である。

「そっちの親と五分五分なんてできない」

「僕は養子に行ったのではない。嫁をもらったんだ」

「アメリカ人とでも結婚すれば良かったやろ。それなら個人主義やからな」

「嫁に来たなんて気、全然ない



やろ」

「長男が親をみる。これが世間の常識だ」

あきれてて返答もできなかった。長男とか常識とかを振り回し、結局自分のことだけしか考えていないのがわからないのだから。

子供の数が少なく娘しかいない家が多く、また跡を継ぐといっても兄弟平等分配の今日でも、長男、長男の嫁という言葉が厳然として存在する。多くの男が長男であるということを考える、結婚という制度の暗さにうんざりさせられる。なぜそこまで頑なでなければならぬのか。なぜ自分も幸せで相手も幸せであってはいけないのか、自分のみが幸せをなぜそんなに欲しがるのか。私にはわからない。ただ妹には長男との結婚は考えるように言っておこうとは思っている。

## 稚児

東京都足立区●富永悦子(42歳)

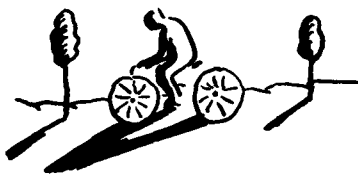
二度も危篤を伝えられながら、父は痩せ衰えた体をベッドに横たえている。口から食べものを受け付けなくなってしまう。三か月、あつという間に骨と皮ばかりになってしまった。近ごろは私達子供の識別も不確かで、反応も鈍い。が、母の声は分かるらしくときどき子供のように甘える。投薬を拒否して叱られているさまは、もうかつての父ではない。あの日すでに、父は遠くへ行ってしまったのかもしれない。

十一月二十七日未明、母の献身とリハビリで、脳梗塞特有の右半身マヒを克服し、立ち歩きと小便くらいは、自分で始末で

きるようになっていた父が、再び倒れた。その日、母は一人ではどうしようもなく、近所に応援を求めたという。

昼前、何も知らず父母を訪ねた私は、うろたえる母を初めて見た。

「おしっこを五回もらしちゃったんだよ、用意してたはずの



紙おむつがみつからなくて、どこにしまっちゃったんだんべ……」

都市計画で田んぼがつぶされ、

昔と全く違う姿になってしまった故郷の町を、薬局におむつを求めて自転車走らせながら、老いた母の、一人で心細かった

であるう未明の様子と、おむつをせねばならなくなった父の姿を思い浮べ、私は泣いた。

二時ごろ、看護婦といっしょに医師が見える。診察の後、先生は言った。

「おばあちゃん、また入院させましょうや」

父の闘病は四年になる。すでに三年近く入院を繰り返し、やっと訪れたつかの間の平穏が、一年も経たず終わろうとしていた。

「やっぱり入院かい……」

母は小さくつぶやく、そして、「でも先生、娘に相談してみましよう」

それが、なんの説得力もなく、意味のない言葉であることを私はよく知っていた、だから、

「この人は娘さんじゃないんかい？」

と、私を指して先生が笑ったときも、のけものにされたという思いは全くなかった。

「これは東京へ嫁った一番下の娘で、こっちに勤めているけど長女がいるんですよ、そっちに相談してみしょう」

大事なことを、いちいち娘に相談して決める母ではない。また、身を削るような病院での看護が始まるうというのに「ハイそうですか」といえない母の気持ちだが、痛いほど分かる。逃れられない決断を迫られ、しばらく時を稼ぎたいにすぎないのだ。母は暦を見る。そしてキッパリと言った。

「先生、明日が大安ですから、明日二十八日して下さい」

大安？ こんな切羽詰まったときでも母は希望を託している。今度入院したら、それが最後だ

と、口グセのように言っていた母が……。

「まったく非科学的なんだから……」

と、私は先生との言葉のやり取りの矛盾を取り繕いながら、胸いっぱいになった。と同時に不安がよぎった。二十八日で良いのだろうか――。

このとき私は、新聞記事を出していた。昔の人の生活の中に、数字判断があって、それは、患者が病気で入院すると、その人の年齢と入院した日とをプラスして、三か九で割ると、余りが出れば見舞いで、割り切れれば葬式だという内容だ。私は急いで鉛筆を握った。十一月二十八日、数え年七十八歳、 $11 + 28 + 78 = 117$   $117 \div 3 = 39$   $117 \div 9 = 13$  両方ともピッタリ割り切れてしまう。これはヤバイ、やめたほうがいい！ あれから三か月、正月も過ぎ

た。危篤を二度も脱することができたのは、母の看護と、もしかしたら大安を選んでいたらかもしれない。数字判断も大安も、科学的ではないが、科学的でないものの中にこそ、人生はあるのかもしれない。

母の懐の中で、父は稚児となつた。

## 女の顔

大阪府吹田市●冠野和子(50歳)

N子は中学の同級生。ちょっと派手な顔立ちで目立つほうだった。それから十五年を経て郊外の私鉄の駅で出会い、お互いに姓が変わったことを教えあつた。かわいい女の子を連れたN子は、幸せそうな若奥様に見えた。さらに二十年がたった。「誰にも言えないことで相談が」

とN子から連絡があったのは去年の春である。さては不倫の悩みかな、苦手だが、と思いがら昼下がりの喫茶店で会う。

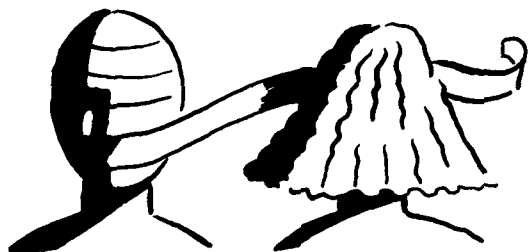
「優等生だった和子さんには笑われるだろうと思うけど、私の顔どう思う」とのっけから。紫のアイシャドウに紫の口紅をつけたN子の顔。思わず視線をひきつけるが、その濃い化粧のとだろわか。何とも答えようがなくて黙っていると、つい最近顔の整形をしたのと言う。意外な話に仰天した。

実はかなり年下の男性と十年前から「大人の恋」の関係がある。お互いに家庭があるので会って楽しむのはセックスだけ。彼はN子の年も正確には知らず、N子のほうもせいっぱい若く見せてきた。ところが肉体の老いは正確に歩みよってくる。何とか若さと美しさで彼をひきつけ喜ばせたい。N子は家計を任

されている立場を利用し、何百万円かけて整形をした。すると「顔より心」と言っている彼も正直なもので、以前に増して濃密な愛の交歓、幸せの絶頂感に酔っているという。彼はN子の整形を知らないのだ。

「整形は一度すると何度も“修復”しなくてはならず、家庭に内緒でお金を持ち出すのも限界。このままだと今の顔は二年も持たない。そのときには彼を失うと思うと、いっそのこと打ち明けようかと悩む」というのがN子の相談内容である。

私が聞き役になっても結論が出せるわけではない。髪の手を引っぱりあげてメスを入れ、シワを引っぱりあげる手術を施したという顔をつめるばかりだった。それにしてもN子と私の対照的な顔。数年前に化粧品品の害について講演を聴いたときから、日焼け止め以外の化粧は何もや



らないのが私である。外出には口紅だけをつけて。

「素顔で人前に出てますてきだなんて、うらやましいわ。それだけで何百万円も得しているのよ」とN子は言う。同い年だからことさらに意識されるのだろうが、私はシワもシミも気にして

いない。両頬のシミが目立つときに「何か顔についていますよ」と知らない人に言われたこともあるくらいだ。

N子の打ち明けた話を聞いて一年。先週、長い電話がかかってきた。

「昨日、とうとう彼に顔のことを打ち明けたわ。そしてもうお別れね、と私のほうから言ったの。彼は何も言わなかった」と涙声になっている。

N子の今の美しさはあと一年もすればくずれるのだという。再手術の費用のあてはない。それなら、今、この美しさのまま記憶にとどめてほしいから、と打ち明けたらしい。

彼のほうも初めて知ったとしたら驚いたことだろう。しかし「あらゆる方法とテクニックでセックスを楽しんだ」という彼とN子の間に、顔にこだわる「個性」は存在したのだろうか。

とにかく会って話を聞いて、というN子の懇願を受け入れ、三日後の土曜日に会うことになった。五十歳になったことだしお互いに新しい気持ちになろう、というようなことを私は言うつもりだった。そこへ金曜日の夜、N子から「娘の婚約がきまったので、土曜日は会社が休みの主人と仲人さんにあいさつに行く」と断わりの電話が入った。

あの女の子が成長したのでろう。ごくふつうの母親であるN子、夫によりそうN子の姿を垣間見る。

多額の費用を工面し、美しい顔をつくって恋人とともに燃えたN子の話は、夢の中で聞いた話だったのだろうか。「男はやっぱり顔のきれいな女が好きなのよ」と繰り返したN子に「今でもほんとにそう思うの」と尋ねてみた。

(え・松本圭以子)

# オーロラと白夜の国

新連載

## ノルウェー生活事情

東京都府中市

中田 慶子

### オーロラ

一九八八年一月六日の午後八時すぎ、夫と私、そして七歳と十歳の娘は黙々と急な坂道を登っていた。年末に降った雪が少し残ってはいるものの、マイナス二度という北緯六十三度の北国の町にしては暖かい夜である。

一息入れようとふと空を見上げると緑色の雲がたなびいている。驚いてあたりを見回すと、空いっぱい緑色とピンク色の光が、みちあふれて輝いている。一瞬、何が起こったのかと目を疑ったが、次の瞬間、「ねえ見て！ あれはオーロラじゃない？」と叫んでいた。無限の空から降りて来る透明な緑とピンクの壮大なカーテン、揺れ動く



沿岸汽船で北極圏へゆく



オーロラ



光の帯は一瞬の後には姿を変え、かき消えたかと思うとまた思いもかけないところに出現し、恐ろしい速さで走るかと思うと、ゆったりと大きくうねって関く。壮大な交響楽を聴いているように感じたが、よく考えると、あたりは全くの静寂なのである。音のないシンフォニー。オーロラの光の帯を透かして星がきらめいて見える。オリオン、カシオペア、北斗七星——何となくさんの星！

私たちが初めて遭遇したオーロラは、九時半ごろにはかすかな白い雲となって消えてしまった。ノルウェーの古都トロンハイムに来て四か月ほど経った夜のことである。

## ノルウェーへやってきた

事の起りは、その一年ほど前のある日。仕事から帰ってきた夫が、いきなり言った。「うちにいくら貯金ある？」「えっ、どうして？」「実はノルウェーから留学許可がおりた。奨学金は出ないから私費で行くしかないんだけど」「!!」。

すったもんだの末、とうとう私たちはトロンハイムへやって来た。一九八七年八月末の朝である。日本からの直行便はないのでフィンランドを経由して首都オスロへ着き、さらに真北へ向かって飛ぶこと五十分。眼下に広がる険しい山々と深い森

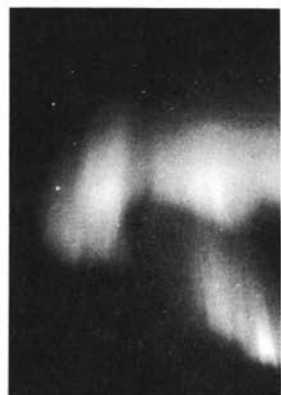
にノルウェーの自然の厳しさをうかがい知る。飛行機はトロンハイムの小さな淋しい空港に降りた。

空港から市内まではバスかタクシードで一時間ほど。車は美しいフイヨルドに沿って、かなりのスピードで走って行く。澄みきった青い空、緑の木

立、白樺の幹、短い夏を精一杯咲き終えようとしている明るい色の花の数々。フイヨルド沿いのわずかな平地もよく耕されて、農場の中にポツン、ポツンと家が見える。

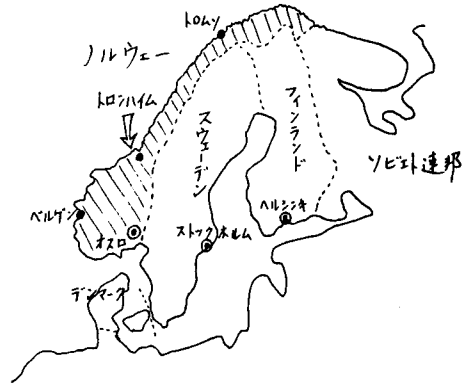
ほとんどの家は木造で白や赤のペンキが塗られ、窓辺にはレースのカーテン、色とりどりの花の鉢や置物が美しい。ビキニやショートパンツで日光浴をしたり、庭で食事を楽しんでいる家族もある。塀のない家が多いので、こうして庭や家の中が見えるのだと気がついた。

次第に家の数が増えてきて、いよいよ市街地に近付いてきた。モーホルト・スチューデントタウンというのが私たちがこれから住むところなのだが、それがどんなところかは全く知らない。夫だってノルウェーは初めてなのだ。私の英語ときたら片言程度、ノルウェー語にいたっては辞書すら



オーロラと白夜の国

\*フイヨルド＝氷河に浸食された谷に、海水が入り込んでできた細長い入江



なく、言葉の不安だけでも私の頭は押し潰されそうだ。知る人もない未知の町での生活に対する緊張と期待とがないまぜになって、興奮している自分を感じる。夫も子供たちも皆言葉少なく窓の外に流れる景色をみつめている。

トロンハイムはフィヨルドの一つである小さな入江の奥に造られた町なので、町のごく中心の、ニダ河に囲まれたニダロス大寺院を中心にしたわずかな部分の他は、緩やかな丘や山になっている。港を見下ろす丘の上の古い要塞から町を眺めると、カモメの飛び交う港に、教会の塔が緑色に輝いてフィヨルドの海はいつも銀色に静かに光っており、いまにも千年前のヴァイキングの船が入江から現

われそうな錯覚を起こしてしまう。

ここにはノルウェー工科大学という、工学部門ではノルウェーで最高水準の研究教育機関がある。夫の専門は水産海洋学なのだが、今回はこの電気工学部門のバルケン教授のもとで研究する機会を与えられ、はるばるやって来たわけである。

タクシーがスチューデントタウンに着くと、レセプションと呼ばれる受付の建物の前で、「日本から来たナカタか？」と声を掛けられた。大学の事務担当のペテルシェンさんである。着く時間を知らせてなかったので、朝からずっと待っていたのだと言う。まさか待っていてくれる人がいるとは思わなかったもので、びっくりしてしまった。受付で簡単に入居手続きをすまずと、ペテルシェンさんは鍵を受け取って自分の車に荷物を積み、少し離れた建物へ私たちを案内してくれる。「奥さん、気を確かに。驚かないでくださいよ。何にもないアパートですから」と言うので、どんなにひどいところかと覚悟を決める。

私たちがこの家族用学生アパートに入れてもらえたのは幸運だった。住宅難で普通の貸家はとても高い（家具付きで、月十二万円程度）。家族用学生アパートはいわゆる一DKで、六畳の寝室に十四畳ほどの居間、キッチン、バス、クローゼ



ットなど一通りの設備が整っている。家賃は当時、月五万円、他に光熱費一万円。おどかされて覚悟を決めてきたのに、簡素ながら整ったアパートにほっとした。

ペテルシエンさんは食器や、家具が充分でないことをしきりにすまながるが、ベッドが二つ、食卓と椅子が二脚、デスクが一つに、冷蔵庫と最低のものは揃っていて、地下室には共有の洗濯機、乾燥機、もの干し場もあった。日本でのアパート生活を知っている私たちには、充分すぎる設備である。

一つの建物に十二家族がはいっていて、煉瓦造りの同じような建物がいくつも並んでいる。ノルウェー人学生の他に留学生もかなりいて、小さな国際村といった感じである。

ようやく荷物をほどこいて持参のキャンプ用の食器を取り出し、レセプションの脇のスーパーで買い出しをして、パンと牛乳とソーセージで簡単な昼食をとった。何と言っても嬉しかったのは水道の水がそのまま飲めることである。ヨーロッパの中でもノルウェーは水の良い所で、とりわけこのトロンハイムの中心部の水は冷たくておいしい。日本以外で水道の水は飲めないなどと言う迷信がここで一つ打ち砕かれたわけだ。

スチューデント・タウン 木のほりをする遊

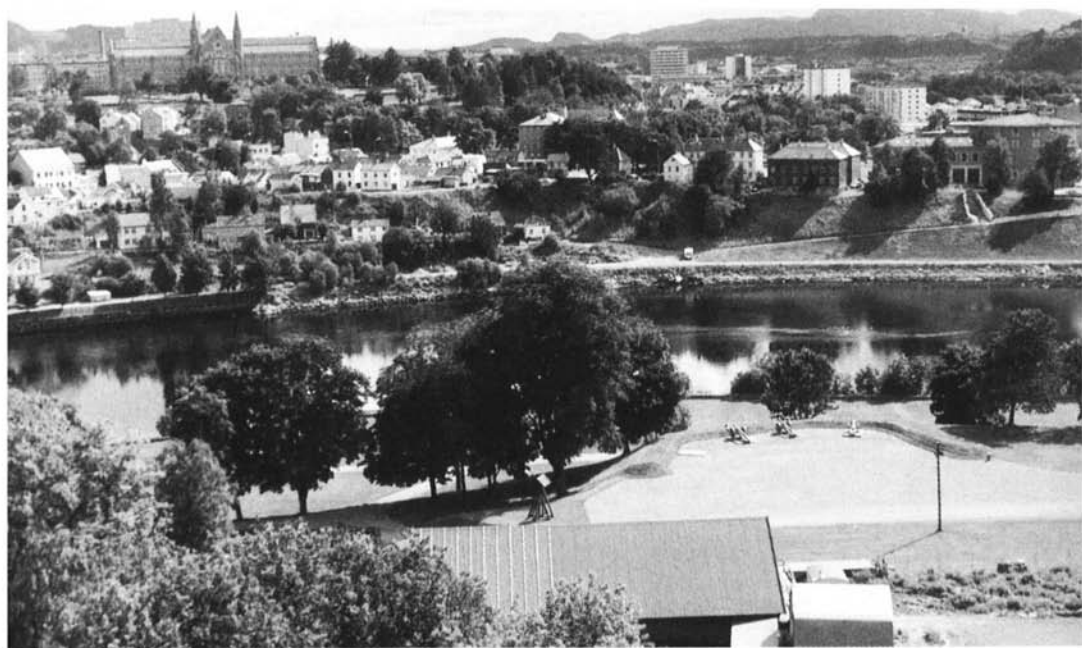


「さて、これからどうしよう。子供の寝る場所を考えなくちゃね。食器も船便が着くまで当座のを探さなくては」と話し合っていたとき、「ドンドン、ドンドン」とドアを勢いよく叩く音がした。

開けてみると頭のはげた雲をつくような大男（とそのときの私には思えた）が立っており、大きなよく動く目をギョロツとさせて、「デイス イズ バルケン」と大きな手を差し出した。

これが今後夫が師事することになっているバル

オーロラと白夜の国



トロンハイムの町

ケン教授との最初の出会いであった。

バルケン氏は部屋の中の様子をすばやく見てとり台所も調べ、「何か足りないものはないか」と尋ねた。夫が「子供のベッドがないので、明日にでも古道具屋を回って探すつもりです」と答えると、またも目をギョロツと動かして、「頭というものはサッカーでヘッディングをする時と仕事をするために使うもので、そんなことのために使うもんじゃない」と言って、どこへやら電話をして忙しく話している。その結果あれよあれよという間に、子供用の二段ベッド、四人分の食卓と椅子、大きい冷凍冷蔵庫が運び込まれ、当座の食器と鍋類も必要最低限のものが揃えられた。まるでアラジンのランプである。

「これでよし、次は町だ」と言って、バルケン氏は二十年以上はゆうに乗っているという年代物のボルボに私たち四人を詰めこみ、市街へ向かって車を走らせた。「明日から大学へ通うには、この道を歩くといい」と地図まで準備して教えてくれる。

後でわかったことなのだが、このバルケン氏おすめの通勤コースは実は最短距離でなく、最も美しい風景のコースであった。

町ではどこにどのような店があり、観光名所はこ

こ、と説明。ノルウェー第三の都市とはいっても人口十五万の小さな町なのだから、二十分ほどで中心部はひと回りできる。最後にバルケン氏は港の船着き場へ行き、漁船から茹でたての小海老を



一リットル買い（五百円）、剥きかたの実演までやってみせた上で、「夕食のおかずはどうぞ」と差し出した。

## 高い物価

さて翌日からいよいよ「生活」が始まった。スパーは言葉を使わずに買い物ができる点で実に便利なものだが、全ての品物がノルウェー語表示（あたりまえ）なので、パッケージを眺めてもさっぱり分からないものがたくさんあった。ノルウェー語の辞書がないので、「英語―ノルウェー語」の辞書を引いて買い物のメモをあらかじめ作ってから行く。しかし、砂糖は辞書では「スツケル」なのに、実際の店頭では「メリス（粉砂糖）」と「フアリン（グラニュー糖）」という名前なので、砂糖を買うのに二、三日も悩んだ。小麦粉や牛乳も種類がやたら多くて、あけてびっくりということが多かった。

ようやく買い物を終えてレジで日本での買い物の感覚でお金を出すと、まず足りない。あきれるほど物価が高い。卵一個四十円、小さな雛鳥一羽千円、片手に乗るような白菜三百円、野菜の種類が極端に少ない。それでも生活必需品は政府の補助があるとかで、牛乳、バター、チーズ、じゃが芋、パンなどは日本の半額程度だろうか。米も安くても一キロ二百二十円くらいで助かった。豚や牛肉は日本より少し安い程度である。嬉しかったのは、

船着き場の漁師の船から取れたてのニシン（キロ二百円）やタラ（キロ四百円）が買えることである。時には生きたカレイもあった。

すぐそばの魚市場に行くと、きれいにおろした魚が買えるが、値段は三倍になる。要するに人件費が高いので、人の手にかかると何でも高くなる。外食などしようものなら、ちょっとしたランチでも二千円はかかり、とても手が出ない。日用品、特に紙製品も高く、ティッシュが一箱五百円もして、ついに滞在中一度も買わずにすました。

夫は夫で、大学の帰りに彼の必需品である酒屋を探していたらしい。ようやく探し当てたのは二週間後である。酒屋はすべて公営で、お酒はカウンターでリストを見て指定したのを棚から出してもらって買うというもののしきで、その酒屋も市内にたったの五軒しかない。その上高くてウイスキーが日本の倍以上はする。幸いビールだけはまあまあの値段でスーパーで買える。

いったいノルウェーの人は酒を飲まないのだろうかと思ったが、ワインやビールを簡単に自家醸造する材料をセットで売っていることを後で知った。まあまあのワインが二十五リットル四千円でできるのだから、夫が挑戦したのは言うまでもない。

九月の初め、郵便受けに「ロッペマーケット」のチラシが入った。ロッペは蚤、蚤の市である。教会や学校のクラブなどの資金稼ぎのために、中古家具や、中古衣類、日用品などの盛大なロッペマーケットが時々開かれる。ベッド、自転車という大きなものからこれわかれたコップまであらゆるものがある。

私たちはしばらくロッペマーケット通いに病みつきになった。生活必需品は探せばたいい見つかる。アジア、アフリカからの留学生はもちろんのこと、ノルウェー人学生や近所の人も掘り出し物を探しに集まってくる。売り子はたいてい小学生で、首からお金を入れる大きな鞆を下げて売り込みに懸命だ。少し値切ってみると、まじめな顔で悩んでまけてくれるのがとても可愛らしい。私たちはここで中古のスキーとスキー靴を四人分見つけて大喜びした。少々オールドファッションだったけど、これでふた冬充分にスキーを満喫できたのだから有難かった。何しろ一組二百円だったのだから。

高い物価の中でも人々の生活のしかたは案外簡素なので、暮らしようによっては日本よりむしろ安く生活できる感じだ。家計簿をつけながらここで生活していく自信がわいてきた。——つづく——



## TOEIC 挑戦!

国際的な実用英語の資格として若い世代に人気上昇中の、TOEIC (国際コミュニケーション英語能力テスト) に、オバサンも挑戦してみませんか。

独学独習というものはなかなか難しく、とくに主婦は挫折しがちなものですが、グループ学習ならばおたがいに刺激しあえ、また、ヒヤリングテープなど教材費の負担も軽くなると思います。できれば再就職情報の交換な

でもしたいものです。

とくに柏・松戸方面の方々のご参加を希望しています。興味のある方左記までご連絡下さい。

◆連絡先 〒277 柏市増尾三六一  
二八 四方愛子

## お願い!

牛乳パックを使って作る「すべり台」の作り方をご存知の方がいらっしやいましたら、教えていただけませんか。また、牛乳パック、クリーニング店の針金ハンガーを再利用して作る各種用品(おもちゃ、バックで作る手すき和紙の私製はがきは除く)の作り方のアイディアをお持ちの方、作り方の本などをご存知の方もよろしくお願い致します。

◆連絡先 〒251 神奈川県藤沢市  
大鋸一〇一四 小倉莊第一  
一〇三号上野由紀子

## 本の紹介

### 『男の子の育て方』

わが子を「いいオトコ」に育てるには

佐藤洋子 著

著者は現在、朝日新聞編集委員で、かつて紙面連載のルポ「女の子はつくられる」を担当した人。一人息子が生まれたとき「できるだけ男女差のない育て方をしたい」と夫と話し合った。

しかし、テレビにも絵本にも類型的な性別役割分担が何の疑問もなく登場し、世の親達も教師も既成の男女観で子供を見ていることの何と多いこと。常識と想われていることに鋭い疑問を抱き、女性の視点で男の子の成長を観察した一冊である。

教育史料出版会 一二三六円



## 私のPR

### 「コスミック・クリーン」

「一二二号」ズバリ一言「合成洗剤をやめよう」でご紹介しました「コスミック・クリーン」を

実費でお譲りします。せっけん洗剤よりも汚れおちがよく、食べても安心、手荒れも治ってくるし、すすぎも早い。

台所用三百五十円、洗濯用千五百円、多用途(原液)三千円です。原液はうすめて台所、洗濯、そうじ何にでも使えます。スプレーガン五百円はうすめ用容器で目盛りつき。

資料請求は六十二円切手同封の上手紙で、またお申し込みはハガキでどうぞ。人数がまれば出張説明も行ないます(無料)。

◆申込み先 〒255 神奈川県中郡大磯町大磯一七六 小嶋みどり

不ぞういな  
カエル  
たち



うちには  
カエルが  
いるー。

田井亮子



そのかたに  
ゆれなきインパクト











羽生槇子著

「ほんとうの詩人」の書いた詩には、いうにいわれぬ香りがあって、読んだとたんにすぐ見分けがつく。そういう詩人の一人である羽生さんは、横浜の郊外で畑を耕しながら、もう何冊もの詩集を出版した。畑の野菜や、鳥や、動物を題材にしたもの、チェルノブイリ事故で象徴される自然破壊への悲しみ、これまでうたってきた内容とかさなる

詩も多いけれど、最新のこの詩集は、タイトルの語っているように、いささか違う香りを放つ。「横浜積雪三十七センチ」というしんと雪のふる夜 ふうけ 雨戸をあけるとほのあかりではだして庭に出たくて 出てみると雪にねてみたくて 雪にねてみた（……） 透明でそぼく言葉の美しさ

は、あくまで自然のなかに暮らす日本の女の子のそのような気がする。  
「子どものころは一つの春が永遠であり、一つの夏もまた永遠ほどに長かった。なんとその『時』がなつかしいことだろう」と書く著者は一九三〇年生まれ。詩の力で「永遠」を掴みとる。  
ウイ書房 一五四五円（Ｔ）

医師と弁護士が追跡する

本田 勝紀 著  
弘中惇一郎

「医療事故」と聞くと、私たちはよほど運の悪い人がたまたま遭遇する他人事のように考えてしまう。ところが本書に紹介された二十四の具体例の検証を読んでいると、決して他人事ではなく、いつでも被害者になる危険と背中合わせにしていることに気付かされてぞっとする。

いわゆる誤診による死亡、後遺症の例。手術時の技術ミスによる腹内大出血、死亡の例。点

滴管理ミスで空気流入、重度の脳障害が残った例。大学病院に高水準の医療を期待して入院したばかりに、まだ一般化していない先端的治療を行なわれ、その結果による悲劇など。さらにこの情報化社会にあって、医療の世界が、あまりに密室的で、一方的なことも分かる。

本書はこうした被害者の貴重な体験例をあげて、医師と弁護士がそれぞれの立場から警告し

ている。私達が医師、病院そして医学を信じて生命を預けるその現場が、これほど危険と隣り合わせだとしたら、一体どうしたらよいのだろうか。その点に関しては第二章でばっちり情報を与えられているが、不幸にして入院する羽目になっても、自分の生命を決して「あなた」任せにはしていないことをこの本は教えてくれる。

有斐閣 一六四八円（Ｓ）

百合子、ダス ヴィダーニヤ

湯浅芳子の青春



沢部仁美著

宮本百合子の小説に親しんだ人なら「二つの庭」「道標」などに登場する百合子の友、「素子」を知らぬはずはない。その素子のモデル、ロシア文学の翻訳家である湯浅芳子の生涯を、百合子との交情を中心として描いた力作。現在九十四歳の湯浅氏は、無名の筆者の情熱にうごかされて若き日を語り、資料を提供したのだった。

とかく百合子の作品のなかのイメージでのみ固まりがちな芳子の実体を伝えてくれる点で、この作品は貴重なものだが、何よりも、二人の女性の間にかわされたほとんど恋愛にも似た強烈な愛が、当時の手紙や芳子の記憶をもとに再現されているところがすばらしい。性格の差、生まれと教養の差、しかし人間としての真摯さと高さを共有す

る二人が、互いを引き合い、高めあい、ついには苦しみあい、最後には決裂するドラマ。「べこは、もやになら歓喜の涙をこぼして殺される。そんなに好きだ。もやが薄情女というのと、何と云おうと、好きだ、好きだ」(百合子から芳子へ) 愛とは何だろう。その不思議を考えずにはいられない一冊だ。

文藝春秋 一六〇〇円 (K)

ジュニア・クッキング おべんとう コミック版

中学生・高校生向



家庭科教育研究者連盟編  
まんが=アオ キリン

「おべんとうなんて、前夜の残りものを詰めるだけよ」という人には、要らない本である。いや、そういう人にこそ、見てほしい本である。コマまんがで、わかりやすいので、思わずひきこまれてしまう。よく見ると、中、高校生向きとある。「なんだ、そうだったのか」と結局、最後まで見てしまう。

なんていう気にさせられる。じつに楽しい本である。初歩的なものから、本格派まで、そろっている。「はじめてのランチ」にはじまって「おねぼろ弁当」「ヘルシーランチ」「プレゼントランチ」……「リサイクルランチ」にいたっては、思わず笑ってしまったネ。おかずの組みあわせ、くさらない工夫なども「べんとうのはなし」の中に、ちゃんと入って

いる。「サンドイッチを切るとき、包丁を少し火であぶるといい」のような、さりげない注意もところどころに見られる。母が子にプレゼントするのに恰好な本である。良い子だったら、必ず、親の意をくんで、おべんとうづくりに熱中し、徐々に、その作業から、母を解放してくれることだろう。

大月書店 一二〇〇円 (Y)

# わいわい がやがや

## みんな悩んで デブになる

神奈川県横浜市●織田裕子

「そのお菓子一つとって」  
と息子に頼み、一口はおぼろ。  
おいしい！ もう一個と思うが、  
手放しておいしいとも喜べない。  
「太れるってことは健康な証拠  
よ」  
と以前、胃弱で悩むやせ型の友  
人に羨ましがられ、それもそう

ネと納得したこともあった。食  
事がおいしいことも幸せなこと  
だと本気で思う。

でも、中学時代の友人と先月  
箱根旅行をした折に、

「背中に肉がごっそりだよ」

とあけすけに言われてしまった。  
それともう一つのきつい一言は、

「そんなに首が短かった？」

その昔、私は彼女と同一人物  
を好きになり、こっちが確実に  
分がよかった。それなのにただ  
今のこのスタイル。それにちょ  
っと血圧も高い。友人達との会



話も、情けなくも肥満の悩みが  
必ず一度は出る。いわく、入学  
式の洋服がきついだとか、タッ  
クをたたんだブラウスが着やす

いとか……。

阿部さんのタイトルを拝借し  
て申しわけないが、みんな悩ん  
でデブをやっているわけだ。新  
聞や週刊誌によるとエステー  
○番には、やせないとの相談電  
話が頻繁だという。

あーあ、太る心配をしないで、  
思いっきり飲み、食べたい。

## 声に出して みる!!

東京都東村山市●長井淳子

辞書をひくと、朗読とは「声  
をあげて詩歌や文章を読むこと」  
とある。我が身をふりかえって  
も、とんと声を出して読む習慣  
はない。

とかく私たちは「読むことは  
読めても、さて書けとなると字  
を忘れてるわ」などと言い合  
う。くずし書きになれてしま

と、正確な漢字の書きとりがで  
きなくなっている。それにもま  
して、読みという点でも果たし  
てどれだけ読めているものか、  
急に気になり出した。

というのは、TVのレポータ  
ーが、ある事件を取材しながら  
「〇〇は、あたりをモノイロしな  
がら云々……」と言うのに仰天  
したからである。明らかに「物  
色」しながらの意味なのである。  
世間にはホコトン代議士と呼ば  
れた人もいたし、思い違いやま  
ちがって覚えこんだりした挙句  
のあやまりもある。私だって知  
らぬ間にどんな恥をかいている  
やら、自分が気づかないだけな  
のだけだ。

最近、私はある俳句の会に入  
ったばかりで、月に一回の句会  
に出席している。そこでは交替  
で選句を披露するのが、この  
時もまた、俳句をやっている割  
には、余りにもお粗末な読み方

をする人が多いのにおどろいたものである。

自分のことを棚にあげて他人のアラさがしをしたり、馬鹿にしたりする気持ちは毛頭ないことを弁解しながら、あえて言う、十人中六人までが、ボソボソと聞きとりにくい声で、つかえたり読みちがえたりしているのを聞くと、折角の俳句も味わいが減少するのである。これ



はひとえに、声に出して読む機会がないからだと思う。

わずか十七文字の俳句だから、最初に目で読んでから声に出してみれば、余程のむずかしい表現を除けば、よどみなく読めるはずだと思うのだけれど――。

## やつぱり続けよう、わいふ

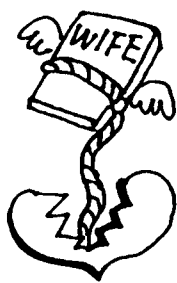
東京都目黒区●田川哲子(30歳)

わいふを読み始めて、一年になる。年齢層の広いごく普通(?)の人たちの投稿というところが新鮮で、嬉しくて初めのころは、なめるように読んでいた。初めて投稿した拙文も載せて

いただき、どんなものでも載せてもらえるんだなあといい込んでしまった馬鹿な私。その後投稿したものがない(今となっては恥をかかずにすんだことを感謝しています)改めて自分の勘違いに気がついたのだ。

そしてわいふって雑誌は、一体なんだろうなと漠然と考えていたとき、ふと手にとったクロワッサンに、わいふのことが載っていた。宮前和さんいわく、

「自己主張はしたいけれど、自分の中ではつきりしていない部分が多く、ちょっとグチャッたりモンモンとしたり……」(ウワ―まるで私のことだ)とへんに



感激したものの、唸りたくなるような適切な分析に複雑な思いがよぎる。

しばらくして、わいふもうやめようかなと思っていた矢先に送られてきた二三号と共に、購読料切れの通知が入っていた。ばらばらとめくりながら、やっぱりもう一年購読しようと思い直した。自分の母やそれ以上離れた年代の方の本音の投稿をし

みじみと味わるのは、今のところわいふ以外にないもんな。

(元・小宅昌枝)

お友達に△わいふ▽をおすすめください

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

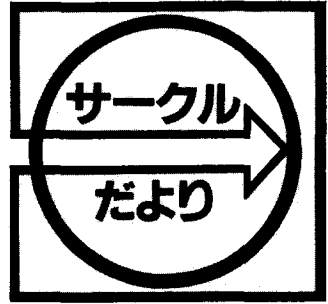
●定期購読者をお一人ご紹介下さるごとに、誌代プラス送料とも一回延長。

(六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります)

△わいふ▽年間分をプレゼントにお使い下さい。

●ご結婚、赤ちゃんご誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。



## 「わいふヤング ママサークル」を つくりませんか

「わいふ」の読者の中で、小さいお子さんをお持ちのお母さん方。「わいふ」のことを語り合いたいけど、子供が小さいからまだだめだわ、とあきらめていませんか？

確かに子供は世の中の迷惑。それならいっそ子連れでワイワイガヤガヤみんなで話しあうサークルをつくってみませんか。出席するのが大変な方は、少々

古い手だけど、回覧ノートや会報発行なんてのはいかがでしょう。

もちろん年齢制限もありませんし、お子さんが大きい方でも結構。

こんなサークルにしたいなどのアイディアも添えて、ともかく一報を！

◆連絡先 〒241横浜市旭区中白

根二―一五―二馬場直子

TEL〇四五―九五四―五五三三

## 福岡市および 周辺に

## お住まいの方へ

誕生間もない福岡サークルでは本音で話せる仲間を募っています。合評はもちろん、社会・教育問題、日々の怒りや笑いを共有する時間をもちませんか？

◆ご連絡お待ちします。

◆連絡先 川谷由紀子

TEL〇九二―五六六―一一六四

## 「わいふ仙台 サークル」への おさそい

昨年の七月七日、石川光子さんが発起人となり第一回のサークル会が開かれました。第三木曜日にエルパークで集まっていますが、会員が集まりにくく、



第三土曜日の午後二時からになりました。「わいふ」の合評をしたり、話題になっていることをテーマにして話し合っています。子連れOK。

何かをしたい人、元気になりたい人、ご連絡ください。

◆日時 毎月第三土曜日 午後

二時～四時

◆会費 なし

◆方針・会則 今のところない

が何かしたいとは思っていません。

◆連絡先 立花由利 TEL〇二二―二七八―七五九三

## 「名古屋サークル」 だより

「わいふ」名古屋交流会は、五年目を迎えます。偶数月は、「わいふ」本誌の合評、奇数月は会員が各自書いてきた原稿の批評等を行ない、毎月交流会だよりを発行しています。「ここに来ると、何となくホッとするの」と言いながら小人数で楽しくやっています。一度のぞいてみませんか？ 年会費は二千元です。

◆問い合わせ先 TEL〇五二―八三一―八四三七吉田



# 次号投稿募集

## ▼特集テーマ原稿

二二五号のテーマは、「見合いから結婚へ」です。

これほど自由な世のなかになっても、男女の出会いは意外なほど限られています。そこで「お見合い」でパートナーを見つける方法も思いのほかすたれていません。ということで、あなたご自身、あるいはお子さんのケースでもよろしいのですが、「お見合い」から結婚へいったケースのさまざまな経緯、そのプラスマイナス、結婚してみて、やはり恋愛結婚とはここが違うなあ、という感想などを含め、見合い結婚の現実というものをリポートしてください。四百字詰原稿用紙十五枚前後。

## ▼ワンポイント情報

次回は「教師の『セク・ハラ』」です。教師がわいせつ行為のはてに教え子を殺した、というショッキングな事件がおこりました。思えば「わいふ」への投稿のなかにもその経験を語るものがあり、こうした

教師は以前から意外に多く存在していたのかも知れません。

直接的なわいせつ行為だけでなく、さまざまなかたちで性的ないやがらせとなる行為やことばを教師から受けた体験のおありの方、今回はそれをレポートしてください。

その前後の状況、そのときのあなたの対応、そのあと誰かに訴えたかどうかも含めてどうぞ。八百字前後。

## ▼わいふ討論会

次回は「三世代同居の体験」です。

最近首都圏で建設される個人住宅の八割が三世代同居スタイルのものだといわれています。地価がこれほど高くなってしまういま、それも無理のないことではあります。しかし三世代同居に問題点が少なくなっただけではありません。

あなたのご体験のなかから、ここが言いたい、とお思いかた、どうかご参加ください。もちろん「よかった」という体験をおもちのかたも歓迎します。誌上匿名可。

日時 六月二十二日(金曜日)P・M二時から編集部で。六月十八日(月曜日)までに電話でお申し込みください。

## △氏名、住所を秘密にしたい方△

誌上匿名は自由です。原稿への書き方は投稿規定をごらん下さい。

さらに住所(県、市、町)もあきらかにしたくない場合は、その旨原稿の最初に(らん外にでも)お断り下さい。「地域の会員を知りたい」というお問い合わせがときにあります。その場合も住所氏名を知られたくない方は、あらかじめ編集部へお申出下さい。

「この文を書いた方に連絡を取りたい」という問い合わせには、書き手の方にはハガキでご連絡し、直接返事をしていただいています。

## △仕事をしたい方へ△

以前首都圏内の読者へ(どんな仕事でしたいですか)というアンケートをお送りしたことがありました。その後の新会員、以前と状況が変わって、働けるようになったという方にも、ご希望があればお送りします。編集部までご一報下さい。

# わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも（男性でも）投稿できます。原稿には住所氏名を（都道府県名から）明記のこと。誌上匿名・ペンネーム可。

●次のコラムを設けています。

・エッセイスト・クラブ（二六〇〇字まで）

随筆の楽しさを十分に味わわせてくれるよい文章をお待ちします。

・ズバリ一言（八〇〇字まで）

マスコミ、事件、商品、サービスその他、目にふれ耳にきき手にするものに、どうしてもこれだけは言わずにいられないという「もの申す」の欄。改善への具体策の提言もどうぞ。

・私の生活エリア（一六〇〇字まで）

全国各地からの地域紹介レポートをお寄

せください。名所旧跡、美術館などの見どころ、名産品、おいしいものの案内、買い物、食事どころの穴場など、住んでいる人でなければ提供できない情報をどうぞ。写真をそえてください。（絵はがき、パンフも可）

・奥さんから外さんへ（一六〇〇字まで）

いまや家から外へ、既婚の女性がどんどん進出しています。どうして、どうやって、何のために、あなたは奥を捨てて外へ出たのか。職業ばかりでなく、趣味、市民運動、どんな目的のためでもよいのです。家族の反響、得たもの失ったものetcをお書きください。

・マイ・ジョブ／マイ・プロフェッション（一六〇〇字まで）

あなたのしていらっしゃるお仕事の内容、どんな技能、どんな適性が必要とされるのか、などをレポートしてください。保険の外交、校正の仕事、陶芸、八百屋、何でも。

・サブリリース（八〇〇字まで）

本誌の投稿や記事についての反響をおのせします。感想、反論、なんでもどうぞ。

・一人一芸（一六〇〇字まで）

音楽、絵画、お茶、お花、染色、バレエ、日舞、ヨガ、はてはマージャンからパチンコまで、あらゆる趣味活動の面白さを知っているかた。それを身につけたプロセスと、必要な適性、上達の秘訣、醍醐味、長続きのこつなど、その苦しみと楽しみをレポートしてください。

・人間マンガラ（一六〇〇字まで）

あなたにとって忘れられない人の姿を描いてください。もちろん家族の一員でもよいのです。

・親の言い分・教師の言い分（二六〇〇字まで）

それぞれ重い問題を抱えながら、面と向かっては言えない関係。教師から親へ、親から教師へ言いたいことを率直に言いあってみましょう。抽象論でなく、それぞれが抱えている問題を具体的に書きください。

・フリースペース（八〇〇字まで）

どんなテーマでも書けます。思想・信条にかかわらず、一〇〇〇字論の自由のある「わいふ」ならではのコラム。

・わいわいがやがや

六〇〇字以内で。誰でも気軽に書けるコラム。



・読んでみました(ハ〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

・情報コーナー(ハ〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交換、相談、なんでも。なるべく短く、要点をまとめてください。

・サークルだより(ハ〇〇字まで)

「わいふ」には読者が連絡をとりあい、自主的に作ったサークルがあります。作りたい、というよびかけ、こんな活動をしました、これからしますからご参加を、などというおたよりをどうぞ。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●以上、締め切りは原則として偶数月の二十五日。それ以後についたものは、次号まわしとなります。

規定枚数はより多くの投稿をのせるために、もって戴きたいと思えます。ただし内容がよければ、多少オーバーしてもおのせします。

## コラム以外の投稿募集

・特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

・ワンポイント情報

一つのもの、または事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定しますで、募集欄をごらん下さい。

・特別寄稿 ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も自由。

本誌に適當と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推せんします。

本誌掲載の場合は薄謝をさし上げます。

・絵・カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、合わせてお送り下さい。

## 注意

●投稿は一人一篇に限ります。ただし次のコラムへのご投稿とはだぶってかまいません。情報コーナー・ワンポイント情報・サーブレイブ・サークルだより。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みです

ので、ヨコ書きはご遠慮下さい(書き直すことになるので)。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送り下さい。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に、住所・本名はそのすぐあとに並記して下さい。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書き下さい。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。ペンネームをいくつも使い分けるのも、ご遠慮下さい。居住地もとくに理由がなければ記載したいのではありません。

ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価したいと編集部では考えています。濫用は避けていただきます、ということです。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断り下さい。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下にアラビア数字で。

●二重投稿は固くお断りします。

●ワープロ打ち原稿の字づめは、二十字で行間、字間をあまりつめないように。

## 編集だより

●最近、ページ数の多い力作のご投稿が大幅に増えてきました。そのこと自体は嬉しいことではありますが、逆に短いご投稿がだんだん手薄になってくるようで気になっています。典型的なのが「わいわいがやがや」の欄。四百字ではあまりに短すぎたので、八百字に増やしてみました。思わしくありません。

短い文章では意をつくせない、とお考えかもしれませんが、しかし短い文にふさわしいよいテーマというものもあるのです。

ゆきずりの人との思いがけないやりとり、親しい人であってもその部分だけクローズアップしたくなるできごと。無造作ななかにきらりと光る文、いきいきとした生活感に溢れる文、現代生活を小刀できりととってみせるようなそれが「わいわいがやがや」の面白さです。

「わいふ」ならではのみずみずしい短文を、どうぞお寄せください。

●「塾の教育システム」の連載の第一回に

「公文式」をとりあげましたら、三人のかたから手厳しい非難の声が寄せられました。いずれも「あんなもうけ主義の塾をとりあげるなんて」「機械的で考える力がつかない」という非難です。

しかし今回の連載は、企業としての塾の組織の裏側を取材するものではなく、純粹に何をどう教えているかの内容だけにしぼっているのです。

どの塾で、どんな内容の教育をすすめているのか。子どもへの影響は？ 学力はほんとにつくのか、などなど。

そこを客観的に追求してみる、というところが取材の目的なのです。

公文式とはまったく対照的な塾もだんだんに登場しますので、どうかすこし気を長くしてお待ちになってください。

●二四号での「わいふ討論会」のタイトルは「女にとつての政治——なぜ女性議員を選ぶのか——」でした。次号投稿募集での呼びかけにメインタイトルがぬけていました。訂正しておわびいたします。

●ではご投稿をよろしく！

### □購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。

すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上とまりますと送料が半額以下になります。

### わいふNO.224

(隔月刊)

1990年7月1日発行

編集・わいふ編集部

定価460円(本体447円)

(年間購読料送料共4020円)

印刷・平河工業社

発行所・(株)グループわいふ

東京都新宿区市谷加賀町2-5-23

〒162 TEL (03) 260-4771・4773

郵便振替 東京 5-110430

加入者名 わいふ編集部

### □購読継続・中止は……

必ずお申し出下さい。

送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひ葉書か電話を。



**有斐閣 出版案内**  
(定価は税込み)

東京都千代田区神田神保町2-17

# 21世紀への医療

これからの医師の条件

河野博臣編

四六判上製カバー付  
定価一八五四円

地球の危機と人間の危機に、医師はどうあるべきか。臓器を治す20世紀の医療を超えて、人間を癒す21世紀の医療を準備するための、全12章からなる連続対談集。医のポストモタンを模索する。

ホリスティック・メディスン

飯尾正宏・河野博臣著

四六判定価一五四五円

癌患者の生を考える Quality of Life  
とは何か

武田文和編

(有斐閣選書) 定価一四四二円

ガンを告げる ●討論II 家族+  
医師+法律家

加藤一郎・高久史磨ほか編 四六判定価一二三六円

## 検証 医療事故

●医師と  
弁護士が  
追跡する

本田勝紀・弘中惇一郎著

四六判定価一六四八円

24の医療事故につき(事実経過)(医学的問題点)(法律的問題点)(周辺の問題)(判例メモ)の5つの視点から徹底分析し、対処の仕方もアドバイス。

●中学生をその気にさせるお弁当入門



B4判変型・1200円  
(税込)

家庭科教育研究者連盟編

初歩から本格派まで、わかりやすくコマまんがでづくり方を解説します。前夜の準備で朝の負担を軽くしたり、つくる気になるきっかけづくりなど夜型の中学生をその気にさせる工夫を満載。



大月書店

東京文京本郷2-11-9/電話03(813)4651

「女の人権と性」シンポジウム有志編

# 沈黙をやぶった女たち

青木やよひ  
芦野由利子  
金住 典子  
草野いづみ  
駒野 陽子  
田中喜美子  
堂本 暁子  
丸本百合子  
宮 淑子  
ヤンソン由実子

●映画「中絶—北と南の女たち」をめぐる

中絶の問題に真向から取り組んだ映画に寄せられた女たち・男たちのホンネの声をもとに、中絶と女の人生、女の選択、生命を考える、女と男の関係性、国家と性、などの視角から中絶の現状と今後を考えます。

シリーズ〈女・いま生きる〉29・1545円

## セルフ・カウンセリング

\*ひとりでも  
自己発見法\*

渡辺康廣著 あなたにとってかけがえのない人生を幸せに生きるため、あなた自身によってできるカウンセリングがセルフ・カウンセリングなのです。用意するのは紙と鉛筆。あなた自身を見直し、相手を見直すことによって、新しい気づきが生まれます。その新しい気づきは、相手とあなたのかかわりを変えていくでしょう。 一五〇〇円

一番ヶ瀬康子編著

現代の社会福祉Ⅰ

## 新・社会福祉とは何か

子供、障害者、高齢者そして生活の問題と、社会福祉とわたしたちのつながりは、今日ますます深く強いものとなり日本人の生活を支えています。図や写真を用いて第一線の研究者がわかりやすく書き下ろす、「現代の社会福祉」です。 一六〇〇円

## 大衆長寿時代の生き方

濱口 晴彦 編著  
嵯峨座晴夫

いわゆる「高齢化社会」という言葉は、お年寄りが同身を狭くして生きる社会のことという印象が強い。そういう発想ではなく、一人ひとりの生き方、「生活の質」を問い直すなかから、大衆長寿時代のゆたかな生き方を具体的に提言する。 一八〇〇円

## あしたへの老年学

## 地域医療への模索

岡村重夫監修 大阪府立老人  
総合センター編 一七〇〇円  
医療の充実をめざす山口  
県連絡会編 一八〇〇円

価格は消費税こみです

ミネルヴァ書房

京都市山科区日ノ岡堤谷町1  
〒607 ☎(075)581-5191代